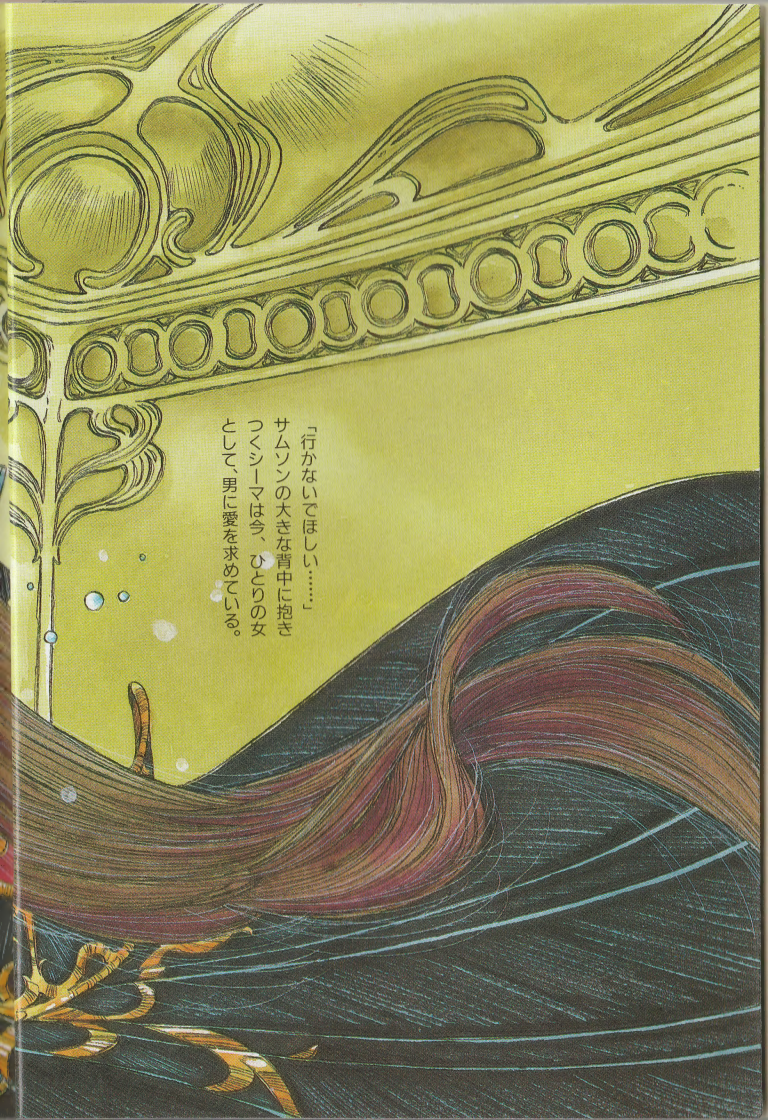
Fire Emblem
ファイアーエムブレム　紋章の謎 VOL.3
●小説
高屋敷英夫
●イラスト
おち よしひこ
SUPER
QUEST
BUNKO
©1990、1993 Nintendo

SUPER QUEST
BUNKO
ファイアーエムブレム
紋章の謎
VOL. 3
●小説
高屋敷英夫
●イラスト
おち よしひこ

行く手を　拒むもの　まず死の砂漠ありき
灼熱の太陽と　激しい砂嵐
凶暴な　砂の部族と　空を飛び交う　飛竜の群れ
古の　幻の街を　仰ぎながら
我はただ　立ち竦(すく)むのみ——

（本文より）

SQ

ファイアーエムブレム
紋章の謎

「行かないでほしい……」
サムソンの大きな背中に抱き
つくシーマは今、ひとりの女
として、男に愛を求めている。

獣と同じでありながら、
本能的に神殿を守ろうとす
る氷竜たち。白い体には獰
猛な悲しさを宿す……。

スーパークエスト文庫

SUPER QUEST
BUNKO

ファイアー エムブレム
紋章の謎 VOL.3

高屋敷英夫

イラスト
おち よしひこ

小学館

ファイアーエムブレム紋章の謎 ──登場人物紹介──

アリティア王国

予期せぬ企みにより、王国は再び戦火にまみれ、そして城はアカネイア軍の手中にある。

マルス
アリティア王国の王子。この物語の主人公。

ジェイガン
騎士団軍師

エリス
アリティア王国の王女。

アベル
退役し武器商を営む。

カイン
王国の留守をあずかる。

ドーガ
傭兵部隊長

ゴードン
弓部隊長

アラン
騎士団隊長

◀ルーク

◀セシル

◀ライアン

◀ロディ

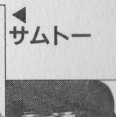
◀レイソル

▶カシム

◀ナバール

▶ウォレン

◀サムトー

▶サムソン

マケドニア王国

仕組まれたクーデターは鎮圧され人々は王国再建に取り組んでいる。平和を願って…。

マチス

パオラ　カチュア

エスト

タリス王国

ドルーア戦争後、マルスが落ちのびていた辺境の島国。2年間をこの国で過ごした。

シーダ▶
タリス王国の王女。

◀オグマ

グラ王国

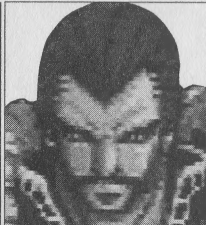
陰謀がうずまく小国。美しき王女は王国の平穏をもたらせるのか…。

シーマ
グラ王国の王女。

カダイン

アカネイア大陸の聖地。魔道を学ぶ学院がある。

エルレーン

ウェンデル

マリク

◀マリーシア

◀リンダ

◀フィーナ

▶仮面の騎士シリウス

▶ジョルジュ

◀大賢者ガトー

◀バヌトゥ

▶チキ

▶チェイニー

◀ハーディン
アカネイア帝国皇帝。

ニーナ
アカネイア帝国王妃。

ウィロー▼

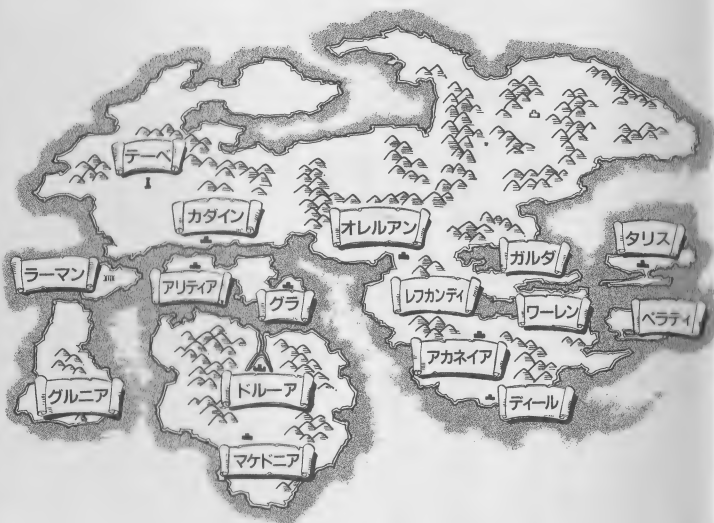
エイベル▼

▲アストリア

目次

ファイアーエムブレム 紋章の謎 VOL.3

アカネイア大陸 全域

テーベ
カダイン
オレルアン
ガルダ
タリス
ラーマン
アリティア
グラ
レフカンディ
ワーレン
ペラティ
アカネイア
グルニア
ドルーア
ディール
マケドニア

前巻のあらすじ

アリティアの遠征隊がグルニアに出発してから二箇月後のこと。
桜が満開のホルム海岸で、マルスたちはグルニアの王子ユベロと王女ユミナを連れて逃げのびていたオグマ・スビルとやっと再会した。
だが、その夜、海賊レイソルの館に世話になっていると、アリティアに滞在しているはずのタリス王国の王女シーダが突如やって来て、驚くべき事実を告げた。
アリティア城がアカネイア軍の奇襲を受け、騎士団が全滅、城はアカネイア軍の手に落ちた――というのだ。
マルスや騎士たちに大きな衝撃が走った。
このとき初めて、マルスたちはグルニア遠征はハーディンによって仕組まれた罠(わな)だったと

いうことを知った。
マルスたちは悔しさと怒りに涙を流しながら「祖国奪還」を固く心に誓った――。

その後、海賊レイソルの船団でグルニアに上陸した遠征隊は、グルニア解放のために、ラング将軍の居城であるオルベルン城へと向かった。
オルベルン城へ行くためには、オルベルンの町と旧王都サドリアの山間にあるキネラ砦を突破しなければならなかった。
この砦は、ラングの片腕であるトラース将軍が率いるアカネイア軍が駐留していた。
だが、砦の直前で、トラースの策略に嵌り、アカネイア軍に包囲されてしまった。
この危機を救ったのが、仮面の騎士シリウスだった。
砦に隠れていたシリウスが警備兵を倒して砦の門を開けると、砦は騒然となった。
その一瞬の隙をついて、遠征隊が一気に砦に雪崩こみ、トラース将軍を倒した。
さらに、旧王都サドリアの市民で組織された一〇〇〇名の解放軍が駆けつけ、砦と対峙していたアカネイア軍は慌てて遁走した。
このとき、マルスはシリウスと初めて会ったが、口に出してこそ言わなかったが、シリウスを一目見て、かつて王女ニーナの恋人で、先の戦争で戦死したと思われていた旧グルニア黒騎士団の名将グレイユ・カミュだ――と確信した。

また、シリウスは五〇〇〇人のオルベルン市民を解放軍として組織していた。
そして、翌日の夕方、遠征隊と五〇〇〇名のオルベルンの解放軍と一〇〇〇名の旧王都の解放軍がオルベルン城の前を埋めつくした。
そのなかに、マケドニアから援軍として軍船でやって来たマチスやパオラとカチュアの姉妹の姿もあった。
戦いは、思わぬところから火蓋（ひぶた）を切った。
旧グルニア兵だったアカネイア軍の雑兵（ぞうひょう）がアカネイア軍に反旗を翻（ひるがえ）したのだ。
その機に、遠征隊や解放軍はオルベルン城に突入した。
そして、遠征隊はラング将軍の首を討ち、グルニアは解放された。
また、遠征隊は地下牢（ろう）に捕らえられていたカダインの大司祭ウェンデルを救出した。
ウェンデルは、ガトーに与えられた大事な使命を果たすために旅を続けていた。
大賢者ガトーによると、この世界は不思議な力を秘めた光と、星と、大地と、命と、闇の五つの聖なる宝玉によって守られているという。
だが、先の戦争でガーネフの暗黒魔法マフーを破るために、ガトーは五つの宝玉のひとつである星のオーブからスターライトという魔法を作ったが、そのときの衝撃で、オーブは一二個のかけらに分かれ、何処（いずこ）へともなく散ってしまったのだ。
ウェンデルの使命とは、これらの一二の星のかけらを集めることだった。

オルベルンの町は解放の喜びに沸いていた。
町の広場や通りを埋めた解放軍や市民は拳をあげて国名を絶叫した。
やがて、その叫びがグルニア国歌に替わった。
人々はそれぞれの感慨を胸に、声の限りに合唱し、歌声は夜空にこだました――。

遠征隊は、「祖国奪還」を胸に、新緑のグルニア街道を北上した。
その道中、オグマの好敵手で、孤高の剣士として名高いナバール・ジョルダと、港町ワーレン出身で、旅芸人の踊り子をしていたフィーナ・セダカも仲間に加わっていた。
暦は五の月から六の月に替わっていた。
ところが、グルニア北部のカシミア地方で、アカネイアの大軍が待ち受けていた。
カシミア大橋があるカシミアの町と、カシミア近郊のトルタ砦、ディナ砦、ハザン砦の三つの砦に、それぞれ一〇〇騎の騎馬部隊と二〇〇名の歩兵部隊からなる軍団が、遠征隊の北上に備えて駐留していた。
そして、トルタ砦の指揮官はジョルジュ・ライオで、ハザン砦のそれはアストリア・ハイゼンだった。
二人とも、アカネイア騎士団の生えぬきの騎士で、先の戦争でマルスとともに最後まで戦ったが、戦後、アカネイアに帰国し、祖国再建のために、尽くしてきた。

さらに、海賊レイソルと親しい酒場の女主人に、
「ハーディン皇帝が二〇〇〇名の大軍を率いてカシミアへ向かっていて、明後日には、カシミア地方に駐留している全部隊と合流するのだそうです」
と、告げられ、マルスたちは愕然となった。
わずか五〇名あまりの遠征隊に比べて、現在カシミア地方に駐留しているアカネイア軍の総数は騎馬部隊四〇〇騎、歩兵部隊八〇〇名、それに二〇〇〇の大軍が加わるのだ。
カシミアから王都アリティアまでの行程は、徒歩でわずか一五日あまりだが、ハーディンの大軍の南下で、祖国アリティアへつながる道は完全に封じられてしまったのだ。
遠征隊の兵士たちは不安と焦りから苛立ちを隠せなかった。
そこへ、アリティアを逃れたカインがナーガ族の王の娘チキの守役であったメオラ・バヌトゥとともに遠征隊に合流した。だが、
「カイン！　よかった！　よくぞ無事で！」
マルスに固く手を握りしめられると、
「申し訳ありませぬ……！」
カインは土下座し、全身を震わせながら嗚咽した。そして、
「命に代えても……城と国を守らねばならぬのに……！　エリスさまをお守りしなければならぬのに……！　生きて……マルスさまに顔を合わせられる……立場ではないのですが……

せめて一度だけでも……マルスさまにお会いしてから……！　そう思いながら……恥を忍んで……必死に逃れて来ました……！」
激しく自分を責めると、自分の喉元に剣先を突き刺そうとした。
だが、間一髪、アランがその剣を奪い取り、他の戦士たちがカインを押さえつけた。
その直後、アランもまた大量の血を吐き、遠征隊はさらに重苦しい空気に包まれた。
ところが、翌日、遠征隊に思わぬ朗報がもたらされた。
海賊レイソルの配下の者が野営地を捜して来て、
「頭領の船団がトルタの港の近くに来ています」
と、告げたのだ。
遠征隊はさっそくその船団で聖都カダインに脱出することに決めた。
そして、レイソルの力を借りて、カシミア海峡を突破し、トルタ砦へ向かった。
このトルタ砦で、ジョルジュが遠征隊を待ち受けていた。
だが、皇帝に即位してからのハーディンの政策に不満を抱いていたジョルジュは、遠征隊に同行しているリンダから、ニーナがアカネイア王家の家宝である紋章の楯をマルスに託した——と、聞かされると、
「マルスさま、わたしも一緒に連れて行ってください！」
熱い視線でマルスに訴えたのだった。

そして、一時後、遠征隊はトルタの港で待機していた海賊レイソルの船団で聖都カダインへ向かった──。

ところが──。

安全だと思われていた聖都カダインにもアカネイアの黒い手がのびていた。
大賢者ガトーから大事な使命を与えられたウェンデル大司祭は、将来を嘱望されている優秀な二人の若者にカダインを託して旅に出た。
そのひとりがマルスの幼友達であり、エリスの恋人であるマリク・ガイソンで、もうひとりがオレルアン出身のエルレーン・カルロスだった。
だが、エルレーンはマリクを大神殿の独房に閉じこめて全権を握ると、アカネイアの王都パレスに君臨しているルキルト・ネーリング将軍と軍事友好条約を結んだのだ。
そして、遠征隊がカダイン国に入ると、エルレーンは魔道軍の指揮官に昇格させたヨーデル・ダリと組んで、大司祭ウェンデルの抹殺を企み、聖都カダインの手前にある古い砦に遠征隊を誘き寄せて総攻撃をかけようとした。
だが、号令をかけようとしたとき、見事な槍捌きで、ヨーデルの喉元に槍先を突きつけた謎の兵士がいた。
謎の兵士は、一瞬の隙をついて反撃に出ようとしたヨーデルを、一撃のもとに血祭りにあ

げると、動揺した魔道軍の兵士たちは、砦から遁走した。すると、
「マルス殿！」
謎の兵士が声をかけた。
「北西にあるサルバという村にミネルバがいる！　ミネルバを頼む！」
謎の兵士はそう告げると、馬で駆け去った。
その後ろ姿を見ながら、マルスはその謎の兵士はミネルバの兄のミシェイル・ギルシアではないかと思った。
そして、間違いなくその謎の兵士はミシェイルだった。
サルバという村でミネルバと再会し、マルスはそのことを確認した。
ミネルバの話によると、ミシェイルはリュッケ将軍によって牢に閉じこめられて衰弱しきっていたミネルバを助け出し、安全なところで療養させるために、この村へ連れて来たのだということ——。
一方、ウェンデル大司祭の抹殺計画に失敗したエルレーンは、大神殿の会議室でひとり孤立していた。
エルレーンに忠誠を誓った幹部たちは、大司祭が聖都に帰って来たというだけで激しく動揺し、結果的にはエルレーンに全責任を押しつけて裏切ったのだ。
それほど、大司祭という名は、魔道士にとって絶対的なものなのだ。

そのことを、エルレーンは今更ながら思い知らされた。
また、大司祭という名の前に、自分がいかに無力であったかということも。
ウェンデルと遠征隊は、一六〇〇名の魔道軍兵士と大学院生に出迎えられ、聖都カダインに帰還した。
そして、エルレーンは忽然と聖都から姿を消した――。

その夜、大神殿の礼拝堂で夜の礼拝が行われ、マルスたちも参列した。
礼拝の儀がすべて終了した直後だった。
突然、蠟燭の明かりに照らし出されていた薄暗い祭壇の周囲の空間を、霧のような柔らかな白い光が覆い、礼拝に参加した者たちもその不思議な光に包まれると、
「マルスよ……」
頭上から低い重い声が響いた。
聞き覚えのある懐かしい声だった。ガトーだった。
「ハーディンは闇のオーブの魔力に守られている……」
ガトーは魔道の力でマルスに話しかけた。
「闇のオーブに⁉」
「この世界には、不思議な魔力を秘めた五つの聖なる宝玉が存在している。そなたも知って

いるように、光と、星と、大地と、そして命と、闇のオーブだ。闇のオーブは光のオーブと対をなす聖玉で、所有する者に勇気を与え、苦しみから解き放ち、野心や欲望を増幅させる力がある。また、戦いにおいても相手の精神を操作し、動きを封じてしまう力もある。だが、闇のオーブは人間には扱えぬ。魔力が強すぎて危険なのだ。人間の怒りや嘆き、妬みなどに激しく反応してその感情を増幅し、人格を崩壊して悪魔に変える。ハーディンはどこかでそのオーブを手に入れ、そして心を闇に奪われたのじゃ。ハーディンに闇のオーブがある限り、そなたに勝ち目はない。闇のオーブに対抗できるのは、今わしの手元にある光のオーブだけじゃ」

「お願いです！　わたしに光のオーブをお貸しください！」

「だが、ひとつだけ条件がある。そなた自ら、わしがおる氷竜神殿まで取りに来るがいい。さすれば、光のオーブを授けてやろう」

「氷竜神殿!?」

「だが、ここへ来るのは容易なことではない。人間で、ここまで来られたのは、今までにわずかにひとり……。そう、勇者アンリだけじゃ。もし、そなたがアンリと同じ真の勇者なら、その苦難の旅を克服できるはずじゃ」

そう告げると、すーっと白い光が消えて行き、やがてもとの祭壇に戻った。

そして、二度とガトーの声はしなかった――。

第8章　明かされた謎

1

空には飛び交う鳥もない。地を駆ける生き物もない。
砂丘と礫土の荒涼とした砂漠が、行けども行けども大海のように広がっていて、行き倒れになったおびただしい数の人間の白骨体が熱砂の上にさらされていた。
アリティアの遠征隊は、カダイン国のはるか北方にある古代都市テーベを目指し、ひたすらこのマーモトードの砂漠を北上していた。
古代都市テーベ——そこは、先の戦争でマルスたちが大司祭ガーネフを倒して神剣ファルシオンを手に入れ、捕らわれていたマルスの姉エリスを助け出した地である。
そのときは、大賢者ガトーの大魔術で、名将ミシェイルが率いる竜騎士団と戦ったマケドニアの地から、一瞬のうちに時空を越えて古代都市テーベに移動したが、今回は未知の地で

あるマーモトード砂漠を越えなければならない。

ウェンデル大司祭の愛弟子であり、またマルスの幼友達でありエリスの恋人であるマリク・ガイソンにカダイン国を託して、遠征隊が聖都カダインを出発したのは、六の月の下旬のことだった。

およそ一〇〇年ほど前——。

英雄アンリもまたこのマーモトード砂漠を北上したという。

当時、アカネイア大陸を統治していたアカネイア聖王国が暗黒竜王メディウスが建国したドルーア帝国によって滅ぼされ、人々は恐怖と絶望のどん底にあった。

人々にとって唯一の希望であるアカネイア王家はすでに根絶やしにされ、永久に闇の時代が続くのではないかと思われていた。

ところが、アカネイアの一地方であったアリティアに、アカネイア王家の唯一の生き残りである王女が匿われていたのだ。

一六歳の誕生日を迎えたばかりの美しいアルテミスである。

そのことが判明すると、ドルーア帝国軍はさっそくアリティアに出兵し、王女を差し出すように命じたが、アリティアの人々はそれを拒否し、王女アルテミスを守るために、全滅を覚悟でドルーア帝国軍に抗戦した。

その中心的人物のなかに、若きアンリもいた。

また、王女が生きていることを知った王都パレスの人々も解放軍を組織し、リーダーのカルタス伯爵が解放軍を率いて、ドルーア帝国軍に抵抗した。

だが、メディウスは自ら出陣し、恐るべき攻撃を開始した。

その圧倒的な力の前に、アリティアの人々や解放軍の抵抗もこれまでかと思われた。

そんなとき、ひとりの賢者が、

『はるか北の氷竜の神殿に神から授かった剣がある』

と、アンリに告げたという。

『その剣をもってすれば、暗黒竜王をも倒せる。しかし、そこへたどり着くことは決して容易ではない』と。

剣というのは神剣ファルシオンのことである。

アンリはさっそく神剣ファルシオンを求め、北の大地へと旅立った。

その苦難の旅の最初の道が、このマーモトード砂漠であった――。

後年、アンリは自ら暗黒竜王メディウスとの戦いを語って側近に筆記させ、全一〇巻からなる「英雄伝説」を上梓（じょうし）したが、そのなかの一節に、マーモトードについて次のように記している。

行く手を　拒むもの　まず死の砂漠ありき

灼熱の太陽と　激しい砂嵐
凶暴な　砂の部族と　空を飛び交う　飛竜の群れ
古の　幻の街を　仰ぎながら
我はただ　立ち竦むのみ――

アンリの言葉通り、マーモトードはまさに死の砂漠だった。
その暑さは想像を絶し、容赦なく照りつける灼熱の太陽と地面からの反射熱で、四分の一時も進めば、噴き出した汗がまたたく間に乾燥し、脱水症状を起こして熱射病で倒れる兵士が相次いだ。
熱砂の行軍は、炎のなかを歩いているようなもので、地獄そのものだった。
だが、夜になれば気温は急激に落ち、真冬の温度まで下がる。
そこで、遠征隊は体力の消耗が激しい昼の行軍を諦め、日中は砂丘や岩場の日陰で休み、気温が下がる日没を待って二時ほど行軍すると、夜明けまで眠り、日の出からまた二時ほど行軍し、太陽の位置が高くなると日陰を探して体を休めながら、北上して来た。
また、遠征隊はこれまでに恐ろしい砂嵐に何度も見舞われていた。
上空を茶褐色に覆った砂嵐は、凄まじい勢いで遠征隊に襲いかかった。
数歩先すら見えなくなることも珍しくない。

吹き飛ばされないように体を支えているのがやっとだった。
一度襲われると、砂嵐は二日も三日も続き、嵐が過ぎると、辺りの砂丘が変形し、風景が一変していた。
砂に埋もれた荷馬車を掘り起こすのがまたひと苦労だった。
ときには、地形が変形したあとに、砂に埋もれていた無数の白骨体とともに、アーマーキラー、ドラゴンキラーなどの剣、ナイトキラーなどの槍（やり）、銀の弓などの武器や宝箱が姿を現したこともあった。
いつの時代の、どのような旅の一団のものなのか、想像もつかなかったが、宝箱にはそれを手にしただけで体力を回復したり能力を高めたりすることができる秘伝の書や竜の楯（たて）、女神像、パワーリング、スピードリングなどの貴重品が入っていた。
また、幸運なことに、遠征隊はこれまで三度小さな緑地帯（オアシス）と遭遇した。
緑地帯で、水を補給し、疲労した体を休め、生気を取り戻した。
だが、最後の緑地帯を出発してから、遠征隊は新たな緑地帯を見つけることができないでいた。
最初に緑地帯を見つけたのは聖都カダインを出発してから一〇日目、二度目は二一日目、三度目は三三日目で、一〇日から一二日の間隔を置いて定期的に緑地帯に遭遇したが、三度目の緑地帯を出発してから今日で二七日になろうとしていた。

砂漠の行軍はすでに六〇日に及び、暦はあと数日で九の月を迎えようとしている。この夜、遠征隊は絶望的な気持ちで岩山の窪地で眠りをとっていた。水瓶の水はほとんど底をつき、歴戦の戦士や兵士たちは疲労の極限にあった。あと数日もすれば、衰弱して動けなくなるのが目に見えていた。今までおびただしい数の白骨体を見てきたが、やがては自分たちも志なかばでその仲間入りをすることになる。

絶望感から、戦士や兵士たちは行軍する気力さえ失っていた。といって、今さら後戻りはできない。とにかく、北へ向かうしかなかった。一日に行軍する距離も、一〇日前に比べて半減していた。

その間、遠征隊は、はるか前方の地平線に何度も緑地帯の姿を見たが、接近すると緑地帯はどこにもなく、目の前には荒涼とした砂漠が広がっているだけだった。渇きと疲労と焦燥から幻影を見たのか、それとも蜃気楼を見たのか、それすら判断できないほど思考力も低下していた。

ところが、この日の明け方近くのこと、ペガサスで緑地帯を探しに行ったパオラとカチュアの姉妹が嬉々として野営地へ帰って来て、北へ徒歩で半日ほどのところに古代都市テーベがある緑地帯を見つけたと告げた。

戦士たちは姉妹が幻覚でも見たのではないかと疑い、信じようとしなかったが、

「緑地帯にあるテーベの塔をこの目ではっきりと確認してきました！」
姉妹の執拗な説明にやっと信用し、やがて歓声をあげて喜び合った。
そして、朗報に浮かれ、「英雄伝説」の一節にある、〈凶暴な砂の部族と空を飛び交う飛竜の群れ——〉というくだりを、戦士たちのだれもが忘れていた。
日の出とともに遠征隊は緑地帯を目指して岩山を出発した。
二時後、再び岩山を見つけると、遠征隊は日没までその窪地の日陰で体を休めることに決め、パオラとカチュアの姉妹が緑地帯までの距離を調べるためにペガサスで飛び立とうとしたときだった。
突然、異様な殺気を覚え、戦士たちが思わず四方を見あげると、一〇〇名余りの槍や剣で武装した不気味な一団が岩山の上から遠征隊を取り囲んでいた。
背が低くて小柄だが、その割には手足が異様なほど長くて太い、褐色の肌をした男たちだった。
マーモトードの番人と恐れられている野蛮で凶暴な砂の部族だった。
蛮族は奇声を発しながら一斉に遠征隊を襲撃した。
この砂の部族は、いつごろからこのマーモトードに棲みつくようになったのかは定かではないが、およそ一二〇〇年ほど前に、西域での宗教戦争に敗れて東方へ逃れて来たおよそ一万人のテーベ教徒たちが砂漠のなかに緑地帯を見つけて古代都市テーベを造ったときには、

すでにこの砂漠に棲みついていたという。
古代都市テーベは恐ろしい疫病が流行したために六〇年ほどであっけなく滅亡したと伝えられているが、その歴史はこの蛮族との戦いの歴史でもあったともいう。
一説には、蛮族は岩山の洞窟や砂山や砂丘に掘った迷路のような巨大な穴を住処とし、蛮族にしか通用しない特殊な言葉を遣い、過酷な砂漠での生活に耐えられるほどの強靭な肉体を持つ、生殖能力に優れた種族だと言われているが、それをはっきりと確認した者はなく、今なお謎に包まれた存在だった。
歴戦の戦士たちは女性陣と荷馬車を護衛しながら蛮族を迎撃したが、疲労の極限にある上に、二時の行軍の直後で動きは鈍く、身軽で俊敏な蛮族たちの動きに惑わされて苦戦の連続だった。
だが、蛮族の動きにやっと目が馴れてくると、マルスの秘剣レイピアが、アランの銀の槍が、ナバールの長剣が、オグマの剣が、次々に宙を切り裂き、悲鳴とともに蛮族たちのおびただしい鮮血が岩肌に飛び散った。
蛮族のなかに、鉄の甲冑を身につけた一際体軀のいい五人の屈強な戦士がいた。
バーサーカーと呼ばれているこの戦士たちは、蛮族のなかでも特別に選り抜かれて鍛えられた精鋭で、切れ味の鋭い巨大な両刃のマスターソードという剣を武器としていた。
その剣は数ある名剣のなかでも最高級のひとつに数えられてい、それを手にするだけでそ

れを持つ者の血を異常なほどたぎらせ、不思議な力と驚異の斬殺力を与えると言われている必殺の魔剣である。
普通の剣の数倍も重いこの魔剣をバーサーカーは軽々と自在に操った。
マルスたちは数人がかりでひとりのバーサーカーに応戦したが、敵の魔剣が唸りをあげて間断なく空を切り裂き、戦士たちは鋭い刃先をかわすのが精一杯だった。
体力の限界をとっくに越え、気力だけで戦っている。動きは鈍くなる一方だ。
長引けばそれだけ不利になる。そして、それは敗北を意味する。
さすがの歴戦の戦士たちも焦燥の色が隠せなかった。
朦朧とする意識のなかで、戦士たちは「死」を意識した。
だが、バーサーカーにも弱点があった。バーサーカーのひとりが戦士たちの護衛の網を破って猛然と女性陣に襲いかかったときだった。
ほんの一瞬早く、バーサーカーの動きを察知したリンダが、
咄嗟に両手で印を結び、
「聖なる光よ！」
「邪悪なる者たちに戒めの光を！　怒りの光を！」
魔道書「オーラの書」の教えにある魔術の呪文を唱えると、リンダの指先から発した白熱の電光が魔剣を振りおろしてシーダの首を撥ねようとしていたバーサーカーを直撃し、バー

サーカーは全身を硬直させながら激しく痙攣した。
　魔剣の鋭い刃先はシーダの首の白い肌に触れる直前でとまっていた。
　次の瞬間、マルスのレイピアの剣先が、バーサーカーの喉元を突き抜け、鮮血が勢いよく宙に散った。
　リンダがさらに渾身の力を振り絞ってもうひとりのバーサーカーに白熱の電光を浴びせて動きをとめると、バーサーカーの眉間をアランの槍先が突き刺した。
　バーサーカーに魔術が効果あると見てとったマリーシアもまた、
「リザイアの精霊よ！」
　すかさず胸の前で印を結んで、
「邪悪なる者たちの魂を鎮め、永久の眠りに導き給え！」
　魔道書「リザイアの書」の教えにある呪文を唱えていた。
　リザイアは女魔道士だけが使うことができると言われている魔術だ。
　マリーシアの指先から柔らかな黄金色の光が発し、その光が襲いかかろうとした三人目のバーサーカーの全身を包むと、バーサーカーの顔からとたんに生気が消え失せ、バーサーカーは虚ろな眼で空を睨みつけながらだらしなく動きをとめた。
　リザイアの黄金色の光が敵の体内のエネルギーを瞬時にして奪い取ったのだ。
　その直後、高々と宙に跳んだオグマの剣がその太い首を斬り落としていた。

リンダもマリーシアも魔道士として魔術の修行を積んではいたが、実戦で使うのはこれが初めてだった。

たちまちのうちに三人の仲間を失った二人のバーサーカーが慌てて退散の号令をかけたときには、蛮族の数もまた三分の一まで減っていた。

西の方角へ逃げ去る蛮族を見ながら戦士たちは地面に跪き、肩で激しく息をした。

疲れ切って、今にも意識を失いそうだった。

だれひとり顔から流れ落ちる大粒の汗を拭おうともしなかった。

剣や槍を握っているのさえ、やっとの状態だった。

ふと気がつくと、リンダとマリーシアの二人がすでに気を失って倒れていた。

マルスたちが慌てて二人を抱き起こしたが、二人はなんの反応も示さず、顔は死人のそれと見紛うばかりに血の気が失せて真っ白だった。

魔術は凄まじい集中力と瞬発力を必要とし、体力を極度に消耗させる。

それでなくても、疲労の極限にあった。

二人の意識が戻るまで半時を要した。

2

遠征隊が古代都市テーベがある緑地帯にたどり着いたのは、その夜のことだった。

蛮族の襲撃を受けたあと、遠征隊は岩場の日陰で体を休め、日没を待って北上した。

一時後、大きな砂丘を越えると、遠征隊の目の前に月明かりに照らされた黒々とした緑地帯が姿を現し、その中央に一三層建ての円筒形のテーベの塔がそびえていた。

遠征隊が嬉々として塔を目指し、緑地帯の森に沿って幅七、八〇歩ほどある草原の道を西の方角に曲がりながら奥へ進んだときだった。

突然、月明かりを遮って、遠征隊の上に巨大な影が落ちた。

驚いて見あげると、およそ一〇〇頭あまりの黒い怪獣の群れが接近していた。

「英雄伝説」に記されている〈空を飛び交う飛竜の群れ〉だった。

鋭い二本の角と、醜い大きな口と、自在に空を飛ぶことができる巨大な両翼と、強固な背びれを持つ、ペガサスよりもひとまわり大きなこの黒竜は、マケドニア軍が飛竜部隊を組織したドルーア地方に生息している飛竜と同種のものだった。

上空を真っ黒に覆った飛竜の群れは、咆哮をあげ、紅蓮の炎を吐いて襲撃してきた。

だが、遠征隊は慌てなかった。〈凶暴な砂の部族〉に襲われ、忘れていた「英雄伝説」の

一節を思い出した遠征隊は、〈空を飛び交う飛竜の群れ〉の襲撃を警戒しながら[illegible]へ接近して来たからだ。

炎をかわしながら遠征隊が森のなかに逃げこむと、ゴードン、ジョルジュ、ライアン、ウォレン、カシムらの弓の名手が木々の幹を楯に急降下して来る飛竜の群れに矢を射、弓部隊もそれに倣(なら)って迎撃した。

闇を切り裂いた矢が、飛竜の眼や喉元に命中すると、飛竜は悲鳴ともつかない咆哮をあげながら地面や木々に激突し、すかさずマルスや戦士たちがとどめを刺した。

飛竜の群れは上空からだけでなく、背後からも襲いかかった。

木々の間を縫いながら低空飛行で五頭の飛竜が急接近し、上空にばかり気をとられていた女性陣が不意をつかれて悲鳴をあげた。だが、ほんの一瞬早く、

「氷の精霊よ！」

印を結んだウェンデルが五頭の黒竜に向かってブリザーの魔術の呪文を唱えていた。

と、その指先から発した凄まじい冷気が、瞬時にして紅蓮の炎を吐こうとしていた五頭を凍らせると、駆けつけた戦士たちが五頭に切りかかり、大量の鮮血が森のなかに飛散した。

飛竜の群れは低空飛行で左右からも襲ってきた。

ウェンデルだけでなくリンダとマリーシアもブリザーの魔術で飛竜の動きをとめたが、魔術は凄まじい集中力と瞬発力を必要とし、体力を極度に消耗させるため、魔術をかけるたび

に、その威力が落ちた。
それでも三人は渾身の力で呪文を唱えた。
飛竜の群れとの凄絶な戦いは四分の一時ほど続いた。
だが、飛竜の数が二〇頭あまりにまで減ると飛竜の群れは攻撃を諦め、やがて東の空へ逃げ去って行った。
戦士や兵士たちは疲れ切ってしばらくその場にへたり込んだまま動けなかったが、息遣いが正常な状態に戻ると、再び緑地帯の森に沿って草原の道を進んだ。
道は東の方角に向かって緩やかに曲がっている。そのカーブに沿って三、四〇〇歩ほど進むと、突然森が途切れ、目の前に古代都市テーベの広大な遺跡が現れた。
マルスや先の戦争を戦いぬいた戦士たちには懐かしい光景だった。
碁盤の目のように東西南北に整然と区画された街路の両側には、崩れ落ちた石の土台の跡が残っているだけだったが、街路の長さや広さ、区画の大きさから、古代都市テーベは聖都カダインにも匹敵するような、かなりの大規模な都市であったことがわかる。
メインストリートの街路の奥に、テーベの塔がそびえていた。
この塔は鐘塔だが、古代都市テーベの象徴として建てられたものだという。
また、塔の横には大聖堂の土台の跡が歴然と残ってい、その広さから、大聖堂もまた巨大な建造物だったことがわかる。

テーベの塔と大聖堂跡の中に森があり、まんなかに大きな湖があった。
遺跡へ一歩踏み出した戦士や兵士たちは、真っ先に月明かりに照らされてキラキラ光っているこの湖へ駆けつけ、両手で水をすくって腹一杯水を飲み、頭から水を浴びながら顔や体の汚れを落とした。
先の戦争でテーベに来たことがある戦士たちに聞いて、そこに湖があることを遠征隊のだれもが知っていたのだ。
気温は真冬のそれまで落ちている。水も真冬のそれのように冷たい。
だが、戦士や兵士たちは一息つくと、水をかけ合いながら子供のようにはしゃいだ。
なかには、甲冑を脱ぎ捨て、湖水に飛びこむ者もいた。
半時後――。
夕食の準備ができるまでの間、マルスはシーダを誘ってテーベの塔に登った。
一三層建ての巨大な円筒形のこの塔は、人間の頭ほどの大きさの石を幾万、いや幾十万個も積んで造られたもので、先の戦争のとき、カダインから姿を消してここへ逃げて来た大司祭ガーネフが修復をして居城として使っていたが、今ではその面影（おもかげ）はなかった。
外観の荘厳な見かけと違って、内部の破損はかなり激しく、いたるところで石壁が崩れ落ち、床は砂塵（さじん）にさらされていた。
最上階の鐘楼に登ると、高いドーム型の天井から巨大な鉄の鐘が吊（つ）るされていた。

また、八方の方角に大きなアーチ型の通路があり、そこから外廊（バルコニー）に自由に出入りができるようになっている。
この鐘楼でマルスはガーネフと最終的な戦いを交えた。そして、マルスの剣を左胸に受けたガーネフが外廊から地上に落下し、野望に満ちた人生を終えたのだ。
外廊へ出ると、眼下に月明かりに照らし出された古代都市テーベの遺跡が見え、その遺跡を緑地帯の黒々とした森が囲み、その外には広大なマーモトード砂漠がはるか地平線にまで広がっている。
壮大な眺めだが、夜だけにかえって不気味だった。
それに、地上にいる遠征隊の声はまったく聞こえない。
聞こえてくるのは、ひっきりなしに吹き抜けて行く風の音ばかりだ。
下界では感じなかった風だが、かなりの風速、風圧である。
歩数にしてわずか一五〇歩ばかりの高さだが、地上に比べて気温も低い。
「怖い……」
シーダが震えながらマルスの腕にすがったときだった。
背後に人の気配を感じ、シーダを庇（かば）いながらマルスが振り向くと、一〇歳前後の美しい少女が月明かりを浴びて外廊に立っていた。
マルスの胸までしか背丈のない緑色の髪をしたその少女は、袖（そで）なしの丈の極端に短い服を

着、その上から薄桃色の透き通った柔らかなレースの外套をまとっている。瞳の大きな可愛らしいその顔を見て、
「チ、チキ⁉」
思わずマルスが叫んだ。
先の戦争で暗黒竜王メディウスの呪術に操られていたチキ・バギネルは、古代遺跡のラーマン寺院でマルスたちの力によってメディウスの呪術から解放されると、戦争が終わるまでマルスと行動をともにしたが、戦後チキの守役であるバヌトゥとともにマルスたちの前から姿を消していた。
だが、バヌトゥとは、三箇月前にグルニア北部のカシミアの町で、偶然再会している。
「バヌトゥからガトーさまに氷竜神殿へ連れて行かれたと聞かされていたけど、元気だったのかい？」
チキはマルスを見あげたまま小さく頷くと、
「会いたかった……」
と言って、大人びた潤んだ熱い瞳でじっとマルスを見つめた。
「マルスのおにいちゃん……好き……」
想像だにしなかった言葉にマルスがうろたえると、
「……ってこと言うわけないよな」

痩せた若者に変身した。
「チ、チェイニー!?」
マルスが叫び、思わずシーダと顔を見合わせた。
変身の術を得意とするチェイニー・ブライルだった。
先の戦争で、チェイニーはドルーア帝国軍によってアリティア城の西にある孤島の地下牢に捕らえられていたが、マルスたちに助け出されると、戦争が終わるまでマルスと行動をともにした。
「わるいわるい。二人を見てたらちょっと妬けてきてさ、からかいたくなったのさ」
チェイニーはすまなそうに頭を掻いたが、本心から謝っているのではなかった。
とりあえず謝っておこう——という感じである。
チェイニーは、年齢の割には若者らしくなく、妙に冷めていて、どこか人をばかにしているようなところがあった。
それにしても——と、マルスは思った。先の戦争が終わってチェイニーと別れてから三年ちかくなる。すでに二〇歳ちかいはずなのに、チェイニーの容貌は三年前と少しも変わっていない。
二〇歳ちかくにもなれば、普通の若者は大人びて、男臭さも増すはずなのに、相変わらず

少年の面影を残した一六、七歳の顔をしている。
不思議そうにチェイニーの顔を見ているマルスに、チェイニーは若者に似合わぬ冷めた目で告げた。
「おれはガトーに言われてずっとここで待っていたのさ」

3

三〇日後——。
チェイニーに案内されて古代都市テーベを出発した遠征隊は、マーモトード砂漠のはるか北方にある火炎山脈の険しい道なき道を、北へ向かって行軍していた。
東と西の地の果てまで続いているといわれている気が遠くなるほど長大なこの山脈は、数万年も前から活発な地殻活動が続いている活火山帯だ。
夕陽(ゆうひ)に染まると山脈全体が真紅に燃えているように見えるところから、また夜になれば灼熱の溶岩の大河が巨大な炎に見えるところから、火炎山脈と名づけられたといわれているが、毎日のようにどこかの火口が噴火してい、そのたびに火山の地形が一変するため、一日として山脈の姿が一定することがないという。
強烈な硫黄(いおう)の臭い。足元から蒸す高温の地熱。

溶岩が固まった無数の岩山[illegible]
が絶え間なくあがっている。
間歇泉が不気味な音を立てて勢いよく熱湯を上空に噴きあげる。
低地を削って流れている沸騰した熱湯の濁流や泥流、火口から押し寄せてくる灼熱の溶岩の大河とぶつかることも珍しくない。
足を踏み外してそのなかに落ちたら、それこそ瞬時に消滅してしまう。
それに、上空を常に噴煙に覆われているために、昼でも暗い。
風向きによっては、火山灰に視界が遮られ、数歩先すら見えなくなる。
そして、たちまちのうちに大量の火山灰や火山礫を浴び、全身が灰に覆われる。
ときおり、どこかで噴火したのか、突然恐ろしい地響きが襲う。
そのたびに地形が大きく変わる。地形が変わると、当然のごとく熱湯の濁流、泥流、溶岩の流れの方向が変わる。それらにいつ呑みこまれて死んでも不思議はなかった。
いつも緊張の連続で、気が休まるときがなかった。
暑さも尋常ではない。マーモトードの想像を絶する酷暑に比べればいくらかはましだったが、始末に負えないのは、夜の暑さだ。
マーモトードでは気温が下がる夜に睡眠をとって体力を回復させたが、火炎山脈では消耗した体力を回復する術がない。

慢性的な寝不足と極度の過労から、行軍は過酷を極めた。
だが、ガトーがいる氷竜神殿へ行くには、この山脈を越えなければならなかった。
チェイニーの説明によると、東西に長大なこの山脈を南北に横断するには順調に行っても一四、五日は要するという。
山脈越えを始めて七日目の午後だった。
中腹の切り立った急峻(きゅうしゅん)な峠(とうげ)をやっと越えると、
「あれが火の谷だ」
チェイニーが眼下に広がる南北に長い断崖(だんがい)絶壁の大峡谷を指差した。
「火竜(かりゅう)の墓場さ」
「墓場？」
思わずマルスが聞き返し、他の戦士たちも怪訝(けげん)な顔でチェイニーを見た。
「ああ、退化して獣になった哀れな火竜族が、死を待つところさ。もっとも、退化しているのは火竜だけではないがな」
「どういうことだい、それは？」
「すべての竜族は滅びつつあるのさ」
「すべての？」
「ああ。すべてのな。竜石を知っているかい？」

「火竜石なら見たことはあるけど……」
先の戦争で、マルスたちは盗賊が所持していた火竜石を手に入れたことがあったが、それは人間の掌にすっぽり収まるほどの大きさの透明な美しい玉石だった。
「竜石というのは、竜族ならだれもが生まれてまもなく竜族の証として族長や長老から授けられるもので、竜としての本性を自由に制御でき、知性や理性を維持することができる魔法の石のことさ。火竜族には火竜石、神竜族には神竜石と、種族によって竜石の色や大きさが微妙に違っていて、火竜族には火竜石しか使えないが、効力はどの石も同じで、竜石に竜としての本性を封じこめれば、人間の姿をした竜人になることができる。だが、竜としての本性を封じこめなければ、やがて理性を失い、退化し、野生化して、獰猛な獣になる。もっとも、竜人になった者のなかには、どの竜石であろうと関係なく、竜石を利用して再び竜に戻ることができる特殊な能力を持った者もいるけどね」
「その竜石と竜族が滅びつつあるというのはどういう関係があるんだい？」
「竜族は何万年も前からこの大陸に棲みつき、高度な文明を築きあげてきた」
マルスの問いにチェイニーは説明を続けた。
「竜族には人間にはおよびもつかない知能と能力があった。ところが、あるとき、突然滅亡の日がやってきたのさ。まず、ばったりと子供が生まれなくなった。やがて、理性を失い、野生化して暴れ出す者が続出した。族長や長老たちは種の終わりが近づいてきたのだと言っ

た。もはや、どうすることもできぬ。残された道はただひとつ、竜であることを捨て、竜人として生きることだけだ――と。竜族はパニックに陥った。そして、族長や長老の言葉を信じた者は、竜としての本能を竜石に封じて人間の姿をした竜人となったが、竜としての誇りが捨てられずに竜人になれなかった者は、やがて理性を失い、退化し、獰猛な獣になったのさ」

「それが火竜たちだというのかい？」

「今や火竜族は単なる野生化した愚かな獣にすぎない。二度と前の竜族には戻ることはできずに、この谷を支配する火の部族に操られたまま、やがて死を迎えるだけなのさ」

「火の部族？」

「火の谷の番人といわれている質の悪い蛮族さ。ほら」

大峡谷のほぼ中央に峡谷を南北に隔てている要塞のような奇怪な姿をした険しい岩山がある。チェイニーはその岩山を指差した。

「蛮族はあの岩山のなかのある迷路のような洞窟を住処としているのさ。マーモトード砂漠で砂の部族に襲われたと言ったよな。火の部族もその部族と同じ種族で、いつごろからこの谷に棲みつくようになったのかは定かではないが、はるかその昔、火竜たちが安住の地を求めてこの谷へ流れて来たときには、すでにこの谷に棲みついていたのだそうだ」

チェイニーは一息つくと、

「さてと、どうする？」
歴戦の戦士たちを見回して言った。
「みんなかなり疲れているようだから、しばらくここで休んで英気を養った方がいいかもしれないな。火竜と蛮族を倒して、あの岩山の洞窟を通らなければ、この谷を抜けることができないし、火炎山脈を越えることができないんだからね」

その日の夕方――。
火の谷へ下りた遠征隊が、谷の中央に立ち塞（ふさ）がっている奇怪な岩山の岩肌にぽっかりと口を開けている洞窟の入り口を肉眼ではっきりと確認できるところまで接近すると、岩山に身を潜めて攻撃の機を窺（うかが）っていた六、七〇頭あまりの火竜の群れが、紅蓮の炎を吐いて襲撃してきた。
火竜は古代都市テーベで襲撃してきた飛竜と同じように鋭い二本の角、醜い大きな口、巨大な両翼、強固な背びれを持ち、体全体が炎と同じ紅蓮の色をしているが、両翼は退化していて、自在に空を飛ぶことができない。
歴戦の戦士や槍部隊の兵士たちが素早く輸送部隊や女性陣を護衛すると、
「氷の精霊よ！」
すかさずウェンデルがブリザーの魔法で瞬時にして数頭の火竜を凍らせ、印を結んだリン

ダとマリーシアの指先からも凄まじい冷気が発せられると、マルスや戦士たちの剣や槍先が宙を切り裂き、大量の鮮血が飛散した。

また、ゴードン、ジョルジュ、ライアン、ウォレン、カシムの弓の名手らも火竜の眼や喉元に狙いを定めて矢を射、弓部隊もそれに倣って迎撃した。

その直後、岩山の洞窟から飛び出した一三〇あまりの黒い影が、夕闇を裂いて岩から岩へと跳び、風を切って疾走して来たかと思うと、奇声をあげながら攻撃した。

マーモトード砂漠で襲撃してきた砂の部族と同じような体軀をした、赤褐色の肌をした武装した兵士たちで、その手にはデビルアクスと呼ばれる切れ味の鋭い巨大な両刃の斧を持っている。火の谷の蛮族だった。

蛮族は砂の部族と同様に身軽で俊敏だ。その上、小さな体軀は筋肉の塊だ。巨大な斧が間断なく闇を切り、鋭い両刃は唸りをあげて戦士たちを襲った。

だが、戦士たちは砂の部族と戦っているので、動きに惑わされることはなかった。

壮絶な戦いが始まってほどなく、蛮族たちの顔に戸惑いの色が浮かんだ。

悲鳴とともに血飛沫を飛ばして倒れるのは、蛮族だけだったからだ。

蛮族がひるんだのを一瞬のうちに見てとった戦士たちが、ここぞとばかりにさらに猛攻を加えると、蛮族の戸惑いは激しい動揺に、そして底知れぬ恐怖へと変わった。

八分の一時後、火竜の群れが半分に、蛮族の数も五分の三に減ると、蛮族は洞窟へ向かっ

て退散し、それを見た火竜の群れも岩山に姿を消した。
遠征隊はすかさず隊列を整え、蛮族を追って洞窟のなかに雪崩こんだ。
そして、松明に火を灯すと、マルスと歴戦の戦士たちが先頭に立ち、そのあとに弓部隊と女性陣、輸送部隊が続き、歩兵部隊が殿軍を務めて、蛮族の奇襲に備えながら洞窟の奥へ進んで行った。
なかは比較的広い本道と思われる洞窟が奥へ奥へと続いてい、そこからいくつもの隧道が枝葉のように左右に複雑に分かれていた。
通行困難な凄まじい熱風が吹きあげている箇所に何度かぶつかった。
その足元には決まって目が眩むような断崖絶壁が広がっていて、はるか下方を恐ろしい真紅の溶岩の川が不気味な泡を立てながら流れていた。
遠征隊は一組五名の兵士で偵察隊を組織し、複雑に分かれた迷路のような道に蛮族が潜んでいないかどうかを調べながら本道を奥へと進んだが、偵察から帰った兵士たちはいずれも同じように首を横に振るばかりだった。
どこにも蛮族のいる気配がないというのだ。
ところが、この洞窟でマルスたちは思いがけないものを手に入れた。
偵察に行ったある組が、鶏卵の半分ほどの大きさの青い透明な美しい宝石を持って嬉々として戻って来たのだ。

遠征隊のだれもが星のかけらのことを知っている。この組が偵察に行った道の行き止まりが蛮族の宝物蔵になっていて、そこにあった宝箱のなかからこの宝石を見つけ、もしやと思ったのだ。

ウェンデルがその宝石をかざして見て、

思わず興奮して叫んだ。

「おお！　やりましたぞ！」

宝石のなかに四個の白い光が点在していて、それらの光は冬の西空に見ることができる魚座の形をしていた。

星のピスケスだった。

ウェンデルは今まで集めた星のかけらを取り出し、そのひとつひとつを確認すると、

「これで大賢者ガトーさまに与えられた使命を果たすことができた！」

感慨無量の面持ちで、目を潤ませながら、一二個の星のかけらを見つめた。

この火の谷で最後のひとつを手に入れることができるとは思ってもいなかったので、その喜びは大きかった。

本道をさらに奥へ進むと、遠征隊は大きな空洞に出た。

大聖堂の礼拝堂ほどの広さがあるこの空洞の中央の奥に、部族の主護神を祀っているのではないかと思われる立派な祭壇があり、そこが蛮族が一堂に会する場所であることは容易に

察しがついたが、その周辺にも蛮族の気配はなかった。
遠征隊はさらに奥へ奥へと進み、やがて洞窟をぬけて奇怪な岩山の北側へ出た。
洞窟へ入ってから一時後のことだった。
そして、遠征隊が一息ついて北へ向かって行軍を始めたころ、洞窟の祭壇がある大きな空洞に、どこからともなくぞろぞろと蛮族が集まって来た。
生き残った兵士ばかりでなく、女、子供もいれば、老人もいる。
その数はおよそ四〇〇人ほどに膨れあがった。いずれも強張(こわば)った顔をしている。
男と女の割合はほぼ半分である。そして、老人を除く成人した男はいずれも兵士だ。
蛮族は秘密の洞窟に身を潜め、遠征隊が通過するのをやり過ごしたのだが、それは、最後まで戦えば兵は壊滅し、部族までが滅亡してしまうと判断した蛮族が自らの共同体の存続を守るためにとった最後の手段だったのだ。
やがて、見張り役の兵士が飛んで来て、遠征隊が北へ向かったと告げると、四〇〇人の蛮族から一斉に安堵(あんど)の溜め息がもれた。
だが、ひとりだけ苦渋に満ちた顔で溜め息をついた者がいた。蛮族の長老である。
最初からこの手段をとれば犠牲者を出さなくてすんだのだが、なまじ腕に自信があったばかりに、遠征隊の数から遠征隊の力を侮(あなど)って攻撃を命じた。長老はそのことを悔やんでいたのだ——。

風向きが変わったのか、上空を覆っていた噴煙の切れ間から、不気味な赤い三日月が出ている。
この火炎山脈に入って、遠征隊が月を見るのは初めてのことだった。
静まり返った奇怪な岩山の中腹では、さっきの戦いで半分にまで減った火竜の群れが、北へ向かう遠征隊の姿をじっと見ていた。
マルスたちは岩山を振り返って火竜の群れを見たが、攻撃してくる気配はなかった。目的もなく、動いているものにただ視線を向けている。
チェイニーの言葉が事実なら、ここにいる生き残った三〇頭あまりの火竜は、二度と前の竜族に戻ることができずに、火の部族に操られたままこの谷で死を迎えることになる。一頭、二頭、三頭と消えて行き、最後に残ったものもやがて死に、そして火竜族はこの世の中から滅亡する。
「チェイニー……」
火竜族の運命に哀れさを感じながらマルスが尋ねた。
「峠で、『退化しているのは火竜だけではない。すべての竜族は滅びつつある』と言ったけど、知っているなら、そのことをもっと詳しく教えてくれないか？」
チェイニーは立ち止まって火竜の群れを見、おもむろに答えた。

「竜族には飛竜族、火竜族、氷竜族、地竜族、魔竜族、そして神竜族の六つの種族があるが、ほとんどの竜族が長老たちの意見に従わず、竜のまま野生化して絶滅していった。もう生き残っているのは、一部の限られた場所をのぞいて、ほとんどいない。この火の谷のほかに飛竜の谷」
「飛竜の谷？」
「マケドニア南部にある飛竜の墓場さ。ドルーアや古代都市テーベにも飛竜の生き残りがいるようだけど、飛竜の谷にはまだかなりの数が残っている。それに、われわれが今目指している氷の大地にある氷竜神殿。そして、竜の祭壇……」
「竜の祭壇……？」
「マケドニア北部にある魔竜の墓場さ。そこには地竜のメディウスも眠っている」
「メディウスが⁉」
一瞬、マルスは自分の耳を疑い、
思わず聞き返した。聞き間違えたと思ったのだ。
「メディウスが眠っているって⁉」
ジェイガンも先の戦争を戦いぬいた戦士たちも驚いてチェイニーを見ている。
「でも、メディウスは！」
ドルーア城内での激しい死闘の末、マルスは神剣ファルシオンでメディウスにとどめを刺

して倒している。そして、先の戦争を戦いぬいた戦士たちも、目の前でそれをしっかりと見ているのだ。

「死んだと言いたいのはわかる。だが、メディウスは眠りについただけだったのさ」

「し、しかし！」

「マルスの前に、アンリだってメディウスを倒したはずだ。だが、メディウスは死ななかった。その証拠に、先の戦争で一〇〇年振りに眠りから覚めて復活したではないか」

あ然としてマルスたちは顔を見合わせていた。

言われてみればその通りだが、それでもまだ半信半疑だった。

「竜族のなかでも神竜についで強大な勢力を持つ地竜族は、長老たちの意見に従わず集団で逃亡した。そして、今のドルーア地方に棲みついたのさ。だが、やはり運命は変えられなかった。やがて地竜族は理性を失い、同じく野生化した魔竜や飛竜とともに人間に襲いかかったんだ。もちろん、人間たちはかなうはずがなかった。ほとんど全滅して、大陸の片隅に追い詰められた。そのとき、竜族最高の力を持つ神竜族の王ナーガが一族を率いて人間を守る戦いを始めたんだ。壮絶な戦いだったが、最後にはナーガが勝利し、眠りについた地竜をドルーアの地中に封印したのさ。そして、その封印の力が衰えることがないように『五聖玉の楯』を作ってラーマン神殿に残した。もうずっと昔の……一〇〇〇年も前の話だけどね」

「そうか、神話にある主護神ナーガとは人間を助けた神竜族の王のことだったのか。という

ことは、神剣ファルシオンを人間に残したのも!?」

「ああ。ナーガさ。神剣ファルシオンはドラゴンバスターという竜を制する剣さ。身を守る術を持たない人間を憐れんだナーガが自分の牙を切り出して作ったんだ。そして、楯とともにラーマン寺院に封印し、寺院に強力な呪文をかけて、神竜以外の竜族を近づけなくしたのさ。やがてナーガは残った一族の者に、人間を見守るようにと言い残し、生まれたばかりのチキを眠らせて、五〇〇〇年にもおよぶ命を終えた」

「チキを!?」

マルスも他の戦士たちもチキがナーガ族の王の娘だと思っていた。

ラーマン神殿の主護神であるナーガ一族の王の末裔だとばかり信じていたのだ。

だが、チェイニーの話によるとナーガ族というものは存在しない。

神竜族の王がナーガだったのである。そして、その娘がチキだということは――。

「チキは神竜族だというのか!?」

マルスの問いにチェイニーは黙って頷いた。

「今まで一〇〇〇年近くも眠っていたというのか!?」

チェイニーは再び頷いた。

「それじゃ!?」

マルスは確かめるようにバヌトゥを見た。チキの守役を務めていたバヌトゥならそのこと

を知っていても不思議はないからだ。すると、
「バヌトゥは火竜族さ」
バヌトゥに代わってチェイニーが答えた。
「だが、ガトーはナーガの言いつけを未だに守っている」
「ということは、大賢者ガトーさまは⁉」
「神竜族さ。もっとも、このおれもそうだけど」
テーベの塔で再会したマルスは、三年前とまったく変わらない一六、七歳の少年の面影を残したチェイニーの顔を見て不思議に思ったが、今そのときのことを思い返し、驚きながら改めてチェイニーの顔を見ていた。
「だが、地竜族との戦いで竜石を使いすぎたために、ナーガの他に生き残ったのは、ガトーと生まれたばかりのチキと、おれだけになってしまったのさ。おれとガトーは、戦いののち、竜としての本性を神竜石に封じこめて神竜石を捨てた。だから、もう二度と竜には戻れない。まあそんなわけでおれは人間のために働いているけど、でも正直いって、おれは人間を好きにはなれない。力を失った竜人族を、マムクートと蔑み、人間よりも劣った野蛮な部族としてしか見てないからな。だから、おれはメディウスたちが人間を憎む気持ちもわかるのさ。地竜族の王だったメディウスは、部族に逆らって、ただひとりマムクートになった。そして、ナーガに命じられて竜の祭壇を守っていた。だが、おとなしかった人間が、やがて力をつけ

て、横暴になり、静かに暮らしていた竜人族にまで危害を加えるようになると、人間の裏切りに激怒して、ドルーアの地にマムクートを集め、竜人族の帝国を作ったんだ。ガトーはガトーで、人間を助けるために、アンリに神剣ファルシオンを与え、カダインに大学院を作って魔道を教えた。だが、おれはただ見ていただけさ。どっちが勝とうとおれには関係ないからな」
「でも、それならどうしてぼくたちの手伝いをしてくれるのだ？」
「わからない。わからないけど」
チェイニーは照れ臭そうに笑った。
「あんたらを見ているとあぶなっかしくて見ていられないからな」

4

北の大地の一番の大敵は凍(い)てつく寒さと吹雪(ふぶき)の猛威だった。
日中の最高気温でも、アリティアの厳寒の最低気温よりはるかに低い。
露出した顔や手は、痛さを通り越して、感覚すらない。
その上、横殴りの凄(すさ)まじい吹雪が地鳴りをあげて容赦(ようしゃ)なく襲ってくる。
ときには数歩先すらまったく見えなくなる。

目を開けることも、立っていることさえもできない。
口をきくどころか、呼吸することさえままならない。
雪原にうずくまって、必死になにかに摑(つか)まっていなければ、一枚(ひとひら)の雪のように一瞬のうちに吹き飛ばされる。
火炎山脈を越えた遠征隊は、荒涼とした凍土地帯を経て、この北の大地の吹雪の氷雪地帯を北上して来たが、吹雪のために何日も足どめをくうことも珍しくなかった。
チェイニーの話によれば、北の大地には季節がないという。
気温の変化もなく、いつも真冬で、毎日このように吹雪(ふぶ)いているという。
山脈を越えてまもなくのこと、一休みしたときにマルスは五つのオーブのことをチェイニーに尋ねたことがあった。ガトーに会う前に、詳しいことを知りたかったからだ。
「地竜を封印するための楯(たて)がある」
チェイニーが答えた。
「『封印の楯』がな」
「『封印の楯』?」
「五つのオーブはその楯に埋めこんであったものさ」
彼の説明によれば、五つのオーブは、神竜族に古くから伝わる聖玉で、それぞれに特殊な力が秘められているという。早い話が、楯そのものは台座で、五つの聖玉が封印の力を生み

出しているのだという。

ところが、六〇〇年ほど前、ラーマン神殿に祀られていたこの封印の楯が、何者かに奪われ、壊されたのだという。その楯を取り戻すため、ガトーは長い間、探し歩き、やっと五つの聖玉は集めることができたという。

だが、せっかく集めたその五つの聖玉も、先の戦争でまた散ってしまった——と。

「詳しいことは、神殿へ行けばガトーが教えてくれるさ」

チェイニーはそう言って笑ったが、それ以上のことは彼も知らなかった。

吹雪のなかの過酷な行軍はさらに続いた。

そして、氷雪地帯に入ってから一九日目、聖都カダインを出発してから九七日目のことだった。暦はすでに一一の月に入っていた。

荒れ狂っていた吹雪の勢力が急に弱まると、

「もう少しで氷竜神殿さ」

ほっとしたような顔でチェイニーがマルスに告げた。

その言葉通り、それから半時ほど進むと、吹雪は嘘のようにぴたりとやみ、吹雪がやんだあとの目の前の光景に、マルスたちは思わず目を見張った。

不気味なほど森閑とした白銀の世界が広がってい、上空の暗雲の切れ間から差しこんでいる幾筋もの淡い光が、氷雪の丘の上にそびえる白亜の神殿を神々しく照らしていた。

やっとたどり着いた神殿を見て、喜びに沸いているマルスたちに、

「この神殿の一帯だけは吹雪かないのさ」

チェイニーがそう言って笑ったが、遠征隊が神殿がある丘に接近すると、

「氷竜に気をつけろ」

緊張した顔で忠告した。

「やつらは獣と同じだけど、本能的に神殿を守ろうとしているんだ」

巨大な氷雪の塊が、天然の城壁のようにそびえ、神殿の丘を幾重にも囲んでいる。

その城壁のような氷雪の塊の上で、氷竜の群れが身を隠して待ち構えているという。

氷竜は、飛竜や火竜と同じように、鋭い二本の角、醜い大きな口、巨大な両翼、強固な背びれを持っているが、体は氷雪と同じような白色をしていて、氷雪の白さにその体を隠しているという。つまり白い体が隠蔽色の役割をしているのだ。

また、火竜同様、翼が退化していて、自在に空を飛ぶことができないという。

氷竜の攻撃に備え、遠征隊が氷雪の塊の陰に移動しようとしたときだった。

氷雪の塊の上に潜んでいた五、六〇頭の白竜の群れが、遠征隊を目がけて凄まじい冷気を吐き散らし、不意をつかれた遠征隊は思わず隊列を崩した。

その直後、一〇人ばかりの兵士が悲鳴をあげて倒れた。

冷気を浴びたため、激しい悪寒とともに全身が硬直し、気を失ったのだが、強烈な一撃を

まともに浴びれば、その衝撃で心臓マヒを起こして即死する。

倒れた仲間を助けようとした兵士たちに氷竜の群れはさらに冷気を吐いて襲いかかった。

だが、そのほんの一瞬前に、氷竜の動きを予測したウェンデルが、

「炎の精霊よ！　紅蓮の業火をわれに！」

ファイアーの魔術の呪文を唱えていた。

印を結んだその指先から発した強烈な炎が数頭の氷竜を包んでその動きをとめると、すかさず氷竜の眼や喉元を狙ったマルスや戦士たちの剣や槍が鋭く宙を切り裂いた。

女性陣を護衛したリンダとマリーシアもまたファイアーやそれより一段と強力なエルファイアーの魔法で氷竜の群れに紅蓮の炎を浴びせ、歩兵部隊と輸送部隊が動きをとめた敵に襲いかかった。

また、いち早く氷雪の塊の壁に駆け寄ったゴードン率いる弓部隊が、背後から襲撃されないように氷雪の壁を背にしながら、氷竜の群れに矢継ぎ早に矢を射っていた。

半時後、おびただしい青黒い血で染まった氷雪に大量の氷竜の屍が転がっていた。

だが、氷竜の群れはこればかりではなかった。

丘の上の神殿前の広場に接近し、氷雪の塊の壁に身を寄せて目をこらすと、六〇頭あまりの白竜が、神殿の玄関の両側に身を潜め、鋭い眼で攻撃の機を窺っていた。

ところが、先手をとったのは遠征隊だった。

遠征隊が身を寄せた氷雪の塊から神殿の玄関まで徒歩で二〇〇歩ほどの距離だ。

この二〇〇歩ほどの広場を、槍部隊と輸送部隊に護衛された女性陣が神殿の玄関を目がけて突進した。

それを見た白竜の群れは、一斉に冷気を吐きながら、その一団に向かって突進した。

その直後、凄まじい矢の嵐が白竜の群れを襲った。

氷雪の壁に身を寄せていたゴードン率いる弓部隊が一斉に矢を射ったのだ。

同時に、氷雪の壁の陰から猛然と飛び出したマルスや戦士たちが、剣や槍をかざし、眼や喉元に矢を浴びた白竜たちに切りかかり、数呼吸後には、血飛沫(ちしぶき)をあげた一〇頭あまりの白竜が次々に地響きを立てながら氷雪の上に倒れていた。

また、マルスたちと一緒に氷雪の壁の陰から飛び出したウェンデルとマリーシアとリンダの三人も、ファイアーやエルファイアーの魔法をかけ、無傷の白竜たちに紅蓮の炎を浴びせていた。

虚(きょ)をつかれた白竜の群れは、退散して態勢を整えることを知らなかった。防戦一方で、やみくもに冷気を吐くばかりだった。

二〇頭あまりの白竜の屍(しかばね)が白い氷雪を青黒い血で染めたときには、女性陣を無事に玄関のなかまで送り届けた槍部隊と輸送部隊もその戦いに加わっていた。

決着がつくのはもはや時間の問題だった——。

5

氷竜神殿の礼拝堂は、薄暗い闇をたたえて静まり返っていた。
頭上には、天井の高いドームの空間が広がり、正面には祭壇が祀られてある。
歩兵部隊と輸送部隊を玄関のなかに待機させ、主なメンバーだけで神殿の奥へ進んで来たマルスたちは、感慨無量の面持(おもも)ちで礼拝堂を眺めていた。
苦難の長旅の末にやっと目的の場所に到着しただけに、その喜びは大きかった。
「この神殿で英雄アンリは神剣ファルシオンを得、メディウスを倒されました」
ウェンデル大司祭がだれにともなく言った。
「でも、結局は愛していたアルテミスとは一緒になれなかった……」
「なぜなのですか？」
マルスが尋ねた。
「互いに愛し合っていたというではありませんか？」
アンリとアルテミスが愛し合っていたのは定説となって今に伝えられているが、アンリが残した「英雄伝説」には、二人の愛のことは一切語られていない。
「アカネイアの貴族たちは、平民出身のアンリさまが自分たちの王になることを望まなかっ

たのです。そして、解放軍を率いて戦ったカルタス伯爵との婚礼を、王女に強く勧めたのです。アルテミス王女はそれを拒むことはできなかった。というのも、アカネイア王家には、『炎の紋章を行使する者、そのすべてを王家のために捧げるべし——』という掟があるからです。そこで、王女はやむなく掟に従い、愛するアンリさまに何も告げずに、カルタス伯爵との婚礼を受け入れられた……。それが、のちに、『アルテミスの運命』として、ファイアーエムブレムにまつわるアカネイア王家の伝説となったのです。その後、王女は王子をもうけられて、すぐ亡くなられたといいます。そして、アリティア地方を与えられたアンリさまは王女への愛の証として、生涯、妻を迎えることはなかった……」

マルスは、王女ニーナのことを思い重ねながら、アルテミスの伝説を聞いていた。

先の戦争で炎の紋章を行使したニーナもまた、愛する人と結ばれなかった。

敵対するグルニア黒騎士団の名将グサイユ・カミュとの許されぬ恋だったが、旧グルニアに進軍して来たマルスの連合軍との激しい戦いで、カミュは戦死したと噂されていた。

戦後、カミュの戦死の噂に、ニーナは悲しみの日々を送っていたが、アカネイア王国再興のために、カミュへの想いを捨て、ハーディン・ルイ・オレルアンと結婚した。

だが、カミュは生きていた。白い仮面でその顔を隠し、シリウスと名乗って、グルニア解放のために遠征隊と一緒に、ラング将軍率いるアカネイアの駐留軍と戦った。

もし、ニーナがそのことを知ったら——そのときのニーナの驚きや心情を思うと、やり切

れないものがあった。
やがて、祭壇の前まで行くと、突然、祭壇のまわりにある燭台に一斉に炎が灯り、その柔らかな光のなかに、ひとりの人物が浮かびあがった。
真紅の法衣をまとった、立派な白髪白髯の老人だった。
眼窩の下の澄んだ紺碧の眸がマルスを見据えて言った。
「マルスよ……」
「ガトーさま」
マルスはガトーの前に進み出た。
「よくぞ、ここまで来た」
ガトーはそう言って微笑むと、
「その勇気に応えて、約束の光のオーブを、そなたに授けよう」
黄金色の鈍い光を放つ美しい珠を差し出した。
「これがあれば、闇のオーブの魔力からハーディンを救うことができるのですね？」
両手にすっぽりと収まったその珠は、重くもなく軽くもなく、心地よい重さだ。
「あやつの心が、完全に闇のオーブに支配されていなければな……」
すると、ウェンデルが待ちかねたようにガトーの前に出て告げた。
「ガトーさま。あなたさまに与えられた使命、マルスさまたちの協力を得、やっと果たすこ

とができました」
「なに？　星のかけらを集めてくれたと？」
「はい。これにてございます」
ウェンデルが一二個の星のかけらを丁重に差し出すと、
「おおっ」
ガトーは思わず顔を輝かせて、星のかけらを手に取った。
「ありがたい。これで星のオーブは蘇る」
ガトーは祭壇前の台座に一二個の星のかけらを置いて祭壇の神に祈りを捧げると、胸の前で印を結んで魔道の秘術である復活の呪文を唱え始めた。
気が集中していくのに伴い、ガトーの呪文の声が高くなる。
ガトーは全身を震わせながら、鋭く一喝した。すると、印を結んだ指先からほとばしった蒼光が一二個の星のかけらを射ると、一二個の星のかけらがその光に反応した。
ひとつひとつの星のかけらが蒼光を発し、やがてそれらの光は互いに激しくぶつかり合いながら巨大化し、祭壇は目映い光の渦で埋まった。
やがて、光の渦が急速に収縮すると、台座の上の一二個の星のかけらは一個の美しい蒼い珠に姿を変えていた。
やはり、光の珠と同様、両の掌にすっぽり収まるほどの大きさである。

「マルスよ、これが星のオーブじゃ。これもそなたに授けよう」
「ガトーさま、なぜそのような大切なものをわたしに？」
「封印の楯を完成できるのは、そなたしかおらぬ」
「このわたしが、封印の楯を？」
マルスは弾かれたように手にしている紋章の楯を見た。
封印の楯に埋めこまれている五つのオーブは、神竜族に古くから伝わる聖玉で、それぞれに特殊な力が秘められている。その五つの聖玉が封印の力を生み出している——火炎山脈を越えたあと、五つのオーブのことを尋ねたマルスにチェイニーはそう言って説明したが、そのことを思い出したからだ。
邪悪なる者の手から世界を守る者のみに与えられるものだと言い伝えられているこの紋章の楯には、黄金色の縁取りがしてあり、中央にやはり黄金色の燃え盛る炎の紋章がある。その紋章から五つの方角に、五個の台座のような飾りが彫られてある。
「そなたが持っておるその紋章の楯こそが——」
「奪われた封印の楯だとおっしゃるのですね？」
マルスは確かめるようにガトーを見た。
「ラーマン寺院から封印の楯を盗んだ盗賊は、恐れ多くもその楯から五つの聖玉をぬき取って、オーブとして売り飛ばした。そして、その金で兵を雇い、同時に盗んだ三種の武器を使

って、大陸を統一したのだ。やがて、アカネイア王家となったその盗賊は、自分に幸運を呼んだ楯を、王家の紋章とした。それが、そなたが持つその炎の紋章、ファイアーエムブレムなのじゃ」

アカネイアを建国した初代国王が封印の楯を盗んだ盗賊だったという史実を、マルスは、いやマルスだけでなく先の戦争を戦いぬいた戦士たちも、あ然として聞いていた。

だが、そのことを聞いて、ファイアーエムブレムにまつわる王女アルテミスの悲しい伝説が、なんとなくわかるような気がした。

恐れ多くも——と、ガトーは言ったが、アカネイアの初代国王は、封印の楯から五つの聖玉をぬき取るという、やってはならない罪を犯したのだ。

その罰として、六〇〇年を経た今でも、アカネイア王家は見えない不思議な力の呪(のろ)いを受けているのかもしれない——。

「では、ガトーさま。わたしが五つのオーブをすべて手に入れれば、封印の楯は完成されるのですね」

五つのオーブとは、光と、星と、大地と、闇と、命——。

そのうちの光と星の聖玉は、今、マルスがガトーから授かった。

大地の聖玉は、先の戦争が終わってから、アリティア城の地下にある王家の宝物殿(ほうもつでん)に収めてある。アカネイア軍によって城は占拠されているが、宝物殿の鍵は王家を継ぐ者にしか与

えられていない。つまりマルスが持っている。
　闇の聖玉は、ハーディンのもとにある。
　行方（ゆくえ）がわからないのは、命の聖玉だけだ。
「とにかく、急いでほしい。封印の楯が壊されてからすでに六〇〇年……マケドニアの地下に封印された地竜が目覚めるころだ。あの邪悪な地竜が数百……いや数千と目覚めようとしている。そうなれば、もはや我らに打つ手はない。チキをそなたに託そう。右の奥の部屋へ行けば会える。神竜としての力を得た今のあの子なら、地竜とも戦えるだろう。ただし、言っておくが、封印の楯が完成されねば、チキとて滅ばねばならぬぞ」
「滅びる？」
「あの子はまだ成長の過程にあるから、封印の楯がなければ、退化が始まる。やがて、獣となって、人を襲うだろう。だから、わしはかわいそうだと思いながらも、チキを眠らせることにした。だが、封印の楯が完成すれば、その心配もなくなる。楯がチキを守ってくれるからだ。マルスよ、チキを頼む。あの子を、破滅から救い出してやってくれ」
　礼拝堂の奥の一室で、チキは全身を蒼白いほのかな光に包まれて静かに眠っていた。
「チキ……」
　戦士たちを連れてチキのところへ行くと、マルスはチキの頬（ほお）にそっと手を伸ばした。

するとヽ チキを包んでいた蒼白い光がすーっと消えた。
「チキ……」
チキの頬に手を当て、再びマルスは名を呼んだ。
「ぼくだ、マルスだ……」
「マルス……」
チキは紺碧の大きな瞳をゆっくりと開くと、
「マルスのおにいちゃん……」
目の前にマルスがいるのが信じられないような顔でやっと呟いたが、やがてそれが夢ではないとわかると、
「おにいちゃん、来てくれたのね！」
弾かれたように身を起こした。
「チキに会いに来てくれたんだ！」
「そうだよ、チキ。久し振りだね。元気だったかい？」
「司祭さまがね、まだ眠らなきゃだめだって言うの。でも、わたし、もういや。だって、ずっと長い間、ひとりで眠っていたんだよ。何度も怖い夢を見たわ。あのかわいそうな火竜や氷竜のように、わたしも獣になってしまうの。そして、人間を襲って殺してしまうの。いやっ、やめてっ……って叫んでも、目が覚める。でも、真っ暗な部屋でひとりぼっちで……。

気がおかしくなるくらい怖かった……恐ろしかった……。でも、部屋から出して、わたしを慰めてくれた。そして、ある日、わたしを連れ出して、人間の村へ連れて行ってくれたの。村の暮らしは楽しかった。みんなとてもやさしくしてくれて……。ガーネフに見つかるまでの、わずかな間だったけど、ほんとうに幸せだった。わたし、もう眠るのいや……。今度、目を閉じたら、もう二度と目覚めないような気がするの。そんなのいやだよ。みんなと一緒に暮らしたい。眠りたくない」

生涯の、そのほとんどを眠っていたとはいえ、チキは一〇〇〇歳になる。

だが、今、目の前にいるチキは眠りについたときのままの、一〇歳の少女に過ぎない。

「もう大丈夫だよ。ぼくがきみを守ってあげる。だから、もう泣かないで」

「ほんと⁉　わたしもう怖い夢を見なくていいの⁉」

「大丈夫さ。ぼくを信じてついておいで」

その夜――。

礼拝堂にガトーの呪文を唱える声がこだましていた。

祭壇にガトーが立ち、その前に遠征隊の全員が神妙な顔で勢ぞろいしていた。

兵士たちのなかには、次に起こることを想像しながら、不安に脅えている顔もあった。

必死に気を集め、激しく体を揺らしながらガトーは呪文を唱え続けている。
その額には玉のような汗が浮かんでいた。
呪文を始めてすでに四分の一時になろうとしていた。
突然、ガトーが鋭く一喝した。
次の瞬間、印を結んだガトーの指先から黄金色の光がほとばしったかと思うと、その目映い光が礼拝堂全体を包み、遠征隊の悲鳴にも似た叫び声が聞こえた。
やがて、その光が消えると、礼拝堂は森閑とした漆黒の闇に包まれた。
だが、遠征隊の気配はそのなかになかった——。

第9章　祖国奪還

1

満天の星の下、ぴんと冷気が張り詰めた夜の帳（とばり）のなかを、四騎の騎馬が蹄音を轟（とどろ）かせながら丘陵地帯の小さな街道を疾走していた。
鞍上（あんじょう）の四人は、かなりだらしない粗野な形（なり）をしていて、見るからに、正業を持たない旅の流れ者——といった感じがする。
だが、風になびいているそれぞれの外套（がいとう）の下に、流れ者には似つかわしくない由緒ありげな立派な剣が見え隠れしていた。
いくつかの丘を越え、大きな街道に出ると、四人は街道を西へ向かった。
先頭の乗り手は、精悍（せいかん）な顔立ちの大柄な男で、年のころは二〇歳前か。
二番手は、遠目からは育ち盛りの少年のように見えるが、よく見れば美しい顔立ちをした

瞳の大きな二〇歳前の若い娘だった。
三番手は、骨格がやっと大人のそれになったばかりの青年で、顔にはまだ少年の面影を残している。
どん尻は、先頭の男に負けぬ大柄な男で、やはり二〇歳前の青年だ。
先頭の男は旅の流れ者に扮したアリティアの騎士ルークだった。そして、若い娘はセシル、少年の面影を残しているのはライアン、最後部の男はロディだった。
昨夜、アリティア北部にある山間の街道筋で合流した四人は、集落や民家のない丘陵地帯の裏街道を一昼夜かけて馬を飛ばして来たのだった。
やがて、前方の山裾に、闇に包まれた黒々とした大きな集落が見えてきた。
集落が近づくと、四人は馬の速度を落として、ひっそりと寝静まっている集落へ入って行き、集落の奥にある前庭の広い大きな館の前で馬をとめた。
蹄の音に気づいて館のなかから飛び出して来た数人の警備兵が深夜の訪問者を緊張して待ち構えていたが、それが若き騎士たちだとわかると、警備兵たちは慌てて館のなかに飛びこんで行った。
四人は重大な任務を終え、今、帰還したのだ。
アリティアには緊急時に招集される予備兵が全国におよそ一八〇〇名いて、農民や商人がその主な構成員だが、四人の任務は、郡の権力者であり予備兵たちのまとめ役でもある各地

方の郷士や長老たちに会い、いつでも出兵できる態勢をとるように命じ、アリティアに駐留しているアカネイア軍の情報を聞くことだった。

ただちに広間の暖炉に火が焚かれ、八分の一時後には、広間は四人の帰還を知らされて自室から駆けつけたマルスとおよそ三〇名の戦士たちで埋まった。

一〇日前の夜――。

遠征隊は、はるか北の大地の氷竜神殿から瞬時にして時空を越え、このアリティアの地に移動した。

あのとき、氷竜神殿の礼拝堂で、総勢六〇名の遠征隊が、大賢者ガトーが発した呪術の目映い光を浴びて、悲鳴にも似た叫び声をあげた。

目の前の空間が大きくねじれ、肉体がばらばらに切り裂かれるような大きな衝撃に、だれもが一瞬気を失いかけた。

気がつくと黒々とした森のなかの小川のそばに倒れていた。

そこは、目的の、アランの故郷であるアリティア北西部のキロワの村の近くだった。

吐く息が白かったが、氷雪の北の大地から来た直後だけに、夜の冷気が妙に生暖かく感じられた。

遠征隊が氷竜神殿からの移動先をこのアランの故郷に決めたのは、アカネイア軍の目を逃

れ、戦いの準備が整うまで潜伏するには、ここが恰好の地だと判断したからだった。
この地方に権力を持つ名門アルギス家の長男としてキロワに生まれたアランは、父の死後、あとを継いで若くして郡の郷士となったが、先の戦争のとき、郷士の地位と家督を実弟に譲り、アリティア城と王都を占拠していたドルーア軍と戦うために、マルスのもとに馳せ参じた。

郷士としてアランはこの郡の人々に絶大な信頼と人気があったが、戦後、村へは帰らずアリティア城に残り、騎士団の槍部隊長にまで出世したので、その名声はさらに大きいものになっていた。

それだけに、人々はアランの意のままになる。
また、王都近郊以外にアリティアには一三の郡があるが、そのなかでもこのキロワのある郡は王都から最も遠い北西のはずれに位置していて、アカネイア軍の目が届いている可能性が少なかったからだ。

夜明けを待って、さっそく遠征隊はアランの案内でキロワへ向かった。
アランにとって、三年半振りの懐かしい故郷だった。
村とはいえ、キロワは人口三〇〇〇もある大きな集落で、郡の中心地だ。
また、絹織物の産地として、アリティアでは有名なところである。
厳しい軍隊の突然の出現に、村人たちは一瞬騒然となったが、先頭に立つ勇ましい戦士が

郷土の英雄であることに気づくと、村人たちは歓声をあげてアランに群がった。
　そして、マルスや先の戦争を戦った戦士たち三〇名は、アランの生家であるアルギス家の館に、歩兵部隊と輸送部隊の三〇名は、村の比較的裕福な家に、それぞれ分宿した。
　その夜、旅の流れ者に扮した四人が、マルスたちに見送られてキロワの村を馬で出発し、王都へと続いている街道を東へと向かって行った。
　それが、ルーク、セシル、ライアン、ロディの若き騎士たちだった。
　この若い四人が、祖国奪還の命運を大きく左右しかねない重大な任務を、アカネイア軍の目を盗んで無事に果たせるかどうか危惧する者も戦士たちのなかにはいたが、最終的にはマルスの一存で決めた。国中に顔が売れている騎士たちよりも、顔が知られていない若い四人の方がなにかと動きやすいのではないかと考えたからだ。
　それにまた、この四人は、十箇月にも及ぶ苦難の長旅で、その重責を果たすに充分なほど大きく成長していたのだ――。
「最初に、われわれ四名は、無事任務を果たして帰還したことを報告しておきます」
　居並ぶ歴戦の戦士たちを前に、ルークが胸を張ってそう前置きすると、
「セシルとわたしは、アリティア東部を回ってまいりました。東部は七つの郡に分かれております が――」

アリティア人なら当然知っていることだが、アリティアにさほど詳しくない他国の戦士たちもいるので、ルークはあえてそう言った。
「これらの郡の郷士や長老たちと会い、われわれ遠征隊の意向を伝えましたところ、彼らは一様にマルスさまやわれわれがアリティアに帰国して潜伏していることに驚いておりました。われわれ遠征隊が聖都カダインへ行ったことは、西方からやって来た隊商や旅人たちから噂を聞いて知っていたそうですが、そのあとの消息が途絶えていたので、みな心配していたのだそうです。ですから、われわれが突然、目の前に現れてそのようなことを申しても、にわかに信じられないのは無理もありません。しかし、それが事実だと知ると、一様に涙を流して喜んでくれ、いつでも予備兵を出兵できるような態勢を整えておくと約束してくれました。そして、いずれも、くれぐれもマルスさまによろしくお伝えください――そう申しておりました」
「それから、彼らの情報によりますと――」
続いてルークの隣にいたセシルが報告した。
「東部にあるディゴス、サトム、ノールの三つの砦には、それぞれ、騎馬部隊五〇、歩兵部隊二〇〇からなる計二五〇のアカネイア軍の兵士が、また王都にはギル・エイベル将軍が率いる騎馬部隊一五〇、歩兵部隊六〇〇、計七五〇の兵が、アリティア城にはみなさんがよくご存知のアストリア殿と、元オレルアン国の司祭であったコルザ・ウィロー司祭が率いる騎

馬部隊二〇〇、歩兵部隊一〇〇〇、計一二〇〇の兵が駐留しているそうです」
　ルークとセシルの報告が終わると、今度はロディが答えた。
「わたしとライアンは、アリティア西部の六つの郡を回ってまいりましたが、ルークが申しましたように、西部の郷士や長老たちもまったく同じような反応を示しました。しかし、それが事実だと知ると、彼らもまた、涙を流してわれわれの無事を喜んでくれ、いつでも出兵できるよう態勢を整えておくと、約束してくれました。そして、くれぐれもマルスさまによろしく——と」
　続いてライアンが報告した。
「敵の情報ですが——」
「西部にある三つの砦にも、やはりアカネイア軍が駐留しており、メローとマブロの二つの砦には、東部の砦と同様、それぞれ、騎馬部隊五〇、歩兵部隊二〇〇、計二五〇の兵が、王都と目と鼻の先にあるウプタの砦には、やはりエイベル将軍の配下にある騎馬部隊一五〇、歩兵部隊六〇〇、計七五〇の兵が駐留しているそうです」
　六つの砦の兵の合計が二〇〇〇、王都とアリティア城の兵の合計が一九五〇、都合三九五〇のアカネイア軍兵士が駐留している。
　内訳は、騎馬部隊計七五〇、歩兵部隊三二〇〇である。
　それに比べてアリティア軍は予備兵をいれても二〇〇〇にも満たない。

ひと通りの報告が終わって、戦士たちが溜め息をつくと、

「それから……」

ロディが顔を曇らせ、ひと呼吸置いてからマルスに告げた。

「アベル殿のことですが……」

先の戦争をマルスたちと戦いぬいたアベルは、戦後騎士団を退団し、王都で武器商を営んでいるが、元同僚だったドーガやゴードンたち騎士とは切っても切れない仲で、二の月の四の日、ハーディンからグルニア遠征の要請の親書が届いたときも、アリティア城で催された身内だけの春告祭の宴に出席していた。

「アベルがどうかしたのか？」

「よからぬ噂が流れています……」

「よからぬ噂……？」

「はい……。アベル殿がアカネイア軍のために武器を調達しているとか……」

「ばかげたことを言うなっ！」

真っ先に怒鳴ったのはゴードンだった。

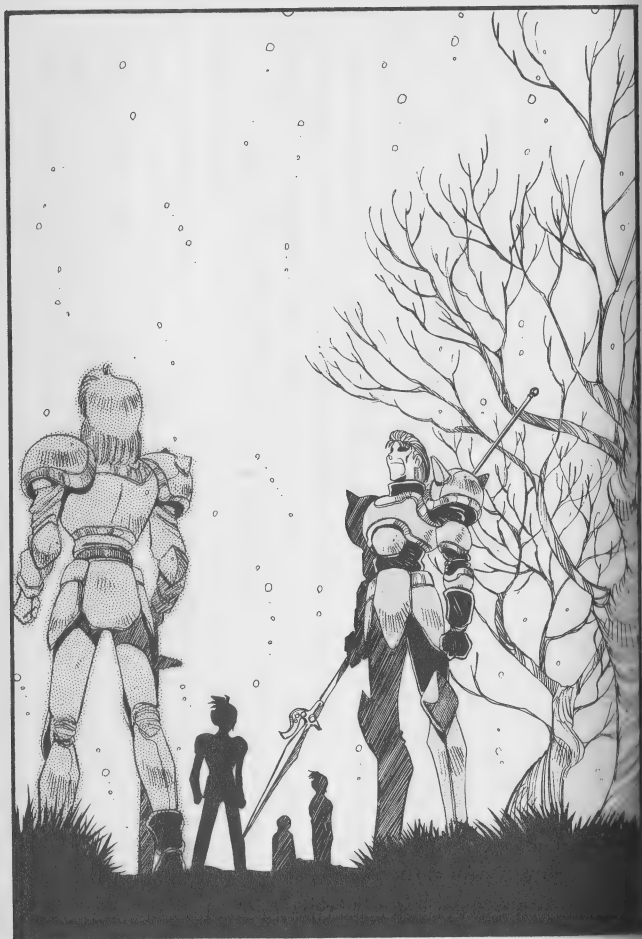
「あいつが、われわれを裏切るわけがない！」

続いてドーガが一笑した。

アベルをよく知っている他の戦士たちも、突拍子もない話に、思わず顔を見合わせて苦

笑している。
「まあ、こういう状況のときはいろいろな噂やデマが飛び交うものじゃからな」
ジェイガンも取り合おうとしなかったが、
「いえっ」
ルークが強い口調で首を横に振った。
「われわれも信じられないので、いろいろ噂を探ってみたのですが、どうやらそれは事実のようです。その噂を最初に聞いたのはスメラ地方の小さな村の宿屋で、宿屋の主(あるじ)と旅の商人が酒のつまみにそのことを噂しておりました。そこで、行く先々の武器商に寄ってそれとなく聞いてみたら、だれも否定はしませんでした。いえ、否定するどころか、だれもアベルのことに触れたがらないのです」
アベルに限って絶対にそんなことはないと信じているのだが、こうまで言われると、さすがの戦士たちもなにも言い返せなかった。
すると、パオラが心配そうに尋ねた。
「ねえ、エストのことはなにか……?」
パオラとカチュアの妹であるエストは、戦後、アリティア城でマルスの姉エリスの身の回りの世話をしていたが、アベルが武器商として王都に店を構えてからは、アベルの店の手伝いをしていた。

「エスト殿のことはなにも……」
「そう……」
パオラはカチュアと顔を見合わせて溜め息をついた。
エストとアベルは恋人同士で、結婚は時間の問題だと思われていた。
それだけに、パオラもカチュアも気が気でないのだ。
「噂をあれこれ推測しても始まらない。真偽はいずれはっきりする」
マルスがパオラとカチュアの心中を察してそう言うと、アベルの話題を打ち切って、さっそく作戦会議に入った。

翌日の昼過ぎ——。
パオラとカチュアが乗った二頭のペガサスが、マルスや戦士たちに見送られて、館の前庭から、重く垂れさがった灰色の空へと飛び立って行った。
援軍を要請するために、パオラはグルニアの仮面の騎士シリウスのもとへ、カチュアは聖都カダインのマリクのもとへ向かったのだ。
二頭のペガサスが西の空に消えるのを見届けて館へ戻りかけたとき、あっ……だれともなく小さな声をあげ、再び空を見あげた。
真綿のような白いものがふわりふわり舞い落ちてきた。

「初雪ですよ」

アランの実弟で、三〇歳になるアグリが言った。

「ほお……初雪ですか……」

すでに一一の月の中旬なので、この地方では初雪が降っても不思議はないのだが、ジェイガンがなにか珍しいものでも見たかのように呟き、他の戦士たちもジェイガンと同じような思いで空を見あげていた。

つい一〇日ほど前まではるか北の大地の荒れ狂う吹雪のなかを行軍していたので、戦士たちは初雪という言葉を忘れていたのだ。

「例年より四、五日早いですが、積もるようなことはないでしょう」

アグリがそうつけ加えたときだった。突然、

「うっ……！」

アランが慌てて両手で口を押さえると、激しく咳き込みながら、逃げるように館の陰に姿を消した。その顔は、異様なほど青白かった。

アランの症状からすれば、今までに数限りなく吐血しているはずだが、マルスたちの目の前でアランが吐血したのは、グルニア北部のラーマンの黒い森のなかの野営地以来、半年振りのことだった。

「兄が初めて血を吐いたのは、三年半ほど前のことでした……」

半時後、アランの実弟のアグリを広間の別室に呼んで二人きりになると、アランの病気について尋ねたマルスに、アグリがこう答えた。

「偶然、兄の部屋の前を通りがかったわたしが目撃してしまったのですが、わたしも大変驚きましたが、兄はかなり強い衝撃を受けたようです。ついにくるものがきた——そういう感じでした。そのとき兄は、『絶対にこのことはだれにも言うな。もし、言ったら弟であっても殺す——』そうわたしに言ったのです。もちろん、わたしもだれにも言うつもりはありませんでしたが、あんな恐ろしい兄の顔を見たのは、あとにも先にもそのときだけです。それから一箇月後……ちょうど、マルスさまたちがドルーア軍から祖国アリティアを奪還するために帰国したという噂がこの村にも流れてきました。すると、兄がわたしを自分の部屋に呼んで、『自分の命はいつまで持つかわからないが、祖国のために、アリティアのために、この命を捧げたい——』そう申しまして、兄はわたしに郷士の地位と家督を譲り、マルスさまのもとに駆けつけたのです」

「そうだったのか……」

「奇跡だ……三年半振りにキロワに帰って、真っ先に兄はわたしにそう言いました。今日まで生きてこられたのは奇跡だ……と。初めて吐血してから三年半、兄はここまで命が持つとは思っていなかったようです。できることなら、暖かなところで養生させ、一日でも長く生

きて欲しい……そう願っているのですが……。でも、いくら説得しても、兄のことですから頑として聞く耳を持たないでしょう。ですから、どうか、最後まで兄の思い通りにやらせてください。兄に代わって……」

話しながらアグリは目に涙をいっぱいためていた。そして、

「わたしからお願いします」

深々とマルスに頭をさげた。

2

アリティア軍が反撃の狼煙(のろし)をあげたのは、それから一五日後のことだった。

その夜、メロー砦のある一帯は、強い木枯らしが吹いていた。

キロワの村と王都のほぼ中間に位置するこの砦は、丘陵地帯の丘の上に建つ三層建ての強固な建造物で、東西に二つの門を持ち、北西のキロワ方面から街道を来た者は、西門を入ってなかで検問を受け、東門から王都方面へと向かうように設計されている。

就寝時間から半時ほど経(た)ったときだった。

突然、木枯らしを切り裂いて緊急を告げる笛の音がけたたましく鳴り響き、寝入り端(ばな)を起こされた兵士たちは甲冑(かっちゅう)や軍靴(ぐんか)の音も慌ただしく部屋を飛び出して配置についた。

闇に覆われた西の街道を、蹄音を轟かせながら砦へ疾走して来る一団があった。
一〇騎あまりの騎馬部隊だった。無駄のない見事な手綱さばきと統率された整然とした動きは、明らかに盗賊団のそれとは違う。
遠目でも、一目で鍛えぬかれた軍団とわかる。
敵か、味方か――!?　巡視路で弓を構えていた三〇名ばかりの弓部隊の兵士たちが、一団の動向に目を凝らしながら、躊躇していた。
二五〇名のこの部隊がメロー砦に駐留してから、すでに八箇月になろうとしている。
その間、ずっとアリティア軍の残党の蜂起に備えてきたが、そのようなことはこの地方では一度もなかった。他の地方でもあったという情報も聞いていない。
また、わずか一〇騎あまりの騎馬部隊が、二五〇の兵が駐留する砦を襲撃してくるとは常識では考えられないことだった。
だが、謎の一団は、速度を落とさず砦に向かって来る。
しかも、馬上の男たちは位の低い兵と違い、立派な甲冑を身につけた騎士たちだ。
そして、先頭の騎士はアリティア国旗を掲げていた。
「アリティア軍だ！」
だれとなく叫び、アカネイア軍の兵士たちに緊張が走った。
一団が射程距離内に突入すると、弓部隊が一斉に矢を射った。

だが、騎士たちが降りかかる矢を見事な剣捌きで次々に切り落とし、アカネイア軍は慌てて矢をつがえた。

騎士団の先頭でアリティア国旗を掲げているのはアランだった。

その横にマルスがいた。さらに、ドーガ、オグマらの歴戦の戦士、ルークやセシル、ロディらの若き騎士たちの顔もあった。

騎士団の役目はアカネイア軍を挑発することだった。

矢の嵐を何度かかわすと、騎士団は弓の射程距離外まで戻って、砦と対峙した。

すると、砦の西門が勢いよく開いて、五〇騎の騎馬隊が気勢をあげながら飛び出し、さらにそのあとに一五〇名の歩兵部隊が続いた。

それを待っていたかのようにすかさず騎士団が今来た西の街道を逃げ、アカネイア軍が怒濤のように追って行った。

追跡部隊が街道の向こうの森の闇のなかに消えると、砦には三〇名の弓部隊と、二〇名の歩兵部隊だけが残った。

森のなかに緩やかな下り坂のカーブがある。

アリティアの騎士団がその坂を駆けぬけ、最後部の騎士から十数馬身遅れてアカネイア軍の追跡隊がその坂に差しかかったときだった。

道の両側の森のなかから、アカネイア軍に向けて一斉に矢の嵐が放たれた。

ジョルジュ率いるおよそ八〇名の弓部隊が両側に分かれ、待ち構えていたのだ。
そのなかに、ゴードンやライアン、カシム、ウォレンの顔もあった。
アカネイア軍の悲鳴が夜空に響き、傷ついた兵士たちは次々に落馬した。
さらに、森の両側に隠れていた二五〇名の歩兵部隊が、雄叫(おたけ)びをあげながらアカネイア軍に襲いかかり、マルスたち騎士団も、馬をとめて方向を変えると、剣や槍(やり)をかざして突進して行った。
このときになって、砦に接近した騎士団は部隊を誘(おび)き出すための囮(おとり)だったことを、アカネイア軍は初めて知らされたのだ。
三日前の夜、マルスたち騎士団は郡の予備兵一八〇名を率いてキロワの村を出発し、このメロー砦へ向かった。
アカネイア軍に知られないために、昼は森のなかで休み、夜、行軍した。
そして、昨夜の夜半過ぎ、キロワの西隣の郡の予備兵一五〇名と合流すると、今朝方このメロー砦に接近し、夜になるのを待って攻撃に出たのだ。
後続の一五〇名のアカネイア軍の歩兵部隊が駆けつけたときには、五〇騎の騎馬部隊はすでに壊滅していて、想像だにしなかった目の前の光景に、アカネイア軍は慌てて砦へ引き返し、アリティア軍はすかさずそのあとを追った。
敗走して来る部隊と追跡してくる軍隊を見て、砦の巡視路で待機していたアカネイアの弓

部隊のだれもが自分の目を疑った。
だが、敗走して来るのはまぎれもなくアカネイアの歩兵部隊である。
それを見て、アカネイアの兵士たちは、初めてことの重大さに気づいた。
何が起きたのか想像すらできなかったが、明らかに形勢が逆転している。
司令官が慌てて残っている歩兵部隊に閉門を命じた。
敗走して来る味方を見殺しにし、砦を死守するつもりなのだ。
兵士たちが慌てて西門を閉めようとしたときだった。
突然、門の近くの物陰に身を潜めていた四つの人影が飛び出して宙に跳び、鋭い閃光が闇を切り裂くと、一〇名余りの兵士が悲鳴をあげながら石畳に崩れ落ちた。
カインとナバール、マチス、サムトーの四人だった。
騎馬部隊と歩兵部隊がアリティアの騎士団を追跡して行ったあと、森の方向に気を取られていた砦の兵士たちの隙を狙って、砦に忍びこんだのだ。
カインは門を閉めようとする兵士たちをナバールたちに任せると、砦の指揮官である将校を壁際まで追い詰め、その胸元に鋭い剣先を突きつけて告げた。
「われわれはマルス王子が率いるアリティア軍だ！」
アリティア軍の残党だと勝手に思いこんでいた将校は、マルスの名を聞き、驚きのあまり言葉を失った。

半年前に聖都カダインに現れたアリティアの遠征隊が、カダイン砂漠を北上したという情報を得ていたが、その後の消息が絶えていたから無理もなかった。

「ウィロー司祭とエイベル将軍に伝えろ！　必ずやアカネイア軍から祖国アリティアを奪還するとなっ！」

その直後だった。敗走して来たアカネイア軍の歩兵部隊が怒濤のように砦に雪崩こみ、そのあとにアリティア軍が続いた。

だが、砦の攻防戦もここまでだった。

砦に雪崩こんだアカネイア軍はそのまま中庭を横切って東門から遁走し、砦に残っていたアカネイア軍も慌ててそのあとを追って王都へと続いている東の街道に消えると、アリティア軍の勇ましい勝鬨が砦に轟き、アカネイア軍旗に代わってアリティア国旗が砦の中央塔に翻った。

そして、半時後、マルスの伝令を持ったルーク、セシル、ライアン、ロディの四人の若き騎士が東門から馬で飛び出し、各郡の郷士や長老のもとへと駆け去って行った――。

「メロー砦陥落」の報せが、アリティアに駐留しているアカネイア軍の総司令官であるウィロー司祭のもとにもたらされたのは、翌明け方のことであった。

メロー砦から馬で敗走して来た将校が、王都近郊のエイベル将軍の指揮下にあるウプタの

砦に駆けこみ、その報告を受けたエイベル将軍が慌ててウィロー司祭の居城であるアリティア城へ赴いたのだ。
だが、アリティア城ではウィローに次ぐ地位にあるアストリアが、メロー砦が陥落したことを部下の側近から耳打ちされて顔色を変えたのは、エイベルがウィローと対策を練ってウプタの砦に戻ってから一時ほどしてからだった。
「どういうことですか、ウィロー司祭⁉」
アストリアが煮えくり返るような怒りを覚えながら、宮殿にあるウィローの居室に乗りこんだとき、今年五〇歳になるウィローは玉座に深々と腰かけ、愛用のやすりで、白魚のような細い指先の長く伸ばした爪を丹念に磨いていた。
考えごとをするときに爪を磨くのがウィローの癖だった。
頭髪は黒々としてい、顔の肌艶も血色もよく、年齢より五、六歳若く見える。
「マルス王子が率いるアリティア軍によってメロー砦が陥落したというのに、なぜそのことをわたしに内密にしておいたのです⁉　エイベル将軍が報告に見えられたとき、なぜわたしを呼ばなかったのです⁉」
ゴルサ・ウィローとギル・エイベルは、もともとオレルアン王国の一司祭と一将校にすぎなかったが、先の戦争が終わってハーディンがニーナと結婚するときに、二人はハーディンが引き連れて来た十数人の側近のひとりとしてアカネイアに赴き、ハーディンが皇帝に即位

したあと、それぞれ将軍の称号を与えられている。
マルスが遠征隊を率いてグルニアに遠征した隙に、アリティア城を襲撃して、アリティアを占領したのも、このウィローとエイベルだった。
アリティアの遠征隊の北上に備えてグルニア北部のハザンの砦に駐留していたアストリアは、アリティアの遠征隊がカシミア大橋を突破して、トルタ港から海賊レイソルの船でカダイン国へ向かうと、ハーディンの大軍と合流し、グルニアから引きあげた。
そして、アリティアに来て、ウィローとエイベルの軍とともにアリティアの遠征隊が現れるときに備えていた。
また、ハーディンはそのままアリティア城に係留していた軍船でアカネイアへ引きあげてしまったが、ハーディンがカシミアへ引き連れて行った二〇〇〇の大軍のうち、その三分の二の兵士が、緊急時に備えて、このアリティアに残っている。
だが、ハーディンが皇帝に即位してから、ハーディンが引き連れてきた側近や先の戦争でアカネイアを裏切った者たちが次々に国や軍の要職を占めたのに比べ、先の戦争を戦いぬいた騎士や戦士たちがことごとく冷遇されたため、両者の間に深い溝ができていた。
ウィローやエイベルと、アストリアの関係も例外ではなかった。
二人はアカネイア軍生えぬきのアストリアを疎んじていたし、アストリアもまた彼らをどうしても好きになれなかった。

二人はアストリアの存在を無視して何事も二人で決め、ときにはアストリアの誇りを踏みにじるようなことも平気でやった。

それでも、アストリアはあえてことを荒立てるようなことをせずにじっと堪えてきたが、このような事態になった以上、もはや黙って見過ごすわけにはいかなかった。

「内密にしておいたわけでもなんでもない」

磨きあげたばかりの爪を満足そうに眺めながら、ウィローは冷ややかに答えた。

「その必要がないと判断したからだ」

「必要がない⁉」

「すべてはエイベルに任せておる」

「しかし、エイベル将軍はまだ出陣の命令を出していないというではありませんか！　この緊急時に、悠長に構えていてよいのですか⁉　なぜ、ただちに大軍を率いてメロー砦へ向かわないのです⁉」

「だから、すべてはエイベルに任せておると言っておるではないか」

「マルス王子を侮(あなど)ってはいけませぬ！　あと数日もすれば、マルス王子が率いるアリティア軍がメロー砦を陥落させたことがアリティア全土に知れ渡るでしょう。そして、今までアカネイア軍に従順にしてきたアリティア人に限りない勇気を与えるのですよ！　一刻でも早くアリティア軍を制圧しなければ、アリティア軍どころかアリティア人民をも敵に回すことに

なるのです！」
アストリアは、なによりもアリティア軍の後手に回るのを恐れていた。
先の戦争で、マルスと一緒に戦っただけに、マルスがどれだけ優れた武将であるかを知っている。それに、マルスには先の戦争を戦いぬいた歴戦の戦士たちがついている。
そのマルスが、わずか三五〇名ほどの兵を率いて、四〇〇〇名のアカネイアの大軍に立ち向かって来るような無謀なことをする訳がない。なにか策があってのことなのだ。
だから、マルスが次の行動をとる前に、出端を挫き、制圧した方がよい——アストリアはそう考えていた。
「アストリアよ」
玉座から立ち上がってウィローは鋭い眼光でアストリアを見あげた。
ウィローは小柄な男で、背丈はアストリアの鼻ほどの高さまでしかない。
「わたしに説教をしようというのか？」
穏やかな口調だが、強い怒気が含まれていた。
そして、苛立ちを隠すように、右手で愛用のやすりを器用に玩んでいる。
「わたしは皇帝からこのアリティアの全権を任せられておるのだよ。そして、アリティアの遠征隊を壊滅した暁には、このアリティアはわたしに与えられる約束になっておる。だから、このアリティアの地においては、このわたしが絶対なのだよ。おぬしは黙って、わたしの言

う通りに従えばよいのだ。余計な口出しは許さぬ」

3

メロー砦が陥落した翌日の夜――。
月明かりに照らし出された丘陵地帯の街道を、四つの人馬が東へ向かっていた。
先頭の三〇歳前後の男は案内役で、案内されているのは、マルスとアランとカインの三人だった。
目的の、メロー砦とウプタ砦のほぼ中間にある小さな集落へ、あと半時ほどで着けるというところまで来ていた。
この日の夕方のこと、アベルの使いの者が王都からメロー砦にやって来て、マルス宛の手紙を差し出した。手紙には――
『マルスさま。ご無事でなによりでした。
わたしは、必ずやマルスさまが、アリティアへ帰国し、祖国奪還のために立ちあがるものと、固く信じていました。ですから、マルスさまが率いるアリティア軍によってメロー砦が陥落したという噂が王都に流れてきたときには、嬉しさで涙がとまりませんでした。

また、その噂が、打ちひしがれていた王都の人々に、限りない勇気を与えました。人々は今、諦めかけていた祖国奪還の希望に胸を膨らませています。
本来なら、ただちにマルスさまのもとへ馳せ参じなければならないのですが、訳があって表立った動きができません。
ついては、アカネイア軍のことで、ぜひご報告しておきたいことがあります。
今夜半過ぎ、アカネイア軍に気づかれぬように、最低限の供だけを連れ、同封した地図のところへおいでください』

――と、したためてあった。
誘き出すための偽の手紙ではないかと、居合わせた者たちは一応疑ってみたが、
「間違いありません、マルスさま」
「この字はまぎれもなくアベルのもの」
アベルの字体をよく知っているアランとドーガが、アベルの手紙を見て本物であると判断すると、ロディとライアンから、アカネイア軍のために武器を調達しているという情報を聞かされてアベルのことを心配していた歴戦の戦士たちは、さすがにほっとしたように顔を見合わせた。だが、
「アベルのよくない噂が流れていると聞いたけど……」

マルスの問いに使いの男は顔を曇らせてうなだれると、再び戦士たちに重苦しい空気が流れた。
「やはり、噂はほんとうなのか？」
「はい。しかし、それはアベルさまの本意ではありません。実は、エストさまがアカネイア軍に人質として城の牢(ろう)に捕らえられていまして……」
「なに⁉　人質として⁉」
「はい。アカネイア軍はアリティアで武器を調達するのに、どうしてもアベルさまの力が必要だったのです。そこで、エストさまを人質にとり、アベルさまに協力するよう強制したのです」
「くそっ、やつらのやりそうなことだ」
ドーガが吐き捨てるように舌打ちすると、
「マルスさま、ぜひわたしをお供に連れて行ってください」
「わたしも行きます」
歴戦の戦士たちが我先にと申し出たが、マルスはアランとカインの二人を指名すると、日が暮れるのを待って、使いの者と砦を出発したのだった――。
砦を発(た)ってから二時半後、はるか前方の丘の麓(ふもと)に目標の小さな集落が見えて来ると、使いの者は街道から少しはずれた林の前にある、今にも崩れ落ちそうな農家の廃屋にマルスたち

を案内した。
　この廃屋がアベルとの待ち合わせ場所だった。
　表の木立に馬を繋いでなかに入ると、黴びた臭いがつんと鼻をついた。
　使いの者が持参した蠟燭を灯して、アベルが現れるのを待った。
　四分の一時ほどして、
「遅いですね。ちょっと様子を見て来ます」
　そう言って使いの者が表に出、やがて走り去る蹄の音が聞こえた。
　集落の方まで見に行ったのだろうか――？　そう思ったときだった。
　突然、朽ちかけた屋根や板壁に突き刺さる不気味な音が立て続けに聞こえたかと思うと、表に繋いでおいた馬たちの驚きおののく嘶きがした。
　慌てて戸口に駆け寄ったマルスたちは、表を見て愕然となった。
「うっ!?　あ、あれは!?」
　廃屋をぐるりと取り囲んだ五〇騎ほどの騎馬部隊と一〇〇名あまりの歩兵部隊が、廃屋を目がけて次々に火矢を放っている。
　それがアカネイア軍だと知って、マルスたちはアベルの手紙で誘き出されたことにやっと気づいた。
　マルスたちが到着するのを廃屋の近くに潜んで待ち構えていたアカネイア軍が、使いの者

が走り去ったのを合図に、一斉に攻撃を仕かけたのだ。
廃屋は轟音とともに凄まじい炎と黒煙に包まれた。
アカネイア軍は飛び出して来るマルスたちを蜂の巣にしようと矢をつがえて待ち構えているが、このままなかにいてもやがて廃屋は燃え落ち、炎の下敷きになる。飛び出す以外に方法はなかった。
廃屋の裏にもアカネイア軍がいるが、幸いにも、その背後は林だ。
生きのびるには、この林を利用して逃げるしかない。
咄嗟にそう判断したマルスたちは剣の柄を握り直し、戸口とは反対側の、燃えあがっている板壁を破って勢いよく廃屋の裏へ飛び出すと、アカネイア軍が三つの人影を狙って一斉に矢を放った。
だが、マルスたちは渾身の力で矢の嵐を切り落としながら、猛然とアカネイア軍に立ち向かって行った。
紅蓮の炎を背にしたマルスたちの必死の形相はまるで鬼神のそれに似ていた。
そのあまりの凄まじい気合いと迫力にアカネイア軍は一瞬たじろいた。
立ち塞がる数騎の騎馬を倒して、マルスたちが林に飛びこんだときだった。
突然、街道から喊声とともに蹄音が轟き、アカネイア軍は驚いて振り向いた。
三〇騎あまりの騎馬部隊がアカネイア軍に向かって突進して来る。

そのあとに、一〇〇名あまりの槍部隊と傭兵部隊が続いた。
先頭の騎士が持ったアリティア国旗が月明かりに雄々しくなびいている。
国旗を掲げているのはドーガだった。
その隣には、サムトーやジョルジュたち歴戦の戦士たちの顔がある。
また、騎馬部隊の後部にはペガサスに乗ったシーダもいた。
目敏くアリティア軍と見てとったマルスたちは、林から引き返すと、敢然とアカネイア軍に切りかかって行った。
そして、アリティアの騎馬部隊は不意をつかれてうろたえているアカネイア軍に怒濤のように襲いかかり、一帯は両軍入り乱れての激しい戦場と化した。
アリティア軍の突然の出現に、廃屋から三〇〇歩ほど離れた木立のなかで、一〇騎あまりの親衛隊を従えていた将が思わず舌打ちをした。
四〇歳前後のその将は、神経質そうな面長の顔に、立派な黒い口髭を生やしている。
エイベル将軍だった。さっきまでの笑みが消え、異様なほど顔が青ざめていた。
エイベルにとって、アリティア軍の出現はまったく予想外のことだった。
しかも、アリティア軍が圧倒的に優勢である。
特にアリティアの騎馬部隊の活躍が目立つ。
すでに味方の兵力は半分近くまで減っている。

このままではアカネイア軍が壊滅するのは時間の問題だった。
「くそっ！」
エイベルは忌ま忌ましそうに舌打ちすると、
「引けっ！　引けーっ！」
真っ先に馬を駆けさせ、親衛隊がそのあとに続いた。
やがて、戦場に合図の笛が鳴り響き、アカネイア軍は一斉に退散し始めた。
アカネイア軍が東の方角に消えると、
「よかった、間に合って！」
ペガサスから飛びおりたシーダが真っ先にマルスに駆け寄り、歴戦の戦士たちもほっとした顔でマルスたちの前に集まって来た。
「助かったよ。でも、どうしてみんなが？」
マルスが尋ねると、ドーガが答えた。
「バレルが砦に来て、使いの者は偽者だと知らせてくれたんです！」
すると、歴戦の戦士たちの後ろに控えていた今年二〇歳になるバレル・カスタが懐かしそうに微笑みながらマルスの前に進み出た。
バレルはアベルが武器商の店を開店したときからアベルの仕事の手伝いをしてい、ときどきアベルに連れられてアリティア城に来ていたので、マルスやアリティアの騎士たちとは顔

見知りだった。

バレルの話によると――マルスたちによってメロー砦が陥落したという報せが、西方にある郡の郷士の使いによってアベルにもたらされたのは、陥落した翌朝、つまり今朝のことだったという。

おそらくルークやロディたち若き騎士らによって各地方の郷士や長老のもとにもたらされたものが、王都にいるアベルのもとへ届けられたのだ。

アベルの命令でさっそくバレルがその報せを王都の有力者たちに伝え、一時後には王都のほとんどの人々がそのことを知ったという。

ところが、バレルが走り回っている間に、アカネイア軍がアベルの店に来て、アベルをウプタ砦に連れ去ったのだという。

砦ではエイベル将軍が待っていて、マルス宛に手紙を書けとアベルに強制したのだ。

偽の使いの者が言ったように、アベルの婚約者のエストがアカネイア軍の人質としてアリティア城に捕らえられているのは、事実だった。

また、そのために、アベルが武器の調達に協力しているのも事実だという。

エイベルが書けと命じた文面から、エイベルがマルスを誘き出して抹殺しようと企んでいるのが明白だった。

アベルは頑として拒否したが、エイベルはいつになく強引で、従わなければエストの命が

ないと脅かした。
そして、無理やりアベルに手紙を書かせると、配下の兵をアベルの使いに仕立て、手紙を持たせてメロー砦へ送り出し、自らも五〇騎の騎馬部隊と一〇〇名の歩兵部隊を率いて、メロー砦とウプタ砦のほぼ中間にある指定した場所へと向かったのだ。
アベルが砦から解放されたのは、エイベルが出兵してから半時後のことだった。
急いで店へ戻ったアベルは、バレルにメロー砦へ行って真実を告げるよう命じ、バレルはアカネイア軍に見つからないように裏街道を選んで馬を飛ばした。
だが、メロー砦に着いたときには、マルスたちがアベルの使いの者だと名乗った男と砦を出発してからすでに一時が経っていた。
バレルから真相を聞かされて驚いた歴戦の戦士たちは慌ててマルスたちのあとを追い、やっとのところで間に合ったのだ――。
「元アリティアの騎士がアカネイア軍に協力しているのですから、たしかにアベルさまの噂はよくありませんが、それはアベルさまの真の姿を知らないからで、アベルさまの名誉のために言っておきますが、アベルさまは決してウィロー司祭やエイベル将軍の言いなりになっているのではありません」
バレルは自信を持ってマルスに告げた。
「エストさまが人質にとられていることもありますが、それはあくまでも表向きのこと。ア

ベルさまは、祖国アリティア奪還のためにマルスさまが帰国されることを信じ、そのときに備え、王都の有力者や有志を説得して、密かに地下組織を結成し、解放軍を作りました。その数はおよそ五〇〇〇名にものぼります」

マルスとアランとカインの三人はただ驚いて聞いていたが、他の戦士たちはすでにそのことを知らされているらしく、力強い同胞の話として誇らしげな顔で頷いていた。

「そして、マルスさまたちが王都へ向かわれるときには、解放軍は一斉に蜂起することになっております。それに、アカネイア軍の武器の調達をする振りをしながら、アカネイア軍の目を盗んで、裏で解放軍に大量の武器を横流ししております」

4

「いかがいたしましょうか、ウィローさま？」

説明を終えたエイベルは、愛用のやすりで丹念に長い爪の手入れをしているウィローの顔色を窺いながら、恐る恐る尋ねた。

マルス殺害に失敗した翌早朝のこと、ウプタ砦に帰還したエイベルはただちにアベルを砦に連行して地下牢に閉じこめると、天井から縄で吊るし、鞭で拷問した。

砦への帰路、偽の使いとしてメロー砦に行った兵士は、マルスも騎士たちもアベルの手紙

を信じ、使いの者を疑おうともしなかったし、アリティア軍があの場に駆けつけるまでは万全だった、とエイベルに告げた。

それだけに、なぜあと一歩のところでアリティア軍が駆けつけたのか、エイベルには不思議でたまらなかった。

だれかがメロー砦の騎士たちに情報を漏らしたとしか考えられなかった。

いったい、だれが――？　そう思ったとき、エイベルが真っ先に思い浮かべたのはアベルの顔だった。

この作戦を知っているのは、エイベルとウィロー以外に使いに行った兵士だけだが、手紙の文面から作戦を察知したアベルが、砦から解放されたあと、メロー砦に使いの者を走らせたに違いないと睨んだのだ。そこで、連行し、拷問にかけたのだ。

だが、アベルは頑として認めなかった。

業を煮やしたエイベルは兵士から鞭を奪い取ると、自ら鞭を振るった。

鋭い鞭の音と凄まじいアベルの悲鳴が地下牢に響き渡った。

気を失った血まみれのアベルに何度も水を浴びせ、気がつくと鞭で責めた。

拷問は一時にも及んだが、それでもアベルは口を割らなかった。

アベルが気を失い、殺された牛の肉の塊のようにだらりとぶらさがったままぴくりとも反応を示さなくなったときには、エイベルは鞭の打ち過ぎから、右手の握力がなくなってい

て、鞭を持っているのさえやっとだった。
　エイベルは床に鞭を叩き捨てて地下牢の外へ出ると、その足でウィローのいるアリティア城へ赴いたのだ。
　失敗したと聞いてウィローは露骨に嫌な顔をしたが、エイベルが言い訳がましく説明し始めると、愛用のやすりを取り出して丹念に長い爪を磨き出したのだった。
　ひと通りの報告がすみ、いかがいたしましょうか——と、顔色を窺いながらエイベルが尋ねてからも、ウィローは黙々と爪の手入れをしている。
　その沈黙の重みに耐えられなくなって、
「い、いかがいたしましょう？」
　額の脂汗を拭いながらエイベルは再び尋ねた。
　ウィローがやっと爪の手入れを終えたのはそれから数呼吸してからだった。
　満足そうに一〇本の指先を眺めると、
「アストリアを呼べ」
　ウィローは隣の部屋に控えていた側近に声をかけた。
　そして、四分の一時後、アストリアが駆けつけると、
「ただちにメロー砦に出陣し、アリティア軍を制圧しろ」
　なんの説明もなくいきなり命じた。

その一言で、アストリアはエイベルの作戦が失敗したのだと判断した。
昨日、なぜ大軍を率いて制圧に向かわないのかとウィローに詰め寄ったときに、すべてはエイベルに任せている、とウィローに言われているし、昨日の午後、エイベルが一五〇名の兵を率いてメロー砦の方角に向かったという情報を、アストリアは自分の側近の者から聞かされていたからだ。
エイベルがどのような作戦をとったのか、アストリアは知らないが、いずれ側近の者がどこかで聞きつけて報告に来ることになっている。
「わかりました」
アストリアはひと呼吸おいて答えた。
「で、兵の数は？」
「自分の部隊で充分だろう」
「えっ!?」
アストリアは一瞬自分の耳を疑った。直属の軍団は、グルニア北部のカシミア地方に赴いたときと同じ編成で、騎馬部隊一〇〇と歩兵部隊二〇〇から成っている。
「わたしの部隊だけでアリティア軍と戦えとおっしゃるのですか？」
「そうだ」
「しかし、それはいくらなんでも無謀です！　アリティア軍は三五〇はいるのですよ！　完

全に制圧するには、二〇〇〇！　いや、せめて一五〇〇は必要です！　マルス王子を侮ってはならぬと、あれほど昨日申しあげたではありませんか⁉」
「余計な口出しは許さぬ——！」
ウィローは鋭い眼光でアストリアを睨みつけた。
「わたしも、昨日そう言ったはずだが」
穏やかな口調で笑みを浮かべているが、その目は氷のように冷たかった。
やがて、アストリアが部屋を出て行くと、
「ウィローさま。お言葉ですが、やつがあのように言うのも無理はないかと……。いくらアストリアの軍団といえども……」
ウィローの真意を探るようにエイベルが言葉を選びながら言った。
アストリアの軍団だけでアリティア軍を制圧するのは、どう考えても無理だ。それを承知で、あえて命じたウィローの思惑がエイベルにはわからなかった。だが、
「邪魔者はアリティア軍に消してもらうのさ」
こともなげにウィローが答えた。
アストリアの部隊がアリティア軍との戦いで壊滅し、アストリアが戦死することを、ウィローは望んでいるのだ。
「やつがいない方が、これからはなにかとうまくいく。ま、おまえは出陣の準備をしながら

朗報を待つのだな。アストリアの部隊との戦いで、アリティア軍といえどもかなりの打撃を受けるはずだ。そのときを見計らって、おまえが大軍を率いて制圧に向かえばよい」

何度も舌打ちした。

「それにしても――」

部隊を率いてメロー砦へと向かっていたアストリアは、ウィローの顔を思い浮かべながら

勝ち目がないのを承知で、なぜウィローが自分を出陣させたのだろうか――？

その疑問がアストリアの脳裏から離れなかった。

だが、アストリアの腹はすでに決まっていた。

ウィローの思惑に反し、アストリアにはアリティア軍と戦う気は毛頭なかった。

砦を奪還するには、最低でも砦の倍の戦力が必要だとアストリアは考えていた。

同じ兵の数なら、砦で迎え撃つ方がはるかに有利だからだ。

砦に攻撃をしかけても、一進一退を繰り返すのが精一杯だ。

しかも、攻撃をしかけた方が打撃が大きい。

万に一つ、メロー砦をアリティア軍から奪還したとしても、アリティア軍がメロー砦の西の地方に逃げこんだらそれまでだった。

先の戦争をマルスたちと一緒に戦ったアストリアは、そこがアランの出身地でアランはそ

この郷士だったということを知っている。
早い話が、アリティア軍がメロー砦の攻防に敗れたとしても、その背後に数万の味方を持っているのだ。
二〇〇〇の大軍ならまだしも、そこへわずか三〇〇の兵が深追いして行ったら、どのような結果になるか、はっきりと目に見えている。
だから、マルスがこのあとの作戦をどのように立てているのかアストリアには想像もつかなかったが、とにかくメロー砦の前に立ちはだかって、アリティア軍の動きを牽制（けんせい）するだけでいい、いや牽制することしかできない——そう思ったのだ。
それに、砦にはアストリアの元同僚であり親友だったジョルジュがいる。
敵と味方に分かれた以上、いずれはこのような事態がくると覚悟はしていたが、どちらが死ぬにしろ、あれほどまでに王妃ニーナに忠誠を誓っていたジョルジュが、なぜアカネイアに敵対しているアリティアの遠征隊に寝返ったのか、その訳を直接ジョルジュの口から聞くまでは、ジョルジュと戦うことはできなかった。

夜半過ぎ——。
メロー砦に緊急を告げるけたたましい笛の音が鳴り響いた。
深い眠りを破られた戦士や兵士たちが、軍靴の音も慌ただしく部屋を飛び出して巡視路に

駆けつけると、砦から五、六〇〇歩離れた東の丘の上に、ちょうどアカネイアの部隊が到着したところだった。
アリティア軍はただちに迎撃の態勢を敷き、アカネイア軍の攻撃に備えた。
行き詰まる緊迫した睨み合いが続いた。
だが、明け方になっても、アカネイア軍は攻撃してくる気配をみせなかった。
「なにを企んでいるのでしょうか？」
ジェイガンがアカネイア軍を見ながらマルスに言った。
「まさか、やつらは囮では……」
マルスもジェイガンと同じことを考えていた。
敵は、騎馬部隊一〇〇騎、歩兵部隊二〇〇。砦のアリティア軍とあまり変わらない。
この戦力で、同じ戦力を持つ砦を落とすことは、どんな名将や知将でも至難の業だ。
それだけに、目の前の部隊の背後に大軍が控え、アリティア軍が砦から出て攻撃するのを待ち構えている可能性があった。
太陽が頭上にあがっても、睨み合いは続いたままだった。
砦一帯は不気味なほど静まり返っていた。
だが、精神的にも肉体的にも、極度の緊張を持続するには限度がある。
夕陽が西の山に沈むころには、さすがの兵士たちも疲労の色を隠せなかった。

このままでは、睡眠不足から兵士たちの体力が消耗しきるのは時間の問題だ。
そのことを杞憂したマルスは、アカネイア軍の様子から長期戦になると判断し、警備態勢を三交代制に切り換えさせ、非番の兵に仮眠をとるように指示したが、歴戦の戦士たちのなかには、相手が攻撃をしてこないことに苛立ち、
「あの程度の部隊は目ではない。一気に叩き潰しましょう」
強行作戦を主張する者さえ出てきた。それを聞いて、
「まずいですな……」
ジェイガンがマルスに呟いた。
バレルからアベルが王都で解放軍を組織したと聞かされてから、戦士や兵士たちの表情が見違えるほど明るくなった。
予備兵二〇〇〇名に王都の解放軍が五〇〇〇名。これだけの戦力があれば、アリティアに駐留しているアカネイアの大軍と互角以上に戦えるからだ。
だが、逆にそのことで、戦士や兵士たちに油断や傲りが生じないかとジェイガンとマルスが心配していたのだが、戦士の強気の発言を聞き、それが的中したことを、二人は敏感に見てとったのだ。
さっそくマルスはアランを呼び、偵察隊を派遣し、目の前の部隊の背後にアカネイアの大軍が接近していないかどうかを探らせるよう命じると、戦士たちを集め、

「絶対に敵の挑発に乗るな。また、解放軍がいるからといって、決してアカネイア軍を侮ってはならぬ」
語気を強め、戦士たちを戒めた。

二日後の夜半――。
帰還した偵察隊が、背後にアカネイア軍が接近している気配がないと報告した。
また、偵察隊が目の前にいる部隊がアストリアの軍団だと告げると、かつてアストリアの同僚であり親友だったジョルジュもさすがに驚きを隠せなかった。
「はて……アストリア殿の部隊が囮でないとすると……？　どういうつもりなのでしょうか？　われわれを牽制しているだけなのでしょうか？　それともなにか奇策でも……？」
怪訝な顔でジェイガンがマルスを見たが、アカネイアの大軍が接近していないことを知って、正直なところジェイガンもマルスもほっとしていた。
バレルからアベルが王都で解放軍を組織したと聞かされた翌日、マルスたちは王都とアリティア城奪還の作戦を練り直したばかりである。
もし、大軍が接近していれば、作戦を大幅に修正しなければならなかったからだ。
エイベル将軍が駐留しているウプタ砦から徒歩で二時ほど西へ行ったなだらかな丘陵地に旧ガレア砦がある。

かつて西方の蛮族の侵攻に備えて造られた要塞だが、ウプタ砦が完成してからは、砦としての役目を終え、今では廃墟同然になっている。
その旧ガレア砦に二〇〇〇名の予備兵を結集させ、ウプタ砦を攻撃し、同時に五〇〇〇の解放軍が王都で蜂起する——というのが、作戦の概要だった。
だが、旧ガレア砦での総決起の日は未定だった。
数日後には、地方へ飛んで行ったルークたち若き騎士が各地の予備兵の情報を持って砦に帰還することになっているが、すべては彼らが帰還してからだった。
若き騎士たちの情報を分析して総決起の日を決め、その日に合わせてマルスたちは旧ガレア砦へ向かうことにしていた。
マルスはさっそく戦士たちを集め、改めてこの作戦の確認をすると、アストリアの部隊との戦いを、旧ガレア砦に向かう前日と決めた。
そして、奪還するまでに起こりうるあらゆる最悪の事態を想定し、いかなる戦況になろうともすぐ対応できるよう協議を重ねた。
翌日も、緊迫した睨み合いが続いた。
ところが、ルークらが帰還する前に、アリティア軍に思わぬ朗報がもたらされた。
その夜、今にも雪が舞い降りそうな重く垂れこめた西の空から、寒風をついて二頭のペガサスがメロー砦に飛来した。

グルニアへ援軍の要請に行ったパオラと聖都カダインへ援軍の要請に行ったカチュアの姉妹だった。二頭のペガサスが砦の中庭に着地すると、

「喜んでください、マルスさま！」

姉のパオラが、迎えに出たマルスに、嬉々として告げた。

「グルニアのシリウス殿が率いる騎馬部隊一五〇、歩兵部隊三〇〇、計四五〇名のグルニア軍と、マリク殿が率いる騎馬部隊一〇〇、歩兵部隊三〇〇、計四〇〇名のカダインの魔道軍が今日にも、グルニア街道とカダイン街道の分岐点である小さな宿場で合流することになっています」

そして、六日後の夜にはマブロの砦に接近するというのだ。

居合わせた戦士たちは思わず歓声をあげた。

5

ウプタ盆地がある西側と王都やアリティア城がある海岸部の東側を分断するように、南北に細長い山地が横たわっているが、この山地もまた、真ん中付近で小さな狭い平地によって北部と南部に切断されていた。

平地は、山地全体からすればほんのわずかばかりの針の穴のようなもので、歩幅にして一

〇〇〇歩あまりの狭間(はざま)でしかない。
だが、ここをカダイン国とアカネイア国を結ぶカダイン街道が通っていて、アリティア西部と中央部を結ぶ唯一の道として、昔から人影が絶えることはなかった。
また、メロー砦やキロワがあるアリティアの西北部や西南部の海岸地方から王都やアリティア城、さらには東方のグラ、アカネイアへ行くためには、ウプタ盆地を東西に貫いているカダイン街道に一旦(いったん)出て、この狭間を通らなければならなかった。
およそ五〇年ほど前、この交通の要衝に、西方からの侵略に備え、北部の山地と南部の山地を接合するように巨大な建造物と堰(せき)のような高い塁壁が建設された。
それが、アリティア国にある六つの砦のなかで一番規模が大きく、また最も強固な砦として知られているウプタ砦である。
砦は石造りの四層建てで、東西に二つの門があり、ウプタ盆地から来た者は西門で厳格な検査を受け、東門から出て行くように設計されている。
そして、東門を出ると、王都とアリティア城はもう目と鼻の先である。
メロー砦前の野営地から駆けつけたアストリアが、このウプタ砦の中央棟にあるエイベルの居室に姿を現すと、
「なにゆえに、攻撃しないのだ!?」
待ちわびていたエイベルはいきなり頭ごなしに怒鳴りつけた。

メロー砦がアリティア軍によって陥落してから一〇日後の夜半のことだ。
この日の夕方、アストリアのもとへエイベルの使いの者がやって来て、至急ウプタ砦へ来るように——と告げた。
そこで、アストリアは側近を連れ、馬を飛ばして来たのだ。
エイベルがアストリアを呼びつけたのは、ウィローにメロー砦はどうなってるのだときつく問いただされたからだったが、攻撃を仕かけないことに苛立っていたのはウィローだけではなかった。このエイベルも同じだった。
そして、一時前まで、アリティア城でそのことをウィローと協議していた。
エイベルの高圧的な態度に、さすがのアストリアも顔色を変えてエイベルを鋭く睨みつけたが、ひと呼吸置くと、怒りを抑え、逆に尋ねた。
「もし、エイベル殿がわたしの立場なら、メロー砦を落とせると思いますか？」
「そ、それは……！」
エイベルは即答できずに、一瞬口ごもった。
「やはり、あなたでも、勝ち目がない……そう思うのですね？」
「そ、そんなもの、戦ってみなければわからぬではないかっ！」
「それなのに、ウィロー司祭はなぜ、たったあれだけの戦力で、わたしにアリティア軍を制圧しろと命じたのです？　司祭の真意はどこにあるのです？　もしや……」

アストリアは鋭い目でエイベルを睨みつけた。
「わたしの部隊を捨て石にするつもりではないのでしょうね？」
「ば、ばかなことを言うな！」
ずばりと言い当てられ、エイベルはうろたえたが、
「とにかく、黙って司祭の命令に従うのだ！」
アリティア城でウィローと協議した際、エイベルは一刻も早くアストリアに砦を攻撃させるよう命じられている。
だが、もしアストリアがそれを拒むようなことがあったら、反逆罪とみなして合法的に始末してよい、とも言われていた。
国家や上司に対する反逆や謀叛(むほん)や造反はアカネイア軍規で斬首(ざんしゅ)刑の重罪とされているが、それを拡大解釈して適用しろというのだ。
アストリアは即座に、
「あなたの指図は受けない！」
はっきりとした口調で撥(は)ねつけると、
「な、なんと……！」
エイベルは思わず顔色を変えて息をのみ、
「司祭の命令には従わぬ……と申すのだな!?」

鋭い目で睨み返した。
返答次第では、反逆罪でアストリアを逮捕し、地下牢にぶちこむつもりなのだ。
だが、アストリアは、今までウィローとエイベルの狡猾なやり方を数えきれないほど見聞きし、自らも現にそのことで苦しめられている。
だから、下手にエイベルの言葉尻に乗って拒否すれば、その場で大罪をかぶせられかねないことぐらい容易に予測できた。
「従わぬ……とは言ってない」
言葉を選びながらアストリアは明言を避けた。
「では、従うのだな!?」
「わたしはただ納得できる理由がほしいだけだ」
「従うのか、従わぬのか、どっちなのだ!?」
エイベルは苛立って声を荒げた。
「わたしが求めている答えはふたつにひとつだ!」
「わたしはウィロー司祭に命じられてメロー砦へ赴いた。それで充分なはずだが」
「やるのか、やらないのか、はっきりしろと言っておるのだ!」
「あなたに言う必要はない」
「な、なに!?」

「明朝、司祭と会って話す」
そう告げると、アストリアは踵を返し、
「ま、待てっ！」
エイベルが慌てて呼び止めるのもきかず、さっさと部屋を出て行った。
アストリアは、ウィローが今の作戦を強引に押しつけようとするなら、反逆者の烙印を押されるのを覚悟で、部隊ごとアカネイア軍から離れ、独自にアリティア軍と戦うことに決めていた。
そのことを部隊にも告げ、ウプタ砦へ飛んで来たのだ。
だが、その思惑とは関係なく、すでにこのとき、戦況は大きく変わっていた──。

二時半ほど前──。
つまり、エイベルに呼びだされたアストリアがウプタ砦に向かってメロー砦前の野営地を出発したころ、アカネイア軍の部隊が駐留しているカダインとの国境に近いマブロの砦は騒然としていた。
日没と同時に、砦の西の街道にグルニアとカダインの連合軍が現れたからだ。
砦を守っているアカネイア軍は五〇の騎馬部隊と二〇〇の歩兵部隊、それに比べて連合軍は騎馬部隊二五〇、歩兵部隊六〇〇の大軍である。

連合軍の先頭には、金刺繡の縁取りのある白い仮面をしたシリウスと聖都カダインの若き指導者であるマリクの姿があった。

半年前、マリクがカダインの大神殿の反省房と呼ばれて恐れられている地下牢から出たとき、別人のように痩せこけて異様なほど青白い顔をしていたが、今ではすっかり健康も回復し、凛とした精悍な顔立ちをしている。

連合軍は一気にマブロの砦を落とすつもりでいた。

シリウスが高々と剣を掲げて突撃の号令をかけると、二五〇〇の騎馬部隊が怒濤のように砦に向かい、そのあとに六〇〇の歩兵部隊が続いた。

部隊の背後には、メロー砦から戻ったパオラとカチュアの姉妹の姿があった。

そして、二時半後――。

アストリアとエイベルがウプタ砦のエイベルの部屋で言い争いをしていたころ、メロー砦でも事態が急変していた。

この日も、メロー砦ではいつものように緊迫した睨み合いが続いていたが、双方とも攻撃をしかける気配はなかった。

ところが、寒風をついて西の空からパオラとカチュアの姉妹が乗った二頭の白いペガサスが砦に飛来した直後だった。

突如、砦から勇ましい喊声があがったかと思うと、勢いよく解き放たれた門から、歴戦の戦士たちが蹄音を轟かせて飛び出し、そのあとに三三〇名あまりの部隊が続いた。
そのなかに、ルークら四人の若き騎士の姿もあった。
パオラとカチュアの姉妹が最初に砦に飛来した数日後に、四人は砦に帰還したのだ。
アリティア軍は驚きうろたえるアストリアの部隊に雪崩こんで行った。
先陣を争いながらジョルジュは必死にアストリアの姿を捜していた。
だが、部隊のなかに、アストリアの姿はなかった。
不意をつかれた指揮官のいないアストリアの部隊は、戦いどころではなかった。
慌てふためき、悲鳴をあげながらひたすら遁走するしかなかった――。

「マブロ砦陥落」の報せが、マブロ砦から敗走した瀕死の兵によってウプタ砦にもたらされたのは、翌明け方のことだった。
寝室に飛びこんで来た部下に起こされたエイベルは一瞬自分の耳を疑った。
夢ではないかと思ったのだ。それほど、唐突な報せだった。
だが、それが現実だと知ると、エイベルは慌ててベッドから跳ね起き、血相を変えてアリティア城のウィローのもとへ飛んで行った。
アストリアが側近からマブロ砦陥落の報せを聞かされたのは、エイベルが馬で砦の門を飛

び出して行った直後だった。

「やっと動き出したか……！」

そう呟きながら、アストリアは自分の部隊のことを思い浮かべた。

同時に、もしや――と奇妙な胸騒ぎを覚えた。その不安が的中した。

半時後、今度はメロー砦から馬で遁走して来た兵によって、アストリアの部隊がアリティア軍の強襲を受けてばらばらに離散したという報せがウプタ砦にもたらされたのだ。

アストリアは衝撃のあまりしばらく動けなかった。

離散し、遁走した兵士たちが、無様な姿で重い足を引きずりながら二人、三人とウプタ砦に戻って来るまで、あと半日は待たなければならなかった。

6

夕闇が迫ったなだらかな丘陵地帯の小さな街道を、アリティア軍は旧ガレア砦へ向かって行軍していた。

アストリアの部隊を駆逐したあと、マルスたちはウプタ砦に駐留しているエイベルの大軍が出動してくるものだと考え、警戒していた。

だが、昨夜遅く、王都に戻っていたバレルがメロー砦にやって来て、

「マブロ砦が陥落したことで、アカネイア軍はかなり動揺しています。ウプタ砦は緊急警備態勢を敷いて警戒を強めていますが、今のところメロー砦とマブロ砦に出撃するような動きはありません」

と、マルスたちに告げた。

また、アカネイア軍はディゴス、サトム、ノールの三つの砦に駐留している部隊をウプタ砦に引きあげさせているという。

この三部隊の騎馬は計一五〇騎、歩兵は六〇〇名である。

ウプタ砦に他の部隊を集結したあと、メロー砦とマブロ砦に出撃することも考えられないこともないが、アカネイア軍がウプタ砦の守りを強固にし、王都とアリティア城の手前でアリティア軍とグルニア・カダインの連合軍の進軍を阻止しようとしているのだと判断して間違いはなかった。

旧ガレア砦に全国の予備軍を結集したあと、ウプタ砦を攻撃しようと考えていたアリティア軍にとって、それは願ってもないことだった。

マルスたちはさっそく作戦会議を開き、半時後には、マルスの指令を持ったパオラとカチュアの姉妹が再び二頭のペガサスでシリウスとマリクがいるマブロ砦へと飛び去り、ルークら若き四人の騎士も三たび馬を飛ばして地方の郷士や長老のもとへ散って行った。

そして、この日の朝、アリティア軍は旧ガレア砦を目指してメロー砦を出発した。

メロー砦から旧ガレア砦までは徒歩で六時間あまりの行程である。マルスが偽のアベルの使いに誘き出されて襲撃された村の近くまで来ると、アリティア軍は大きな街道から分かれ、そのまま丘陵地帯の小さな街道を南下して来た。

夕闇とともに、風は冷たさを増している。

アリティア軍は、あと一時半ほどで旧ガレア砦へ着けるところまで来ていた。隊列の先頭が大きなカーブを曲がってしばらくしたときだった。

突然、寒風を切り裂いて一本の矢が上空に放物線を描いた。

先頭の兵士たちが驚いて思わず立ち止まると、矢は隊列の一〇歩ほど前の凍てついた地面に音を立てて鋭く突き刺さった。

攻撃をしかけてきた矢ではなかった。あくまでも注意を引くためのものだ。

矢が飛んで来た方向を見ると、東の丘の上に弓を持った男がいた。

男は鎧をまとい、馬に跨っている。

寒風に髪がなびき、髪の毛に隠れて顔はよく見えないが、その姿恰好を見て、

「アストリア……!?」

ジョルジュが思わず叫んだ。

丘の上の男の視線はじっとジョルジュに向けられている。

「マルスさま、ちょっと時間を──!」

ジョルジュはそう断って、丘の上に向かって馬を駆けさせると、
「わたしも行きます！」
輸送部隊と一緒にいたリンダが馬を飛ばしてそのあとを追った。

勢いよく馬で丘の斜面を駆けのぼると、ジョルジュは部隊がいないかどうか目敏(めざと)く周囲を見回したが、来ていたのはアストリアひとりだけだった。
「ウィローが嫌になって逃げて来たのか？」
ジョルジュは挨拶(あいさつ)代わりに遠慮のない冗談を言って懐かしそうに微笑んだが、冗談とはいえ、いきなり核心に触れられ、アストリアは内心どきりとした。
マブロ砦陥落とアストリアの部隊が離散遁走したという報せが相次いでもたらされてからウプタ砦は混乱していたが、アストリアはウィローとエイベルに対する限りない失望と屈辱感にとらわれていた。
だが、時間とともに、それは虚脱感と孤独感に変わった。
そのとき、ふと親友であったジョルジュのことを思い出した。
思い出したら、無性にジョルジュに会いたくなった。
なぜジョルジュが祖国を裏切って敵対するアリティアの遠征隊に寝返ったのか、その理由をどうしても知りたくなった。

そこで、アリティア軍の行方を追い、先回りしてここで待っていたのだ。
「聞きたいことがある……」
アストリアが言いかけたとき、リンダが馬で駆けつけ、
「リ、リンダ殿……!?」
あ然としてアストリアはリンダを見た。
「な、なぜ、リンダ殿がここに……!?」
「驚くのも無理はない」
ジョルジュが答えた。
「おれも最初にトルタ砦でリンダ殿を見たとき、同じように自分の目を疑った。それも、マルスさまと一緒だったのだからな」
「実はね、アストリア殿……」
リンダは王妃ニーナの命令で紋章の楯をマルスに渡しに来たことを告げると、
「紋章の楯を!?」
アストリアは驚き、
「しかし、紋章の楯はアカネイア王家の家宝。しかも、邪悪なる者から世界を救う者のみに与えられると言われている楯をなぜ……!?」
ジョルジュがリンダと再会したときと全く同じ質問をした。すると、

「ニーナさまはな——」
ジョルジュがリンダに代わって答えた。
「この世に邪悪な手が伸びていることを知っておられたのだ」
「邪悪な手？」
「そして、邪悪な手から世界を守るのはマルスさまをおいてないということもな」
「何を根拠にそのようなことを」
「まあ聞け、アストリア。おれはな、アカネイア騎士団に入団してから、アカネイア国のために命を捧げてきた。それというのもニーナさまに忠誠を誓ったからこそだ」
「それはおれとて同じこと」
「だが、ハーディンさまが皇帝に即位されてからは、ニーナさまを差し置き、自分の思い通りにことを運ばれた。大幅な制度改革、不当な人事異動、グルニアへの侵略、アリティアの襲撃……数えあげればきりがない。ハーディンさまはアカネイア国を、アカネイア大陸をどうなさろうとしているのか……おれにはさっぱりわからなかった。そして、いつの間にかハーディンさまについていけなくなっていた。そのうえ、オレルアンから来た連中が我がもの顔で威張り散らすし、アカネイア人としておれはそれ以上の屈辱には堪えられなかった。おまえだって同じ思いだったはずだ。そんなとき、トルタ砦でマルスさまとリンダ殿に会い、紋章の楯のことを聞かされたのだ。ニーナさまはマルスさまを信じて楯を授けられた。だか

ら、マルスさまと行動をともにすることがニーナさまに忠誠を[illegible]
の命令に従うことだと、そう思ったのだ」
「そうだったのか……」
「そして、マルスさまたちと一緒に旅を続けながら、それが間違いでないということがわかった。実はな、アストリア。皇帝は、闇のオーブに心を奪われているのだ」
「闇のオーブ？」
「聞いたことがあるかもしれないが、この世に五つのオーブがあるのだそうだ――」
ジョルジュは北の大地の氷竜神殿でガトーに聞いた五つのオーブと封印の楯の関わりと、マケドニアの地下で今目覚めようとしている地竜のことを説明し終えたときには、夕闇は夜の闇に変わり、東の空の暗雲の切れ間から月明かりがもれていた。
「だから、マルスさまやおれたちと一緒に戦おう！」
ジョルジュはアストリアを説得した。
「皇帝を闇のオーブの支配から救い出し、もとのアカネイアにするんだ！　そして、地竜たちを封じ、邪悪なるものからこの世界を守るんだ！」
「アストリア殿！」
リンダも決意を促した。だが、
「お、おれは……」

言ったきりアストリアは口を噤んだ。

やがて、一際強い風が丘の上を吹きぬけて行くと、

「ジョルジュやリンダ殿が言っていることを否定するつもりはない」

絞り出すような声でアストリアはやっと答えた。

「だが、おれにはどうしたらいいかわからない。わからないが、今のおれには、祖国に、アカネイアに剣を向けることはできない……」

そう言い残すと、アストリアはいきなり愛馬の腹を蹴って東の方角に駆け去り、ジョルジュはその背に向かって叫んだ。

「いつでも来いーっ！　待ってるぞーっ！」

だが、アストリアは振り向こうとしなかった──。

日没から一時半──。

アリティア軍は、冷え冷えとした月明かりのなかを南下していた。

風はいつの間にかやんでいたが、その分冷えこみが厳しく感じられた。

やがて、隊は小さな峠を越え、下り坂をしばらく進むと、急に視界が開け、眼下に四方をなだらかな丘陵に囲まれた原野が広がっていた。

この原野にほど近い小高い丘に、目的地の旧ガレア砦があった。

旧ガレア砦の規模はメローの砦と同じぐらいで、三層建ての石造りの建造物はすでに廃墟と化していたが、なんとか雨露だけはしのげそうだった。

旧ガレア砦の東の方角には、黒々とした丘陵の稜線（りょうせん）が見えた。

その丘陵の向こうにウプタ盆地が広がってい、その先にウプタ砦がある。

徒歩でわずか二時ほどの距離だ。

さらにその先に、王都とアリティア城がある。

旧ガレア砦にさっそく篝火（かがりび）が焚（た）かれ、兵士たちは慌ただしく野営の準備を始めた。

明日の昼前には、騎馬部隊二五〇名、歩兵部隊六〇〇名のグルニア・カダイン連合軍が、夕方までには、残る一一の地方から一七〇〇名を越すアリティアの予備軍が、この旧ガレア砦に到着することになっていた――。

その日の深夜、底冷えのする月明かりのなかを、蹄音を轟かせながら一騎の騎馬がカダイン街道をウプタ砦に向かって疾走して来た。

西門の巡視路で警備していた五〇名の兵士たちは警戒して弓を構えたが、騎馬が砦に接近し、それが昨日の夕方から姿を消していたアストリアだとわかると、兵士たちの警戒はざわめきに変わった。

「なにをしている！　門を開けろ！」

って怒鳴った。兵士たちの尋常ではない反応や、砦内の慌ただしい気配を感じながら、アストリアは苛立
門扉が開いたのは、それからしばらく待たされてからだった。
そして、アストリアが門を潜ると、なかで待ち構えていたエイベル率いる一〇〇名の歩兵部隊が、アストリアを包囲し、槍と弓を突きつけた。
「なんの真似だ、これは!?」
さすがのアストリアも驚いて顔色を変えた。だが、
「よくぞおめおめと帰って来られたな、アストリア・ハイゼン!」
エイベルは鋭い目で睨みつけ、アストリアの名を呼び捨てにした。
今までに面と向かって呼び捨てにしたことは一度もない。これが初めてだった。
「職務を放棄した罪で逮捕する!」
「逮捕!?　いつわたしが職務を放棄した!?」
「この緊急時に、作戦会議に出席もせず、自分の部隊を捨てて姿を消したのだからな、職務を放棄したと見做されても仕方あるまい!」
「わたしはただ留守にしただけだ!　放棄したつもりはない!」
「そんな子供じみた言い訳がきくとでも思っているのか!?　貴様は駐留軍の最高幹部のひとりなのだぞ!　その責を問われて当然だ!」

「部隊はどうした⁉　わたしの部隊は⁉」
メロー砦のアリティア軍に強襲されて離散し遁走したアストリアの部下たちが、昨日の夕方までに続々とウプタ砦に帰って来た。
その数は部隊の七割に満たなかったが、その数を確認すると、アストリアは部隊を側近に任せ、砦を飛び出してジョルジュに会いに行って来たのだ。
その間、時間にしてわずか一五時、一日半と経っていないが、ウィローとエイベルの対応はいつになく素早かった。
「そんなものは存在しない！　すでに解散させ、他の部隊に配属した！」
「な、なにっ⁉」
「地下牢へぶちこめっ！」
エイベルは大声で歩兵たちに命じた。

7

ウプタ砦一帯は、朝から凍てつくような烈風が吹き荒れていた。
だが、夕方近くになると烈風は嘘のようにやみ、底冷えはさらに厳しさを増した。
そして、重く垂れこめた上空から、白いものが舞い降りてきた。

ウプタ砦の西門の前にはディゴス、サトム、ノールの三つの砦から急遽駆けつけたばかりの騎馬部隊一五〇、歩兵部隊六〇〇の援軍が野営しながら前衛部隊としてアリティア軍とグルニア・カダイン連合軍の攻撃に備えていた。

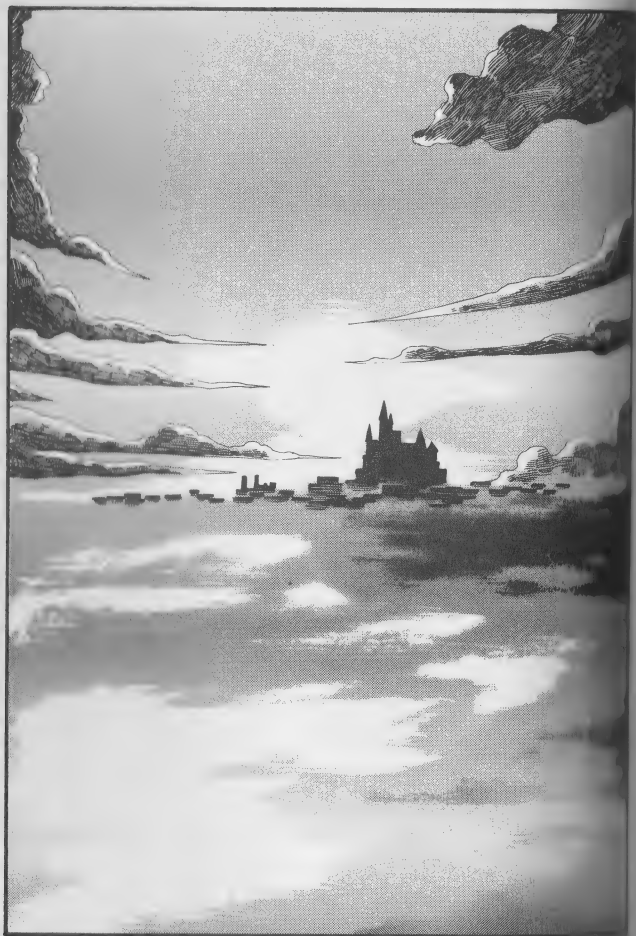
また、砦のなかには援軍とほぼ同数にあたるエイベル率いる騎馬部隊一五〇、歩兵部隊六〇〇の常駐軍の他に、王都からも騎馬部隊一〇〇、歩兵部隊三〇〇の兵が、アリティア城からも騎馬部隊一〇〇、歩兵部隊五〇〇が動員されていて、砦に結集しているアカネイア軍の総数は、騎馬部隊五〇〇、歩兵部隊二〇〇〇にのぼった。

この他に、王都には騎馬部隊五〇、歩兵部隊三〇〇が、アリティア城には騎馬部隊一〇〇、歩兵部隊五〇〇のアカネイア軍が残っているが、エイベルとウィローが砦にこれだけの兵力を集中させたのは、この砦でアリティア軍とグルニア・カダイン連合軍を迎え撃ち、一気に叩き潰そうと考えたからだ。

雪は、少しずつ密度を増し、音もなく降り続けた。

砦の東門の上の巡視路から、東の方角に王都の美しい市街地と荘厳華麗なアリティア城を間近に見ることができたが、迫りくる夕闇と降りしきる雪の帳のなかに、その風景が吸収され、やがて消えていった。

夜通し降り続けたこの雪は、明け方近くになってやっとやんだ。

そして、白銀に埋もれたウプタ盆地の原野や森の美しい雪景色が、夜明けの鈍い光のなか

に、その姿を現した。
冷えきった透明な空気がすべての音という音を消し去り、盆地は不気味なほど静まり返っていた。
この静寂を切り裂いて、突然、ウプタ砦にけたたましい警笛が鳴り響いた。
驚いて飛び起きた兵士たちは慌てて配置についたが、予期しなかった状況に、兵士たちは激しく動揺していた。
血相を変え、兵士たちを掻き分けながら西門の上の巡視路に飛んで来たエイベルも、砦の西方を見て、
「うっ⁉　いつの間に——⁉」
思わず息をのんだ。その唇が青ざめ、かすかに痙攣していた。
砦から西へ向かって雪原のなかに白い一本の帯のようにカダイン街道がのびているが、街道はやがてその先の大きな森のなかに消えている。
砦の目と鼻の先の、この森の前に、二七〇〇名の大軍がいた。
アリティア、グルニア、カダインの三国の連合軍だった。
マルスの隣にはシリウスとマリクが控えている。
さらにその横には、アラン、カイン、ドーガ、ゴードンや、オグマ、ジョルジュ、ナバール、マチスら先の戦争を戦いぬいた歴戦の戦士がずらりと勢ぞろいしている。

ルーク、ライアン、セシル、ロディらの若き騎士たちの姿もある。
昨日のうちに旧ガレア砦で合流した三国連合軍は、昨夜旧ガレア砦を出発し、二時ほど前にこの森に到着していた。
そして、森のなかで体を休めながら夜が明けるのを待っていたのだ。
エイベルは連合軍の予想外の数の多さに愕然としていた。
アリティア軍とグルニア・カダイン連合軍の兵は合わせても一〇〇〇名前後と高をくくっていたが、目の前にいるのはその三倍近くもあったからだ。
「くそっ！」
エイベルが舌打ちをしたときだった。
ゴーン、ゴーン、ゴーン……。
王都から夜明けを告げる大聖堂の朝一番の鐘の音が聞こえてきた。
その音は、砦の上空を越え、三国連合軍の戦士たちの耳にもはっきりと聞こえた。
驚いた鳥の群れが羽音を立てて森のなかから飛び立った。
いつもは間合いを置いてゆっくりと鳴るが、今朝はその数倍早い。
この鐘の音が戦いの合図だった。
マルスが秘剣レイピアを高々と掲げると、歴戦の戦士や三〇〇の騎馬部隊が足跡ひとつない真っ白な新雪を踏み散らして勢いよく突進し、そのあとに二四〇〇の歩兵部隊が喊声をあ

げながら怒濤のように続いた。

そのころ、王都では解放軍が一斉に蜂起していた。

大聖堂の鐘楼の鐘の音が王都に響き渡ると、槍や剣などを手にした解放軍のメンバーが家々から飛び出し、メインストリートであるアンリ大路へ集まって来て、その数はあっという間に五〇〇〇人に膨らんだ。

解放軍は宿屋、肉屋、乾物屋、道具屋、呉服屋などの商人や鍛冶、大工、石工などの職人をはじめ、さまざまな職業の人やその従業員らで構成されていたが、なかには大聖堂に勤める魔道士、年端もいかない子供や老人や女性まで混じっていた。

アンリ大路を埋めた解放軍はそのまま喊声をあげながら、王都の街門である凱旋門に押し寄せて行った。

凱旋門はアカネイア軍が王都を支配する拠点として使用されていたが、ウプタ砦に主力部隊を駆り出されていて、騎馬部隊五〇、歩兵部隊三〇〇の兵しか残っていなかった。

ただならぬ鐘の音に驚いて飛び起きた兵士たちが、甲冑や武器の音も慌ただしく兵舎から門の前に飛び出したときには、すでに解放軍が目の前に迫っていた。

圧倒的な数の解放軍に気圧された兵士たちに、戦う気力はなかった。

兵士たちは慌てて跳ね橋を下ろして真っ先に逃げ出すと、解放軍は怒濤のようにそのあと

を追い、ウプタ砦を目指して橋を渡って行った。
大聖堂の鐘楼の鐘を鳴らしていたのは、大司教グルノワ卿の弟子たちだった。
アカネイア軍にアリティア城と王都を占拠された直後、大聖堂の大司教グルノワ卿はウィローに逮捕され、アリティア城の地下牢に閉じこめられているが、以来、大聖堂は大司教の弟子たちによって、細々ではあるがなんとか運営されてきた。
鐘楼から凱旋門の戦況を見ていた弟子たちは、跳ね橋を渡ってウプタ砦に向かって行く解放軍の姿を確認すると、鐘の音をゆっくりとしたいつもの間合いに変えた。
それは、王都で解放軍が勝利したことを連合軍と市民に知らせる合図だった。
その鐘の音が王都に鳴り響くと、王都に残った老人や女性たち一万人あまりの市民が棒や武器になりそうな物を手にし、王都を自衛するために凱旋門前を埋めた。

ウプタ砦の西側に広がる雪原では、連合軍とアカネイア軍の激しい攻防戦が繰り広げられていた。
連合軍が攻撃をかけると、砦の西門前で待機していた騎馬一五〇、歩兵六〇〇の部隊に、砦から飛び出した騎馬二五〇と歩兵一〇〇〇の軍が加わり、雪原は修羅場と化した。
だが、戦いが始まってほどなく、数で勝る連合軍が優位に立った。
とりわけ、先の戦争を戦いぬいた歴戦の戦士たちの活躍が目ざましかった。

アカネイア軍の兵士の断末魔の悲鳴と血飛沫が、真っ白な雪原を赤く染めた。
王都での解放軍の勝利を告げる大聖堂の鐘の音が聞こえてくると、連合軍の気勢がさらにあがり、アカネイア軍は防戦一方になった。
騎馬五〇と歩兵一〇〇を従えて砦の巡視路の上から戦況を見守っていたエイベルは、連合軍の予想以上の強さに言葉を失い、うろたえていた。
エイベルは連合軍と互角に戦えると踏んで突撃を命じ、連合軍の出端を挫いたあと、砦の攻防戦に持ちこむつもりでいたが、このままではアカネイア軍が壊滅するのはもはや時間の問題だった。
だが、いかに戦況が不利とはいえ、今ならまだ軍を撤退させることは可能だ。
なんとか砦の攻防戦に持ちこむことができる。
そうなれば、時間を稼ぎながら、アリティア城へ援軍を要請することもできる。
エイベルはやっと撤退を決断し、命令を出そうとした。
そのときだった、突然、後方から勇ましい雄叫びが聞こえてきた。
砦の東に雪に埋もれたカダイン街道が白い一本の帯のようにのびていて、その先にやはり雪に埋もれた王都と荘厳華麗なアリティア城の美しい景観が広がっている。
そのカダイン街道の白雪を踏み散らしながら、武器を持った大勢の市民たちが怒濤のように砦に向かって来たのだ。

その数は四〇〇〇、いや五〇〇〇はいる。
砦の兵士たちは、何が起きたのか理解できず、一瞬自分の目を疑った。
無理もなかった。市民が一斉に蜂起(ほうき)してアカネイア軍に立ち向かってくることなど、アカネイア軍のだれひとりとして想像だにしていなかったのだ。
だが、目の前の光景が紛れもない事実だと知ると、兵士たちに大きな衝撃が走った。積もり積もった怨念(おんねん)や憤怒(ふんぬ)を一気に爆発させながら押しかけて来る解放軍の圧倒的なエネルギーの前に、エイベルや砦の兵士たちは完全に気圧されていた。
この予期せぬ解放軍の出現で、エイベルは撤退の機を失ってしまった。
そして、アリティア城と砦を結ぶ唯一の道であるカダイン街道は解放軍によって完全に封鎖されたことで、エイベルはアカネイア軍が解放軍と連合軍に挟撃され、孤立していることを知らされた。
同時に、連合軍と市民がアカネイア軍の目の届かないところで深く結びついていたということに、連合軍と市民が手を組んでこの攻撃を仕かけたということに、その罠(わな)にまんまとはまってしまったということに、エイベルはやっと気づいたのだ。
エイベルの驚愕(きょうがく)や狼狽(ろうばい)は、やがて底知れぬ死の恐怖へと変わった。
連合軍との戦いのどさくさに紛れて逃げるには今をおいて他にない――咄嗟(とっさ)にそう判断したエイベルは、兵を見捨て、慌てて巡視路を転がるように下りて中庭に出た。

そのとき、ひとりの武将が颯爽と前に立ちはだかった。
「うっ!? き、貴様っ!?」
側近を連れたアストリアだった。
アストリアの留守に別部隊に配属された側近が、アストリアが逮捕されたと知ると砦に忍びこみ、アストリアを脱走させる隙を狙っていたのだ。
そして、今朝になって突如姿を現した連合軍が攻撃を始めると、その機に乗じて地下牢に飛びこみ、牢兵から鍵を奪い取ってアストリアを救出したのだ。
側近は連合軍やウィローの目の届かない安全な場所にアストリアを逃亡させようとしてこの行動に出たのだが、アストリアは自由の身になるだけでよかった。
アストリアの心はすでに決まっていた。
一昨日の夕、アストリアは、ジョルジュが祖国アカネイアを裏切って敵対するアリティア側についた理由をジョルジュから聞かされ、さらに「一緒に戦おう」とリンダにも説得されたが、決心がつかないまま馬を飛ばしてウプタ砦に帰って来た。
だが、思わぬ罪をかぶせられてエイベルに逮捕されたことで、アストリアは自分の立場を明確にしなければならない状況に追いこまれた。
ウィローやエイベルの命令におとなしく従うのか、それとも二人に敵対して徹底的に戦うのか、二者択一の決断を迫られたのだ。

二人と戦うことは、ハーディン皇帝に、祖国アカネイアに弓を引くことを意味する。
しかし、アストリアが今までアカネイアのために命を捧げてきたのは、ハーディンに忠誠を誓ったからではなかった。
王妃ニーナに忠誠を誓ったからこそ、アカネイアのために命を捧げてきたのだ。
今でもその気持ちに変わりはない。ならば、この先もニーナに忠誠を誓い、ニーナの命令に従おう——底冷えの厳しい凍てつくような暗い地下牢のなかでジョルジュとリンダの言葉を思い返しながら、アストリアはそう決心したのだ。
ジョルジュが言うように、マルスと行動をともにすることが、ニーナに忠誠を尽くし、命令に従うことなら、マルスと一緒に戦おう——と。
「ど、どういうことだ、アストリア！」
エイベルは苛立って怒鳴った。
「どけっ！　どかぬかっ！」
だが、アストリアはおもむろに剣をぬくと、
剣を構えた。その目には迷いはなかった。エイベルへの憎しみと怒りだけがあった。
「エイベル、覚悟！」
アストリアはアカネイア帝国で一番の剣の使い手として知られている。
とたんに、エイベルは脅え、

「あわわわっ！」
慌てて西門の方へ向かって逃げようとした。
だが、その前にすばやくアストリアの側近が立ちはだかると、
「こ、この通りだ、頼む！」
エイベルは震えながらアストリアに哀願した。
「命だけは助けてくれっ！」
ウィローに次ぐ権力者として、ウプタ砦と王都のアカネイア軍を指揮し、アリティア国民を苦しめてきた武将にしては、あまりにも情けない姿だった。
自尊心も誇りもない、己の身しか考えないこんな卑劣な男に今まで振り回されてきたのかと思うと、アストリアは余計腹立たしかった。
「ええいっ！　見苦しいぞ、エイベル！」
鋭い目で睨みつけたままアストリアが柄を握り直すと、
「く、くそっ！」
エイベルも自棄になって剣をぬき、
「貴様ーっ！」
猛然とアストリアに切りかかった。最後のあがきだった。
次の瞬間、剣を弾き返す乾いた金属音に続き、

前のめりになったエイベルの首を目がけて、渾身の力で剣を振り下ろしたのだ。
血飛沫とともに宙に舞ったエイベルの首が、鈍い音を立てて積雪の上に落ちた。
思わぬ突然の光景に、砦内のアカネイア軍の兵士たちは茫然と立ち尽くしていた。
その直後、砦への侵攻を死守しようとしたアカネイア軍の最後の部隊を打ち破ったマルスが率いる歴戦の戦士たちが、蹄音を轟かせて西門から雪崩こんで来た。
だが、砦内での激しい戦いを予想して突入して来たマルスたちは、武将の首を切り落としたばかりのアストリアの姿と、戦意を失い、驚きうろたえているアカネイア軍の兵士たちを見て、砦内で何が起きたのか一瞬理解できなかった。
しかし、真っ白な雪を真紅に染めている無残な首が、エイベルのそれだとわかると、
「アストリア！」
真っ先に馬から飛び降りたジョルジュがアストリアに駆け寄って、
「やっと決心したのだな！」
と、右手を差し出した。
一昨日の夕方、ジョルジュの前に突然現れたアストリアは、今までのアストリアからは想

「うわあああーっ！」
断末魔の叫びが砦に響き渡った。
素早く横に移動しながらエイベルの剣を弾き返したアストリアが、高々と宙に跳び、

像できないほど憔悴し、苦渋に満ちた顔をしていたが、今目の前にいるアストリアの顔からはその影が完全に消え、かつての精悍な顔に戻っている。
アストリアはジョルジュの手を強く握り返すと、
「マルスさま……！」
丁重にマルスの前に跪いて告げた。
「何も知らずにハーディン皇帝の命に従い、アリティア国民を苦しめたこと、深くお詫び致します。が、もしお許し願えるならば、ジョルジュ同様、ニーナ王妃の命に従い、邪悪なる者からこの世界を守るために、マルスさまとご一緒に戦うつもりでございます」
砦内に残っていたアカネイアの兵士たちはすでに武器を捨て、歴戦の戦士たちのあとに突入した連合軍に投降していた。
さらに、連合軍の兵が東門を開けると、どっと解放軍が雪崩こんで来て、あっという間に砦の中庭を埋めた。
東門の前には、砦に入りきれない市民が溢れていた。
また、西門前も、砦に入れない連合軍の兵士たちで埋まっていた。
生き延びたアカネイアの兵士たちはすでに遁走して姿を消していたが、地獄の血の海と化した雪原には、アカネイア軍兵士の屍が無数転がっていて、上空を血の臭いを嗅ぎつけた禿鷲の群れが獲物を狙って舞っていた。

やがて、砦内の市民たちの間から鬨の声があがった。
それがたちまちのうちに他の市民や連合軍の兵士たちに広がって地鳴りのように砦一帯に轟き、その声は王都までも聞こえたという。
そして、地下牢から救出されたアベルが、ロディとルークの若き騎士とバレルの三人に衰弱した体を支えられて中庭に姿を現すと、市民たちから大きな拍手が沸き起こった。
「アベル！」
すかさずマルスが駆け寄ると、
「大丈夫か⁉」
崩れ落ちようとするアベルの体をロディに代わって支えた。
拷問を受けたアベルの頬や額に、いくつもの鞭の跡が生々しく残っていた。
はい——反射的にそう答えようとして、アベルは激痛に思わず顔を歪めた。
傷口がまだ塞がっていないので、喋ることすらできないのだ。
また、傷の痛みからなにも食べることができず、一〇日もの間、布に浸した水だけを吸ってなんとか生きながらえてきたのだが、意識だけは、はっきりしていた。
「なにもかもおまえのお陰だよ！」
マルスはアベルを抱き寄せ、
「よくぞ王都のみんなをここまで組織してくれた！」

心から感謝の言葉を述べると、アベルは小さく何度も頷いた。

8

半時後、アリティア城の南側の対岸を、砦から移動した解放軍が埋めつくしていた。

そのなかにジェイガンやシーダたち女性陣の姿も混じっていた。

対岸から城へ行くには、一〇の跳ね橋を通って、海を渡らなければならないが、ウプタ砦の劣勢を伝えるアカネイア軍の兵士たちが、血相を変えてこの跳ね橋を駆けぬけたのを最後に、橋脚塔と橋脚塔の間に渡してあった跳ね板はすべてあげられ、対岸と城を結ぶ跳ね橋は完全に封鎖されていた。

そして、跳ね橋の先にそびえている三層建ての要塞である城門や、城壁の巡視路では、弓を構えたアカネイア軍の兵士たちが、固唾をのんで対岸の動きを見守っていた。

だが、ウプタ砦に総動員をかけたため、城を守っているアカネイア軍は、王都から遁走して来た兵を入れても、一五〇の騎馬と八〇〇の歩兵しか残っていない。

それに比べ、解放軍はその五倍近い大軍である。

数を誇示し、威嚇するだけで、効果は充分だった。

城は緊迫していたが、兵士たちは脅え、浮き足立っていた。

ウプタ砦の戦いで圧勝した連合軍もまた、アカネイア軍の犠牲者とは比較にならないが、三〇〇名あまりの死傷者を出している。
だが、残っている二四〇〇名の兵士たちは、対岸を埋めた解放軍とは別に、舟を調達するために、中海にある港や漁村に散っていた。

ウィローは愛用のやすりで爪を磨く余裕もなかった。
ウプタ砦が陥落し、激しく動揺している兵士たちに、
「ええいっ！　しっかりしろ！　なんとしても城だけは死守するのだ！」
と、檄を飛ばしたが、宮殿にある自室に戻ると、なにをするでもなく、せわしなく部屋のなかを行ったり来たりしていた。
連合軍の奇襲、解放軍の蜂起、砦の劣勢と、対応を練る間もなく次々に入ってくるその報せに、ウィローはただ驚きうろたえるだけで、アリティアの東方のグラに駐留しているアカネイア軍に援軍を要請することも、アカネイアの王都パレスへ緊急の早馬を飛ばすこともできなかった。
城の東側の小さな入り江にある波止場に、二隻の軍船が係留されていた。
檄を飛ばしたことの他にウィローがやったことといえば、この二隻の軍船をいつでも出航できるよう準備しておけ、と命じたことだけだった。

ウプタ砦が落ちた以上、もはや、作戦など、どうでもよかった。
あるのは、己の死への恐怖だけであった。
ウィローは自分が逃亡することしか、考えていなかった。
どうやったら生き残ることができるか、そのことだけが頭のなかを占領していた。
どんなに見苦しくてもいい。非難されてもいい。兵士たちをすべて見殺しにしてもいいから、自分だけはなんとかして生き延びよう――ひたすらそのことばかり考えていた。

対岸を解放軍が埋めてから一時半後、城内のアカネイア軍に新たな衝撃が走った。
五、六名の兵士が分乗した四五〇艘あまりの小舟が、ぞくぞくと城へ接近して来て、あっという間に西と北と東の三方の海上を埋めたからだ。
南側の対岸には解放軍がいる。城は完全に海上と陸の四方から包囲された。
西、北、東といずれの海上にもおよそ一五〇艘あまりの小舟がいるが、小舟は計ったように、城壁から二〇〇歩ほどの、弓の射程距離外のところで櫓をとめ、待機していた。
そして、王都の大聖堂の正午の鐘の音を合図に、一斉に攻撃する手筈になっていた。
そのときまで、また四分の三時ほどあった。
「ええいっ！　出航の準備はまだできぬのかっ！」
兵士の報告を受け、宮殿の向かい側にある総大理石の四角い天守塔に飛びこんで、三階の

窓から海上を見たウィローは、苛立って側近を怒鳴りつけた。
別の側近が出航の準備が整ったことを告げたのは、それから八分の一時後だった。
帆は風を大きくはらみ、二隻の軍船は出発を待つばかりだったが、軍船が出航することを聞きつけて殺到した兵士たちで波止場は騒乱状態になっていた。
兵士たちは我先にと先を争い、血走った目で軍船に雪崩こんだが、なかには前にいた者を引きずり降ろしたり、殴り合いを始める者もいた。
二隻の軍船の定員はわずか一〇〇名ほどだ。
軍の規則も秩序も統制も階級も、なにもなかった。
あるのは、己の可愛さ、生への欲望、執念だった。
乗り損ねた兵士の方がはるかに数が多かった。
軍船は定員の三倍近い兵士を乗せると、乗り損ねて大騒ぎする兵士たちを見捨てて波止場を離れ、入り江から海上に出た。
東の海上を埋めていた一五〇艘の小舟の連合軍も、驚きと戸惑いを隠せなかった。
軍船を防御する術がなかったからだ。小舟は軍船とは比較にならないほど小さいから、横波をもろに受けただけで転覆しかねない。激突すれば、粉々に破壊する。
一五〇艘の小舟は慌てて軍船を避けるとそのあとを追い、そのことに気づいた北の海上にいたおよそ一五〇艘の連合軍の小舟もそのあとに続いた。

だが、その直後、軍船の甲板を埋めていた兵士たちから大きなどよめきが起こった。
島陰から突如姿を現した三隻の大型帆船が、軍船に向かって航行して来たからだ。
見た目は普通の商船と変わりはなかった。
だが、船首には三隻とも同じ半裸の女神像が飾られていた。
そして、帆柱の先端では、桜の花を銜えた髑髏のマークの旗がなびいていた。
アカネイア大陸でこの旗を知らない海の男はいなかった。
海の男たちに、もっとも恐れられている旗だ。
この旗と船首飾りを見て、思わず顔を輝かしたのは、九箇月前に桜が満開のホルム海岸を訪れたマルスやアランたちだった。
三隻の大型帆船は、海賊スペリオ・レイソルの船団だった。
船団は速度を落とさずに二隻の軍船に向かって直進して来た。
軍船に激突するのではないかと思うほどの勢いだった。
その勢いに気圧され、軍船は慌てて帆をたたんだ。
それを見た船団も速度を落としながら軍船に接近すると、軍船の甲板にいた兵士たちはすかさず矢を射って攻撃し、船団も矢で応戦した。
しかし、海賊のそれは火矢だった。
たちまちのうちに、二隻の軍船は炎と黒煙に包まれ、兵士たちは騒然となった。

その隙に船団が軍船の甲板に船体をつけると、剣や槍をかざした海賊たちが次々に軍船に乗り移って、激しい戦いが始まった。
海賊の数は一五〇名あまりで、アカネイア軍の半分しかいなかったが、軍の規則も秩序も統制もなにもかも失っていたアカネイア軍とは気迫がまったく違っていた。
さらに、三〇〇艘あまりの連合軍の小舟が船団に接近すると、甲板から次々に縄梯子（なわばしご）が降ろされ、連合軍の兵士たちはそれを使って続々と船団に乗り移った。
そして、船団から軍船へ乗り移り、参戦して行った。
連合軍のなかでも先陣を切ったのはジョルジュとアストリアだった。
二人は、兵士たちを切り倒しながら、必死にウィローの姿を追っていた。
当然、どちらかの軍船に乗っているものと思っていたからだ。
だが、どちらにも、ウィローの姿はなかった。
戦いはあっという間に終末を迎えた。
「ありがとう、レイソル！」
マルスが手を差しのべると、
「運よくこの近くに来ていたものですから！」
レイソルは力強くその手を握った。
一〇日ほど前、レイソルの船団がアリティアの南東部にある小さな村に寄港したが、その

ときにレイソルはアリティア在住の配下の者から、アリティアの遠征隊がメロー砦を落とした、と聞かされたのだ。

そして、アリティア城と王都奪還の戦いに備え、この近くの島に来て、今日のこのときを待っていたのだ。

そのとき、正午を告げる王都の大聖堂の鐘の音が海を渡って鳴り響いた。

四分の一時後——。

海上での戦いに勝利したレイソルの船団と三〇〇艘の連合軍の小舟が、城の波止場や城壁の外の岩場に接岸したときには、シリウスとマリクが率いる連合軍が、軍船に乗り損ねたおよそ六〇〇名のアカネイア軍をすでに制圧していた。

正午を告げる鐘の音とともに、西の海上に待機していたシリウスとマリクが率いる一五〇艘の小舟が一斉に城に接近し、城壁を乗り越えて城内に突入すると、アカネイア軍の兵士たちは、すでに戦意を喪失していて、連合軍を見るとすぐ観念し、投降したのだ。

だが、ウィローの姿は城にもなかった。

城内でシリウスやマリクと合流すると、マルスは真っ先にウィローのことを尋ねたが、シリウスとマリクは、城に残っていたのは身分の低い兵士だけで、ウィローや側近などの幹部の姿はどこにもなかった、と告げた。

それを聞いたアストリアは、さっそく二〇〇名の捜索部隊を編成し、
「くまなく城内を捜せ！」
と、命じ、先頭になって飛んで行った。
連合軍によって城門前の跳ね橋の跳ね板がつぎつぎに下ろされ、一〇の跳ね橋が一本に繋(つな)がると、見ていた解放軍から思わず歓声があがった。
解放軍に促されて、跳ね橋を最初に渡ったのはジェイガンとシーダだった。
そのあとにチキやミネルバ、リンダ、マリーシア、フィーナたち女性陣が、さらに五〇〇〇名の解放軍が続いた。
シーダはマルスを見つけると、全身で喜びを表してマルスに抱きついた。
また、ジェイガンは、マルスに握手の手を差し出されると、
「マルスさま……！」
その手を握りしめ、言葉を詰まらせた。
地下牢から救出されたエストがパオラとカチュアの二人の姉に支えられながらマルスたちの前に姿を現すと、アリティアの戦士たちは心配してエストに駆け寄った。
八箇月に及ぶ長い捕虜生活でエストは痩(や)せて、青白い顔をしていたが、足取りはしっかりしていて、思ったよりも元気だった。
マルスはエストに労(ねぎら)いの言葉をかけると、

「すぐアベルのところへ連れて行ってくれ」
パオラとカチュアに命じた。
アベルは傷の手当てを受けたあと、王都の自宅で療養している。
二人はさっそく末妹を連れ、ペガサスで王都へ飛び去って行った。
さらに、大司祭グルノワ卿がロディとルークに地下室から救出されて出て来た。
そして、天守塔の尖塔（せんとう）からアカネイア帝国軍旗が降ろされ、代わってアリティア国旗が掲げられると、解放軍や連合軍から鬨（とき）の声があがった。
鬨の声は国歌の合唱に替わった。
アリティア城がアカネイア軍の手に落ちたことをマルスたちが知らされたのは、九箇月前の桜が満開のホルム海岸だった。
あれから九箇月、屈辱と苦難の長い旅の末に、やっと祖国を奪還したのだ。
遠征隊に参加した騎士たちは同じ感慨を胸に国歌を聞いていた。
ジェイガンは流れる涙をとめることができなかった。
ゴードンやドーガも、セシルやルーク、ロディ、ライアンら若き騎士たちも国歌を歌おうとしたが、涙で声にならなかった。
アランは、今までの人生のなかで、涙を流した記憶は一度もなかった。
父や母が死んだときでも泣かなかった。そのアランが涙を滲（にじ）ませていた。

また、カインの涙には特別なものがあった。
命に代えても守らなければならなかった城と国を一夜にして侵略され、その上、王女エリスまでも奪われたカインにとって、この九箇月間は、言葉では言い表せないほどの屈辱と苦悩の日々だった。激しく自分を責める毎日だった。
だが、今やっとその半分が解放されたのだ。
カインは人目も構わず声をあげて泣いていた。
国歌の合唱が終わると、マルスはジェイガンとアランとシーダとウェンデル司祭の四人を連れ、宮殿の地下室にある宝物殿(ほうもつでん)に向かった。
宝物殿の鍵(かぎ)は王家を継ぐ者だけが持っていて、マルスの首にかけてある神剣ファルシオンを象(かたど)った美しい蒼(あお)い宝石で作られた小さなペンダントがその鍵だった。
先の戦争でマルスの父コーネリアス国王は、暗黒竜王メディウスとグルニア王国の黒騎士団の手に落ちたアカネイアに向けて出陣したが、同盟国である隣のグラ王国まで軍を進めると、グラ王国の大軍の強襲を受けた。
このグラの裏切りによってアリティア軍は敗北し、コーネリアスは討ち死にした。
そのとき、コーネリアスの形見としてジェイガンがマルスのもとに持ち帰ったのが、このペンダントの鍵だった。
宝物殿の扉に神剣ファルシオンを象った窪(くぼ)みがある。

そこにペンダントの鍵を当て、ぴたりと押しはめると、おもむろに扉が開いた。
豪華な金や銀の器や燭台、高価な宝石類や宝石がちりばめられた指輪、首輪、腕輪、耳飾りなどの装飾品、名画、彫刻、陶器、美術品などが陳列されているそのなかの一番奥の棚のガラスケースに神剣ファルシオンがあり、その横に、両手にすっぽり収まるほどの大きさの美しい翠の珠が安置されていた。
五つの聖玉のひとつ、大地のオーブだった。
大地のオーブを持って宝物殿から出ると、アストリアが報告に来た。
やはり、ウィローの姿は城のどこにもなかったのだ。
だが、アストリアはウィローの追跡に異様なほどの執念をみせ、ただちにウィローの追跡部隊を組織させてほしいとマルスに申し出た。
そして、半時後、アストリアが指揮する一〇〇〇名の捜索部隊が幾手にも分かれて、アリティア中央部の町や村に飛んで行った。

アリティアには国をあげて行う大きな祭事が年に四つあるが、王都はそれらの祭りが一度に来たような賑やかさだった。
広場や通りは、国名を絶叫する人々や、国歌を合唱する人々、輪になってアリティア民謡を歌い踊る人々で、びっしりと埋まっていた。

また、祖国奪還の噂を聞き、近郊の町や村からも続々と人々が押しかけていた。
この日、王都は夜遅くまで、喜びに沸いた。
そして、あと八日で、アリティアは新しい年を迎えようとしていた。

この朝、アリティア北東部は新雪に覆われた。
その新雪を踏んで、山道を東へ向かうひとりの旅の男がいた。
あと二日も行けば、国境を越え、オレルアンの西部に出る。
首に巻いたマフラーが鼻まで覆っていて目しか見えないが、ぴんと伸びた背筋や、すでに半時も歩き続けているのに少しも乱れないしっかりした足取りから、三〇歳前の男と見受けられる。
と、男は前方に何者かの気配を感じて立ちどまった。
見ると、道端の木の陰に筵（むしろ）を被った老人が寒さに震えながら身を寄せている。
雪を払う元気もないのか、今朝降った新雪を被ったままだ。
老人は脅えた目で探るように男を見ていた。
頬（ほお）は痩（や）せこけ、頭髪は脂気がないばさばさの白髪だ。
行き倒れ寸前のみすぼらしい老人だった。
その老人の顔を見て、男の目に一瞬戸惑いの色が宿った。

「すまぬが……食べるものを……恵んでくれ……」
老人は絞り出すようにやっと言った。
「五日も……なにも……口にしておらん……」
男はじっと老人を見据えると、
「ウィロー殿か……？」
「うっ……？」
老人は脅え、逃げ腰になって尋ねた。
「だ、だれだ……？」
「やはり、ウィロー殿か……」
ウィローは今年五〇歳になる。黒々とした頭髪と、肌艶（はだつや）や血色のよさから、年齢よりも四、五歳は若く見えたが、その面影（おもかげ）はどこにもなかった。
張り詰めた風船が一瞬にして萎（しぼ）んだように、体がひと回りも二回りも小さくなっていて、どう見ても七、八〇歳の老人にしか見えないが、紛れもなくウィローだった。
男は鼻まで覆っていたマフラーをずり下ろして顔を見せると、
「お、おまえは……！」
ウィローの顔がはっと明るくなった。
男は、師であるウェンデル司祭の抹殺の企（たく）みがばれ、聖都カダインから突如姿を消したエ

ルレーン・カルロスだった。
同じオレルアンの出身である二人はエルレーンが子供のころからの顔なじみだった。
それに、同じ魔道の道に進んだ大先輩と後輩である。
また、昨年、カダイン魔道軍とアカネイア軍が王都パレスで友好条約を結んだが、そのときも二人は会って親交を深めている。
「た、助けてくれ……エルレーン……。オレルアンまで……頼む……。そうしたら、おまえの……望む通り……なんでもしてやる……」
ウィローは両手を合わせ、涙を流しながら哀願した。
とたんに、エルレーンの目に悲しみの色が宿った。
人間の尊厳もなにもない、ただ哀れなだけの男の姿が、その目に映っていた。
エルレーンが袋から乾パンをひと切れ取り出してウィローの前に放り投げると、ウィローは目の色を変え、両手で鷲摑み（わしづかみ）にしてそれを拾い、むしゃぶりついた。
あの日――出航しようとした軍船に兵士たちが群がったのを見て、ウィローは咄嗟（とっさ）に二隻の軍船を囮（おとり）にしようと思いつき、三人の側近を連れて城の北側の岩場に逃げこんだ。
そして、連合軍の小舟が城に接岸したあと、隙を見て小舟を一艘盗み、北の海上の小島を目指して北上した。
城の北部の丘に天守塔や宮殿があるため、その陰に隠れて北の海上は西や東のそれよりも

目につきにくい。
　また、北の海上には大小さまざまな島が点在している。
　小舟で島の間を縫いながらその日の夕方近くに中海の対岸に到着すると、ウィローはひたすら北へ向かった。
　アリティアの北東部からオレルアンへ出て、アカネイアへ行くつもりだった。
　だが、日を追うにつれ、食料が底をついてきた。
　また、連合軍の捜索部隊が目の前の街道を通過するのを目撃すると、その不安と恐怖と焦燥から、ウィローの苛立ちとわがままがさらに激しさを増し、我慢できなくなった側近たちがついにウィローを見捨てて逃げてしまったのだ。
　ウィローがひとりっきりになって、今日で六日目だった。
　そのわずかの間に、極度の緊張と疲労と憔悴と飢えから、頬がげっそりと落ち、黒々としていた頭髪が見る見るうちに真っ白になったのだ——。
　エルレーンは流浪の旅を続けながら、魔道士としての修行を積んでいた。
　それが、魔道士としてあるまじき罪を犯した自分へ科した罰だった。
　エルレーンがアリティアへ来たのは一箇月ほど前で、その間ずっとアリティアを回っていたから、アリティアの情勢には詳しかった。
　マルスが率いる連合軍がアリティアをアカネイア軍から奪還したことも、連合軍の捜索部

隊がウィローを追跡していることも、数日前に通りがかった村落で聞いていた。
乾パンを呑みこんだウィローが、もうひとつねだろうとして、エルレーンを見あげたときだった。突然、鋭い閃光（せんこう）が宙を切り裂いた。
次の瞬間、山間（やまあい）に断末魔（だんまつま）の叫びが響き、血飛沫（ちしぶき）が新雪を真紅に染めた。

王都の対岸の跳ね橋のたもとに無造作（むぞうさ）に捨てられて北風に吹かれていた「それ」を最初に発見したのは、夜明け前に王都を旅立とうとした旅の商人だった。
商人は訝（いぶか）りながら「それ」の数歩手前まで近づくと、思わずぎょっとして飛びのき、悲鳴をあげながら王都の街門の警備兵のところへ駆けこんだ。
「それ」は、どす黒く変色した老人の斬首（ざんしゅ）だった。
やがて、噂（うわさ）を聞いた王都の人々がやって来て、遠巻きにこの斬首を見ながら、もしかしたらウィローではないだろうかと囁（ささや）き合った。
斬首を路上に晒（さら）されるのは、一国の頂点に立つような、身分の高い者に限られているからだ。
その報（しら）せを聞いて城から駆けつけたのはアストリアだった。
アストリアは必死にウィローの捜索をしていたが、なんの手がかりもないまま、捜索は暮れの晦日（みそか）に打ち切られたままになっていた。

「それ」を見て、アストリアはあまりの凄まじい形相(ぎょうそう)に驚いた。
鬼神か魔神が宙を睨(にら)みつけるようにかっと両眼を見開き、口は助けを求めるように大きく裂けて歪(ゆが)んでいる。頬は異様なほど痩せこけていて、しかも、頭髪は真っ白だ。
たしかによく見ればウィローに似た顔立ちをしているが、ウィローの生前の面影はどこにもなかった。顔だけからではウィローだと断定しかねた。
だが、「それ」は小さな細長い金属の棒のようなものを口に銜(くわ)えていた。
いや、正確に言えば、銜えたのではなく、何者かによって差しこまれたのだ。
ウィローが愛用していた爪磨きのやすりだった。
新しい年が明けた一〇日目の朝のことだった——。

第10章　グラの落日

1

グラは、アカネイア大陸の国のなかで、アリティアに次ぐ小国である。アリティアとアカネイアの間に位置し、東西に長い、豌豆豆(えんどう)のような地形をしたグラ島がその国土のほとんどで、広さも人口もアリティアの半分にも満たなかった。
島は北側の山岳地帯と南側の平坦地(へいたん)に分かれていた。
この南部の平坦地のほぼ中央をカダイン街道が東西に貫いてい、およそ一〇〇ある町や村の集落のほとんどが、この街道沿いにあった。
このカダイン街道を、一五〇〇名のアリティア・グルニア・カダインの三国連合軍が、アカネイアを目指し、東へ向かって行軍していた。
アカネイア大陸は、冬の一番寒い時期を迎えていた。

はるか北方の山脈から吹きつける雪まじりの凍てつくような寒風が、地鳴りをあげ、容赦なく連合軍を襲ってくる。
連合軍がアリティア城を出発したのは一の月の二五の日のことだった。
出発に当たって、マルスは城と国をアベルに託し、カインに同行を命じた。
本来ならカインに託すところだが、カインは、留守を任された城と国をアカネイア軍に侵略され、その上、王女エリスまで奪われたことから、長い間、二重の自責の念に苦しんでいたからだ。
祖国を奪還したことで、いくらかはカインの気持ちも救われただろうが、自らが参加してエリスを救出しない限り、その苦しみから永久に解放されないだろうと考え、同行させることにしたのだ。
アベルもそのことを理解し、わたしでよかったら――と快諾してくれた。
また、祖国奪還のために戦った全国から招集した予備兵のなかから、新たに六〇〇名の志願兵を募り、連合軍として同行させた。
そして、四日前に国境の海峡にかかる石橋を越え、グラ唯一の要塞であるツベル砦まであと半日のところに来ていた。
すでに夕闇が迫っていたが、今夜、通常の野営をしても、明日の昼には到着できる。
この砦から王都グラまでは、徒歩でわずか一時の行程しかなかった。

王都は風光明媚なところとして知られている島の東端の内海に面してい、この内海に突き出た小高い丘の上に、グラ王家の居城であるグラ城があった。
かつて、グラはアリティア国の一地方にすぎなかったという。
暗黒竜王メディウスを倒して世界に平和をもたらした英雄アンリが、第一九代アカネイア国王カルタスにアリティア地方を与えられてアリティア王国を建国したが、そのときグラ島はアリティアの領土に含まれていた。
その後、アンリが実弟のマルセレスに国王の座を譲ると、実妹のシエールにもグラ地方を分け与え、独立させた。
以来、二つの国は兄妹国として、同盟国として、互いに協力しながら発展してきた。
だが、五年前、永い眠りから覚めたメディウスがドルーア帝国を再建し、カダインの大司祭ガーネフと手を組んで、アカネイア王国を制圧すると、その報せを受けたマルスの父であるアリティア第四代国王のコーネリアスが、騎士団一〇〇騎と三五〇〇名の兵士を率いてアカネイアへ出陣した。
ところが、同盟国である隣国グラまで軍を進めると、グラ国王のジオル将軍が、四〇〇〇名の大軍を率いて、アリティア軍を強襲したのだ。
その舞台となったのがツベル砦であった。
このグラの思わぬ裏切りにあって、アリティア軍は壊滅し、コーネリアス国王の討ち死に

とともに、アリティアもまたあえなく滅亡してしまった。
その後、タリス国へ逃げのびていたマルスが、アリティア騎士団の残党を率いて立ちあがり、壮絶な戦いの末に、メディウスを倒して再びこの世に平和をもたらしたが、のちに「暗黒戦争」と呼ばれる先のこの戦争で、マルスの連合軍がジオル将軍を倒し、グラもまた滅亡した。
戦後、王女ニーナの提案で、アリティアがグラを統治することになったが、ニーナと結婚してハーディンが皇帝に即位すると、ジオル将軍の長女のシーマを擁立して、グラは独立して本来の姿に戻るべきだと主張し、ハーディンに全幅の信頼をおいていたマルスは、なんの疑いもなくそれを受け入れた。
今年二四歳になるシーマとは、先の戦争が始まってからマルスは一度も会っていないが、隣国として、兄妹国として、子供のころは互いにアリティアとグラを行き来し、一緒に遊んだ仲だった。
だから、ハーディンが独立を主張したとき、責任感が強い気丈なシーマなら、なんとかグラを再建するのではないかと、マルスもエリスも期待すらした。
だが、シーマを擁立してグラを独立させたのは、アリティアからグラを奪うためのハーディンの陰謀だった。
そのことを、海賊レイソルの船団に乗ってカシミア海峡から聖都カダインへ逃れる途中、

ジョルジュから聞かされたときには、さすがのマルスも驚きを隠せなかった。
王女シーマは単なる飾りだった。傀儡でしかなかったのだ。
ハーディンはグラを独立させると、エイベル将軍をシーマの後見として派遣し、働き盛りの男たちを雑役や荷役、奴隷としてアカネイアへ強制的に連行し、その数はわずか四箇月で一万二〇〇〇名にも及んだという。
その後、エイベルはアカネイアから軍船を連ねて来たウィローと合流し、アリティアを襲撃して占領下においたのだ。
また、連合軍のアカネイアへの遠征の準備が整うまで、先の戦争を戦いぬいた戦士たちはアカネイア城で何度も会議を開いたが、最初の会議の席上でアストリアが、アリティアの遠征隊を壊滅した暁には、ウィローはアリティアを、エイベルがグラをハーディンから与えられる約束になっていた——と、証言した。
そして、アリティアのアカネイア軍が壊滅した今、アカネイアからの援軍がない限り、グラに駐留しているアカネイア軍は、エイベルがウィローと合流してアリティアに向かったときに残して来た騎馬部隊一〇〇と歩兵部隊三〇〇だけだろう——とも。
エイベルと並び、ウィローに次ぐ地位にあっただけに、その情報は正しかった。
ツベル砦には、四〇〇名近いアカネイア軍が駐留していた。

アストリアが睨んだ通り、これがグラに駐留しているアカネイア軍のすべてだった。

そして、夕闇のなかを蹄音を轟かせながら砦に帰って来た偵察兵によって、一五〇〇名の三国連合軍がカダイン街道を東上し、明日の昼前にも砦に到着する――という報せがもたらされると、兵士たちは恐怖に脅え、騒然となった。

アリティアのアカネイア軍が壊滅し、エイベルが戦死したという報せは、ウプタ砦とアリティア城が陥落した五日後に、西からやって来た旅の者によって砦にもたらされたが、そのときは半信半疑だった。

だが、その数日後、戦場から遁走して来た瀕死の兵がたどり着き、やっとそれが事実だと確認できた。

それから今日まで、彼らがやったことと言えば、慌ててアカネイアへ使いの馬を走らせただけで、あとはひたすらうろたえていた。

さらに、一五、六日ほどして、ウィローの斬首が発見されたという噂が、やはり西からやって来た旅の者によってもたらされると、兵士たちの不安はさらに増した。

そして、今日の連合軍接近の報せである。

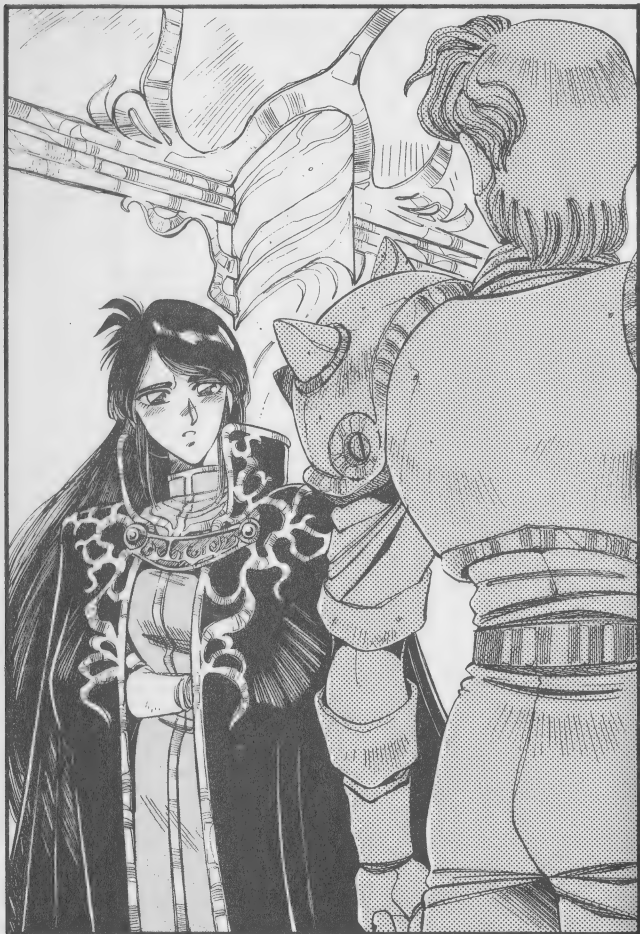
相手は一五〇〇の大軍である。砦のアカネイア軍の四倍近い。

アリティアの精鋭を中心とした連合軍相手では壊滅するのは目に見えている。

兵士たちは完全に浮き足立っていた。

部隊長は必死に檄を飛ばしたが、その声が虚しく響くだけだった。
きっかけを作ったのはひとりの兵士だった。
死の恐怖に脅えた兵士が脱兎の如く砦の東門をぬけてカダイン街道を駆け出すと、すぐさまそのあとに数人が続いた。
あとは、競争だった。兵士たちは一斉に東門に殺到すると、堰を切ったようにカダイン街道を遁走して行った。
なかには食料蔵に飛びこみ、食料をあさってから、そのあとを追う者もいた。
半時後、夜の帳に覆われたツベル砦から完全に人影が消えていた。
砦を吹きぬける、風の鳴る音だけが聞こえた。

その報せがグラ軍の兵士によってグラ城のシーマのもとにもたらされたのは、アカネイア軍がツベル砦から遁走してから一時後のことだった。
「なんてやつらだ……」
シーマと一緒にいた体軀のいい屈強の男が忌ま忌ましそうに舌打ちした。
「勝手なことをしていながら、いざとなると尻尾を巻いてさっさと逃げる」
アリティア出身で、槍の使い手として知られていたサムソン・ベラールだった。
先の戦争で、サムソンはジオル将軍に頼まれてシーマを故郷のアリティアに匿ったが、そ

れが縁で、グラ国が独立するとシーマの側近として雇われ、ずっとシーマのそばにいてシーマを守ってきた。
「どうする？」
サムソンがシーマに尋ねた。
「やるなら、おれひとりでも最後まで戦ってやる」
「いや……」
シーマは首を横に振った。
城を守っているグラ軍はわずか八〇名にすぎない。
「アカネイア軍と軍事協約を結んでいるとはいえ、それはハーディン皇帝によって一方的に押しつけられたもの。それなのに、アカネイア軍はその義務も果たさずに、連合軍を前にして遁走した。そんな協約のために、なぜ、わたしたちが無駄な血を流さねばならないの。わたしには、わたしに忠誠を誓い、わたしのために働いてくれたあの者たちを見殺しにすることはできない……」
「ならば、どうすると……？」
「サムソン……おまえには迷惑をかけた……」
シーマはサムソンを見つめた。
「わたしには構わず、もう行ってくれ……。わたしには、グラ王国の最後の者として、やら

ねばならぬことがある……」
「いやだ……と言ったら……？」
「もう、おまえを雇う金もない」
「金はいらぬ」
「では、なぜそこまで……？」
「ただ、もう少しあなたのそばにいたい……」
サムソンはシーマを見つめたまま答えた。
「あなたがこのグラをどうするのか、見届けたい……」

2

翌昼——。
ツベル砦での戦闘を覚悟して砦に接近した連合軍は、もぬけの殻の砦を見て驚いた。
マルスたちはグラ城の守りを固めるためにアカネイア軍は慌てて砦を引きあげたのだろうと解釈したが、引きあげたにしては、あまりにも腑(ふ)に落ちないことが多すぎた。
軍の象徴であり、軍にとって最も大事なもののひとつであるアカネイアの軍旗が、中央塔の尖塔(せんとう)に掲げられたままになっていた。

また、兵が引きあげたあとは、食料や武器もすべて持ち去って、砦内は整然としているはずなのに、食料蔵は荒らされたままになっていたし、武器蔵には武器類が手つかずのまま残っていた。
生活していた形跡も、砦内のあちこちにそのまま残っている。
ある瞬間を境に、忽然（こつぜん）とアカネイア軍が姿を消してしまったとしか思えなかったが、その真相を知るまで、連合軍はほんの少しだけ待たなければならなかった。
砦内をひと通り調べ終えると、黙禱（もくとう）のために連合軍は中庭に集合して来た。
五年前――この砦が忌（い）まわしい悲劇の舞台となった。
マルスの父、コーネリアス国王が率いる三六〇〇名のアリティア軍がアカネイアを目指してカダイン街道を東上し、この砦の西門に到着した直後のことだった。
砦に迎え入れるはずのジオル将軍率いる一〇〇〇名のグラ軍が、突然、矢の嵐を浴びせ、猛攻撃をかけてきたのだ。
さらに、驚きうろたえ、逃げ惑うアリティア軍の背後から、グラ軍とドルーア軍の三〇〇〇名の連合軍が襲撃して来て、アリティア軍を挟み打ちにした。
そして、激しい戦いの末、コーネリアスは討ち死にし、多くのアリティア兵士がこの地の露と消えた――。
その故コーネリアスと戦死したアリティアの兵士たちの冥福（めいふく）を祈って、連合軍は黙禱を捧

げた。

時折、寒風が吹きぬけて行くが、この時期にしては珍しく空は晴れあがっていた。

やがて黙禱が終わると、それを見計らったように、カダイン街道の東から、グラ軍の兵士が砦に向かって馬を飛ばして来た。

使いの兵士はシーマの親書をマルスに差し出した。

親書には、お会いして話をしたい――と、したためてあった。

また、兵士から連合軍の攻撃を恐れたアカネイア軍が砦から遁走したことを聞かされ、燻(くすぶ)っていた疑問がやっと解決した。

一時後、連合軍は王都の街門を潜(くぐ)った。

王都はグラ最大の都市で、グラの政治、経済、文化の中心として栄えてきた。

だが、かつて大勢の人で賑(にぎ)わっていた目抜き通りは閑散と静まり返っていた。

廃墟(はいきょ)になった建物が目立ち、商店のほとんどは店を閉めている。人影もまばらだ。

疑問に思ったドーガがさっそく飛んで行き、街の人から情報を聞いて来て、マルスに報告した。

先の戦争でグラが滅亡してから、王都から物や食料が消え、人々は飢えに耐えきれずに次々に王都を捨てて逃げて行き、かつて九〇〇〇人あった人口が、今では一〇〇〇人にも満

たないという。
だが、王都だけでなく、どの町も村もそのような状況にあるという。
特に、グラが独立して、働き盛りの男たちがアカネイアに強制連行されるようになってから、農作物の収穫量は、最悪だった先の戦争のときよりもさらに落ち、ほとんどないに等しいという。
そして、驚いたことに、寒さと飢えから、この冬だけで五万もの人が死んだという。
そのため、集落ごと壊滅した町や村はいたるところにあるという。
カダイン街道をひたすら行軍して来たために、マルスたちは周囲の町や村にあまり注意を払わなかったが、言われてみれば、畑は放置されたままになっていたし、街道沿いの集落はどこも死んだようにひっそりとしていて、人影はほとんど見なかった。
グラは想像を絶する凄まじい惨状におかれていた。
大聖堂前の広場をぬけると、内海に突き出た小高い丘の上に建つ華麗なグラ城の天守塔が見え、やがて目の前に、掘り割りにかかる跳ね橋とその先にある城門が現れた。
二年前――この城門を突破したマルスの率いる連合軍が、グラ軍を倒し、ジオル将軍の首を討ち取っている。
眺望の素晴らしさはグラ城の自慢のひとつだった。
前には王都の美しい町並みが、背後には風光明媚な内海が広がっている。

ジェイガンを連れて天守塔の前にある宮殿のシーマの居室に行くと、サムソンを従えてマルスを出迎えたシーマは、懐かしそうに微笑むマルスに、思わず目を見張った。
最後に二人が会ったのは、マルスが一三歳、シーマが一七歳のときだったが、一三歳だった少年が、逞しくて、凛々しくて、魅力的な若者に成長していたからだ。
一方のシーマも、少女の面影を残す、魅惑的な成熟した女性に変貌していた。
「あなたに会ったら……」
先に口を開いたのはシーマだった。
「まず父のことを謝りたかった……」
父ジオルを殺されてシーマは自分を憎んでいるとマルスは思っていたのに、シーマはそんなことはおくびにも出さずに言った。
思いもしないシーマの言葉にマルスもジェイガンも驚いた。
シーマだって、父ジオルの死は、子として、それなりに悲しかった。
だが、それ以前の問題として、アリティアを裏切ったジオルを、当時一八歳になったばかりのシーマは許せなかったのだ。
そのことがずっとシーマの重荷になっていた。
「今のわたしは、将軍になんのこだわりも持っていない」
マルスが答えると、今度はシーマが驚いたようにマルスを見た。

たしかに、父コーネリアスがジオルの裏切りによって討ち死にしたと聞かされたときから、マルスは激しくジオルを、そしてグラを憎んだ。憎んでも憎み切れなかった。
だが、二年前、このグラ城でジオルの首を討ち取ったとき、不思議なことにマルスはなんの喜びも感じなかった。
逆に、虚しさと、悲しさと、どうしようもない怒りがこみあげてきた。
ジオルも憎かったが、ジオルをそのようにさせた者がもっと憎くなった。
「ただ、ある一部の者の欲望のために、将軍のように自分が望まないことをせざるを得なくなる者がいることが、悔しい。そのように仕向ける者こそ許せない」
「ありがとう……」
ジオルを責めようとしないマルスにシーマは感謝した。
「先の戦争であんなことになって、とても辛かった」
マルスが言葉を続けた。
「でも、グラとわがアリティアは、もともとひとつの国だった。二つに分かれてからも、兄妹国として、同盟国として、仲よく助け合いながらやってきた。だから、これからもそうでありたい」
「ええ……」
シーマは頷（うなず）いた。

「でも、わたしにはその能力もなければ、資格もない……」
「しかし、あなたはグラ王家の血を引くただひとりの者。先頭に立ってこのグラを救うのはあなたをおいて他にない」
「わたしもそう思っていた。だから、国の再興を願うグラの人々のために――ハーディン皇帝にそう言われたときに、心が動いた。ほんとうに、グラの人々のためになんとかしたいと思った。でも、ハーディン皇帝は、わたしにグラを独立させると、エイベル将軍を送りつけて、このグラを利用するだけ利用した。それに対して、わたしにはなにもすることができなかった。ただ、皇帝やアカネイア軍の言うなりになるしかなかった。そのために、グラの国民を苦しめ、国民を救いようのない地獄のどん底まで突き落としてしまった。こうなった以上、あなたにお願いするしかない。どうか、グラの国民を、アリティアの国民として受け入れてほしい……」
「しかし……」
「それが、グラの国民のためなのです。グラの地を再建し、多くの国民が人間らしい暮らしを取り戻すには、マルス……あなたをおいて他にない」
シーマの決意は固かった。
「わかりました。でも、わたしには、果たさなければならない大事な使命がある。その使命を果たすまで、わたしに代わって、あなたにこのグラを再建してほしい。もちろん、わたし

もできるだけのことはする。アリティアも余裕はないが、グラの惨状に比べれば、まだまだ恵まれている。ただちに食料や物資を送らせ、ひとりでも多くの命を救いたい。だから、せめてわたしが使命を果たすまで……」
「マルス……」
「あとのことは、そのときまた考えよう」

一時後――。
「よかったな、シーマ」
城門を出て行く連合軍の隊列を、宮殿のシーマの居室の窓から見送りながら、サムソンが言った。
「これでおれも心おきなく立ち去ることができる」
「行ってしまうのか、サムソン……」
「もう、おれには用がない。あとはマルス王子が守ってくれる」
サムソンが踵(きびす)を返して扉へ向かおうとすると、
「行くな……」
シーマがサムソンの服の袖(そで)を摑(つか)んだ。
ぎゅっと袖を握りしめたシーマの手が震えていた。と、

「行かないでほしい……」

いきなりサムソンの大きな背中に抱きついた。

先の戦争で、シーマがサムソンの故郷に匿われたときから、二人は互いに好意を抱いていたが、二人ともそれを言葉や態度に表したことがなかった。

また、一地方の郷士の三男と王女ではあまりにも身分が違いすぎるので、サムソンには遠慮があったし、諦めの気持ちもどこかにあった。

だが、シーマは今、身分の差に関係なく、ひとりの女として男に愛を求めている。

ならば――と、サムソンは思った。

自分もひとりの男として、己の心に素直に従い、その愛に応えなければ――と。

サムソンはそっとシーマを離すと、熱い眼差しでシーマを見つめた。

見つめ返すシーマの目に涙が滲んでいた。

「おれが必要というのなら、どこにも行かぬ。いかなることがあろうと、おまえを守ってみせよう。それでよいのだな……」

サムソンはひしとシーマを抱き寄せた。

王都を出た連合軍は、カダイン街道を北東に向かって進んでいた。

そして、なだらかな丘陵地の峠に差しかかると、マルスは王都を振り返って見た。

夕陽(ゆうひ)を浴びてきらきらと輝いている内海と、落ち着いた色調の町並みと華麗なグラ城の陰影が、鮮やかな対比を見せていて、まるで美しい一枚の絵のようだった。
だが、やがて、この落日のあとに、深い夜の闇が訪れる。
それは、皮肉にも、今のグラの状況を象徴していた。
グラは、滅亡と独立を経て、凋落(ちょうらく)の一途をたどった。
そして、グラ史上最悪のときを迎え、再建の道は困難を極めている。
どれだけの長い年月を要するか、マルスには想像がつかなかった。
しかし、深い夜の闇のあとに、必ず夜明けはやってくる。
ぜひグラにもそうなってほしかった。
しばらく峠を下ると、連合軍に緊張感が走った。
目の前にグラ海峡にかかる国境の橋が姿を現したからだ。
そして、その先に、広大なアカネイアの大地が横たわっていた。

——第四巻に続く——

スーパークエスト文庫

ファイアーエムブレム

紋章の謎

VOL.3

1995年7月1日　初版第1刷発行
定価はカバーに表示してあります。

著　者
高屋敷英夫
編　集
久保田あゆみ(MASK)
久保雅一(小学館)

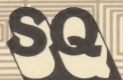
発行者
田中一喜
発行所
株式会社　小学館
〒101-01　東京都千代田区一ツ橋2－3－1
編集 03(3230)5998　　販売 03(3230)5739
印刷所
共同印刷株式会社

ISBN4-09-440223-3

小説／**高屋敷英夫**（たかやしきひでお）

岩手県出身。脚本家。『ルパン三世』『あしたのジョー』『めぞん一刻』映画『はだしのゲン』『火の鳥』シリーズ、『がんばれ!!タブチくん!!』シリーズなど数多くの人気アニメやアイドルドラマの脚本を手がける。著書に『小説スケバン刑事上・下』『小説ドラゴンクエスト』シリーズなど。

イラスト／**おち よしひこ**

昭和36年９月26日、東京都に生まれる。昭和59年、『ゾイド創世紀』（月刊コロコロコミック）でデビュー。
代表作『Ｇｏ！Ｇｏ！ミニ四ファイター』『スーパービックリマン』ほか。

ISBN4-09-440223-3

C0193 P550E

定価550円
（本体534円）

SUPER QUEST BUNKO